

產政塾

XIX

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目次

● 産政塾XIXの発刊によせて

(財) 中部産業・労働政策研究会 東 正 元

● Life is beautiful 1

アイシン精機株式会社 新 金 恵 介

● 産政塾を振り返って 11

東邦ガス株式会社 泉 祐 輔

● 「産政塾に参加して感じたこと」 19

トヨタ紡織株式会社 上 田 治

● 「気づき」「改革」「体験」 27

ジェイテクト労働組合連合会 大 田 秀 幸

● かけがえのない時間 35

松坂屋労働組合 荻 野 聡 子

● 産政塾参加にあたり 41

関東自動車工業株式会社 小 澤 真 純

● 『いっころ』.....	51
---------------	----

● 産政塾を振り返って.....	59
株式会社東海理化	小野 彰之

● 「殻探し」の旅を終えて.....	67
デンソー労働組合	北村 美帆

● 「私を変えたメンバーからの言葉」.....	77
アイシン労働組合	日下 喜与美

● 産政塾誌によせて.....	87
株式会社デンソー	熊谷 靖公

● 『旅の途中で』.....	93
全ユニー労働組合	近藤 智也

● 殻の外へ踏み出せた?!産政塾の活動.....	103
名古屋鉄道労働組合	坂西 記明

● 第19期産政塾を振り返って.....	111
刈谷市役所	佐々木 麻子

豊田合成株式会社	高橋 慎二
----------	-------

● 『産政塾に参加して』	丸栄労働組合	筑尾 康 範	119
● 産政塾を振り返って	豊田市役所	中 條 圭 祐	131
● 「殻」と「情熱」	トヨタ車体労働組合	塗師尾 充	141
● 『産政塾』卒業に寄せて	中部電力株式会社	中和田 教 仁	151
● 出会いと感謝	豊田自動織機労働組合	堀 内 清 明	163
● 産政塾で培われた絆について	東邦ガス労働組合	松 浦 秀 登 志	171
● 産政塾を通して学んだこと	愛知製鋼株式会社	松 尾 康 史 郎	179
● 殻を破り続ける「心がまえ」とは	中部電力労働組合	三 田 地 勇 也	189

● 産政塾を振り返って.....				197
● 「殻の外に踏み出した？」 以前と今、そして今後.....		トヨタ車体株式会社	皆川 和孝	207
● 「育つ」とは「育てられる」とは.....		トヨタ自動車労働組合	森下 宏浩	215
● 産政塾を振り返って.....		株式会社豊田自動織機	柳 瀬 翼	225
● 産政塾の活動を振り返って.....		東海理化労働組合	山口 久雄	233
● 『第19期産政塾の感想』.....		トヨタ自動車株式会社	吉 清 一 博	243
● 産政塾活動記録.....		産政塾事務局	松 井 英 治	255
● 歴代卒業生.....				271

産政塾XIXの発刊によせて

(財)中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十九期の活動を修了し、今年も二十八名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の時代を担う二十名あまりにご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に外向いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができるとなり、産政塾は言わば「自らを磨く道場」というようなものであります。

今回も産政塾への参加者は三十才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第十九期にあたる二〇〇八年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人ひとりが新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十九期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありませんが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思つて発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとつても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様にご感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いです。

『Life is beautiful』



アイシン精機株式会社

新 金 恵 介

《プロフィール》

あらがね けいすけ

- 1979 年 奈良県生まれ
- 2003 年 アイシン精機人材開発部
リクルートG配属
- 2006 年 人材開発部 人材企画G配属
現在に至る

〈家族構成〉妻

〈趣味〉サッカー、旅行、一発芸

はじめに

第19回産政塾が閉塾して早3カ月。この塾誌作成を、これまでの会社生活を振り返る良き機会と捉え、産政塾のテーマ「殻を破って外に踏み出そう」に関する私の入塾前と卒業後の考え方の変遷を振り返りたい。特に、実際の行動を通じて感じた気持ちの高揚や、学び、気づきを中心に述べ、最後に、産政塾での経験を今後どのように活かしていきたいかを誓って塾誌のまとめとしたい。

第1章 殻を破るとは

「殻を破って外に踏み出そう」

「殻」とはどういうことか。第19期産政塾への参加が決定して、辞書を引いてみた。

(大辞泉より抜粋)

1. 動物のからだや植物の実・種子をおおう堅いもの。

2. 外界から自己を守る外壁。その外壁に守られた世界。

その他いくつかの意味があつたが、二つ目の定義が当時の私を表現している。当時の仕事への姿勢やモラルをこの定義に当てはめると、「周囲の事柄に波風立てず粛々とした日々を過ごす」と言えるだろう。仕事ははじめに取り組み努力もしていたつもりであるが、熱い議論を交わしたり、本音の

意見をぶつけ合うことには消極的だった。また会社生活を数年経験して仕事や職場にもある程度慣れて、今一つ、新入社員の頃のような初々しい気持ちを保てずにいた時期である。

この点を踏まえ、私は産政塾への参加にあたり二つの思いを抱き、「殻を破って外に踏み出す」ための最大限の努力をすることを誓った。

一つ目は、率直に、当時の自分とさよならをし、さらなる飛躍のためのステップアップとすること。二つ目について述べるため、「殻」の定義に少し話を戻したい。実は「殻」には前述で示した2つの定義よりも遥かに私の目を引く定義が書かれていた。

「主要な部分や中身がなくなつて用済みになつたもの」

私は、「殻」の外に出すべき「何か」が社会生活における自己実現のためには必要不可欠だからこそ、長年に渡り産政塾のテーマとして引き継がれていると考えている。しかしながら、その「殻」にこもつた「何か」が存在しなければ、この存在自体が「殻」と解釈できるのではないかと考えた。ゆえに、二つ目の思いは、私には「何か」があるのか、そしてそれは一体「何なのか」を見つけることである。

第2章 産政塾初日

2008年1月23日、第19期産政塾の幕開けだ。

塾生同士の初顔合わせで、新たな仲間との出会いに高揚しながら集合場所に向かったことを記憶し

ている。

入塾式の自己紹介がユニークで、その直後よりメンバーと打ち解けることができた。

進め方はこうだ。前期の産政塾参加者が同じ企業、労働組合からの今期参加者の印象を記述した冊子を用いて自己紹介を行う。前任者による私の印象に関する職場ヒアリングの実施結果は次の通りである。

①エロい ②汚い ③首がない ④イジるには最適・・・⑨耳の掃除は5年に1回・・・
酷すぎる。が、おもしろすぎるコメントで、最初の導入はバッチリだ。佐々木さん（旧姓白井さん）に、感謝です。

メンバー全員の自己紹介を通して感じた共通点がある。それはメンバー全員が「殻を破って外に飛び出す」ための心構えを持つて、参画していたことである。この「殻を破る」という共通の目的に向かい、同じ道を歩みだそうとした点が、メンバー間の親睦を急速に深めた大きな要因と考える。初日の学びとして、同じ組織に属するメンバー全員が共通の目的達成に向けて物事に取り組む際には、活発な意見を交わしあうことで信頼関係が芽生え、組織が活性化されることを感じた。（この考えはその後のイベントを重ねる度に強まるばかりだった。）

産政塾の企画開始後、メンバーは各々のグループで「殻を破るためのイベント」を他メンバーに提供すべく至るところで活発な事前打ち合わせが繰り広げられた。

私たちのグループは最終回の企画担当となり、締めめの回に相応しい企画を提供したいとのグループメンバー全員の思いのもと、議論を重ねた。初日のグループワークでは、企画のコンセプト固めに議論のテーマを絞り、自由にメンバー間で意見を出し合った結果、「全員参加で体を動かすことに挑戦をして達成感を得る」というコンセプトにまとまった。運動会、急流くだり、いかだ作り、キャンプファイヤー等、コンセプトに基づき様々な意見が沸いて出てきた。「殻を破る」実現に向けてグループメンバー全員がコンセプトを共有することが具体的な活動計画を描くための土台となり、この取っ掛かりの部分全員が握ることで、本活動に一丸となつて取り組むことができることを認識できた。また、メンバー全員が感動し、達成感を得ることができる最高のイベントを作りたいという胸の内から湧き上がる感情は、「やってやろう」という思いに満ち溢れていた。この意欲こそ、自分の中に潜む「何か」で、私の「殻」を破り外に出てきたのであろうか。この活力は、その後の企画準備を経て、第19回産政塾が終了するまで燃え続けた。

第3章 イベントを通じて

さて初回グループのイベントは、「無の探求」というテーマのもと渭信寺というお寺を訪問し、坐禅を通して心静かに自らを見つめなおすとともに心身のさらなる向上を図った。身体の硬い私には、坐禅の時間は苦痛極まりなかったが、メンバー全員が心を無にする中、私だけ坐禅を崩すわけにはい

かない。激しく痙攣を繰り返し、周りからは迷惑な存在であつたろうが、心は最後まで坐禪を通したことがひとつの自信となつた。

坐禪の後は、ご住職による法話をいただき、またイベントを通して感じたことを書に表した。その後の各グループの企画によるイベントも、全員でテーマを共有したうえで、全員で考える、話す、聞く、動くことが織り込まれており、イベントを経験するたびに、より信頼関係が深まり、より活発な議論が交わされた。当時、私は担当業務で「職場活力の強化」をテーマとした企画業務に従事しており、「一体感」について何度も職場で議論してきたが、これらのイベントを通じて得ることができた相互信頼に基づく活動を繰り返し実践することで一体感が醸成・強化されることを肌で経験できた。

第4章 グループのイベント準備

私たちのグループの準備も各イベントと平行して進行する。コンセプトに基づき、活動内容はメンバー全員による富士山登頂に決定。殻の外へ踏み出すためには「本気で挑戦する心」が絶対的に必要だと考えた。達成できるかどうか分からない、結末が予測できない、脱落者が出るかもしれない、大胆な企画であつたが、「本気で挑戦する心」に火を灯し、この産政塾で感じたことを今後の人生に刻み付けたいとの思いがグループメンバー間で一致した。また他グループのイベント時には、他メンバーに富士山登頂につきヒアリングを実施し、「それは殻を破つて外に飛び出した企画だ」等の賛同の意

見も実施の後押しとなった。事前準備として、休日を利用し、猿投山や金華山登山の練習会実施や、準備物リスト、事前練習の感想や登山グッズ買い物の際のポイント等をまとめた資料、富士山登頂の留意事項をまとめた資料などを配布し、メンバーの意欲を高めるための試みも実施したが、全ての行動は最後のイベントで達成感を得るために不可欠なものであった。イベントに向けた取り組みを通じての学びのポイントは、志を高く持ち、メンバー全員が目的を共有することで、全員が一丸となり、能動的に行動し、より質の高い活動できることである。この段階では、何をするかメンバーに有益な情報や活動を提供できるかを常に考え企画を進めていた。

いよいよ富士山登頂当日。私は移動中のバス車内で登山に向けたモチベーション作りのレクリエーション役を担当し、アカペラで何曲かうたっていると何名ものメンバーがアカペラに参入してくれた。入塾より半年間で、メンバーと深い関係を築くことができたことは、今後の会社生活でも大きな財産となるだろう。

登山の最中も、様々な出来事があったが、この登山当日に至るまでのプロセスにこそ、自分の内に潜む「何か」の発見、そして「何か」を殻の外に出すことの解があったと考えるため、登山最中の感想は割愛したい。

結果としては、全メンバーで富士山登頂を達成。ご来光を拝んだ瞬間、これまで準備してきたことが報われた気がして少し泣いたが、このような涙であればいつでも流したいものである。

第5章 おわりに

ここまで、産政塾を経て得たこと述べてきたが、もっとも重要なことは、産政塾で得たことを、どのように今後のキャリアに反映させるかということである。結局のところ、産政塾で何を学んで、学んだことをどう活かしていくのか今後の誓いを立て、まとめとする。産政塾には大いなる期待を抱き参加をさせていただいたが、決して忘れてならないことは、産政塾は同じ志を持つ数十名のメンバーとともに進めてきたことであり、組織としてテーマ活動に取りくむからこそ多くの学びを得ることができるのである。この点が座学との決定的な違いであろう。産政塾から得た学びを一文で表現すると、「組織の中でメンバーと目的を共有し、イベントに参加する他メンバーのことを考え、最大限のチャレンジを行い、議論を交わす中でより良いアイデアがあればすぐ改善をおこない、全員参加のチームワークで一丸となつて取り組む」と言えるのではないか。このように考えるわけだが、どこかで見聞きたことがあるような言葉だ。これは、アイシン精機で仕事を進める上での価値観を明示知化した「アイシンウェイ」に似ているのではないか。

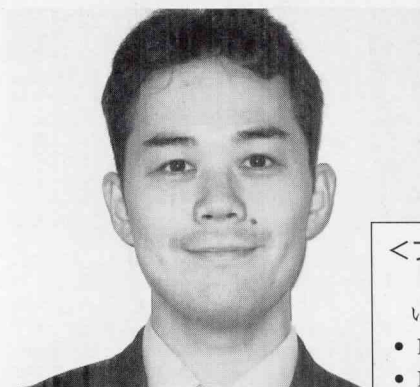
私の勤め先であるアイシン精機にはこのような価値観を大切に考え、仕事を進める風土がある。私の上司も同僚も先輩も後輩も、アイシンウェイを体現しており仕事にも遊びにも一生懸命だ。共に働く上で最高の環境が整っている。そのことに気づかずに「自分ウェイ」な会社生活を過ごしてきたこ

とに大いに反省である。常に「アイシンウェイ」の精神に則った会社生活を送ること。そして積み重ねた経験を会社活動に反映させることが、私のような不肖者を産政塾に送り出してくれた会社への恩返しになるはずだ。

肯定的に物事を考えると自然にやる気がわき気持ちよいものである。人生は素晴らしい。

最後に、この産政塾の諸企画を通じてお世話になった方々、事務局の松井さん、塾生のみなさん、私を快く送り出してくれた会社の方々に心より感謝申し上げます。

産政塾を振り返って



東邦ガス株式会社

泉 祐 輔

<プロフィール>

いずみ ゆうすけ

- 1976 年 10 月 熊本県生まれ
- 1999 年 4 月 合同ガス株式会社 入社
(2003 年東邦ガス株式会社と
合併)
- 2006 年 6 月 人事部へ異動
現在へ至る

<趣味> ゴルフ、ビリヤード

1. はじめに

私はこれまでの社会人生活のおよそ7割の期間、人事・総務部門の業務に携わってきましたが、異業種の方と接する機会はありませんでした。産政塾への参加を勧めていただいた時は単純に、その機会が得られることを嬉しく、楽しみに思いました。しかしその一方で、産政塾からの最初の案内をいただいて、まずそのテーマに戸惑いました。

「殻の外へ踏み出そう」

考えたのはやはり「殻とは何ぞ？」でした。「自分を覆うもの」、「壁」、「自分を守るもの」、受け止め方によつては「掘り所」……。しかしやはり明快な答えなど出せるはずもなく、とりあえず「破ることができれば成長できる」ものであることは間違いない」とその場は結論付けて、開塾式に臨んだのを覚えています。

ここからは、閉塾までのおよそ8カ月間の活動を振り返りつつ、感じたこと、学んだことから自分なりの「殻」について改めて考えてみたいと思います。

2. 活動を通じて

【第1回 開塾式】

一堂に会して始まった開塾式では、始めこそやや緊張していましたが、東塾長のお言葉、自己紹介、グループ別の討議と進み、会話をさせていただく中で少しずつほぐれていきました。全体を通じて、皆さんのしっかりと考えたそれを伝える表現力、何より熱い想いに圧倒され続けましたが、「異業種の方と接する」という産政塾に参加するもう一つの目的が想像以上に満たされて、今後の活動への期待を強く感じました。一方でグループ別討議では活動企画を検討する中で「殻」についても意見を交わしましたが、やはり漠然としたものであるためか上手くまとまらず、改めて「殻の外に踏み出す」というテーマの難しさを認識しました。

【第3回 地球を守る、着実に行動を起す!!】

昨今、環境問題を取り上げた記事やニュースを見ることは多いのですが、いざ自分を省みて問題を正しく理解して取り組んでいるか。第3回はそんなことを考えさせられた企画でした。内容としては豊田市足助支所に伺い、「間伐体験を通じて環境問題を考える」というものでしたが、正直、緑（森林ひいては木）は多い方が良いに「決まっている」という先入観を持っていた私にとって、間伐という作業を持つ本当の意味（過密植林によつて日光が届かない地表では草木が生長しない↓剥き出しの地表は水源涵養力が低く、大雨などで流れやすく、土砂災害などにつながる↓森林整備を進めることでそれらを防ぎ、安全な生活に繋げる）を熱く丁寧に説明いただいたときには恥かしさで一杯でした。「足元を見ていない」とは正にこのことです。それと共に問題を正しく認識すること、そして着

実に行動を起こしていくことの重要さを改めて学ばせていただきました。

また、実際に山林を進んで間伐作業と、間伐材を使ったベンチ作りも体験させて頂きました。間伐されていない山林の地表の状態、そして間伐作業の大変さを目の当たりにして、改めて環境問題の奥深さを感じると共に、わが身の体のなまりも痛感した体験となりました。

【第4回 宮崎県の地域活性化の取り組みを学ぶ】

第4回は私が所属するグループの企画でした。現在の日本において、平均年齢は上昇の一端を辿り、少子高齢化は進む一方ですが、特に地方においてその流れは強く、経済でも低迷の道を進んできました。そのような中、社会人・企業人として自分達が住む町について考えるという目的から、「宮崎をどげんかせんといかん」という言葉のもとで地域活性化に取り組む宮崎県に学ぶことにしました。

現地では、行政（宮崎県庁）、食産業（マンゴー選果場、西の都酒造）、観光産業（高千穂役場）を訪ねて回りました。行く先々で講話を伺い、現場を見学させていただきましたが、訪問を重ねていくうちに一つの大きな流れを感じることができました。それは行政の発信した「県民総力戦」という取り組みに沿って、県の発展に向けて県民の皆さんが自分のできること（得意分野、地域の持ち味）に取り組んでいる、ということです。つまり、トップから発せられた明確なビジョンのもと、個人が自信を持って取り組み、全員が同じ方向に向かって一丸となることで大きな力としている。これは言うは易いですが実践していくことは非常に大変なことであり、逆にそれができているからこそ、訪問した

宮崎県が非常に元気に感じられたのだと思います。

では、社会人・企業人として自分達が生きざる社会でできること、意識すべきことは何でしょうか。それは（「ビジョンを発する側」と「現場で取り組む側」のどちらの立場となるかは状況によつて異なりますが、いずれにしても）「何事も関係ないと思わない」、「自分のできることに全力で取り組む」、そして「自分の取り組むことに自信と誇りを持つ」ということではないか、宮崎県の姿を見てそのように考えます。

この節の最後として、今回の企画において、ご多忙の中にもかかわらず、丁寧かつ親身にご対応いただいた訪問先の皆様、そして宮崎県の方々に改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

【第5回 すべての始まりは、情熱から】

第5回のテーマは「情熱」でした。企画の前に情熱というものについて考えたとき、私は自分の好きなことをするときに情熱を持つて取り組んでいたように思えたことから、情熱とは「自分が好きなことに取り組むときに生じる気持ち」と考えてしまいました。しかし企画書を見て、FC岐阜を訪ねて、チームを盛り上げるそのひた向きの姿勢と活動についてお話を伺ううちに、「情熱を持つ」ことが始まりであり、それがやがて人を動かし、組織を動かしていくものであると認識を改めることができました。企画前の私の考えはきつと「情熱を持つて取り組んだから、私がそのことを好きになった（動

かされた」ということだったのだと思います。

ではその「情熱」とはどこから来るのか。それは講和の中で挙げていただいた「For the Teamの精神」という言葉に答えがあるのではないでしょうか。つまり、「自分だけでなく、全員（Team）のために尽くして成功を願う」という気持ちです。その気持ち、姿勢が相手に伝わったとき、物事が動き出すのではないかと思います。

日々の忙しさの中で、つい情性に傾いていつてしまうことが多いですが、そんなとき、この第5回の企画で学んだ「情熱」を思い出していきたいと思います。

【第6回 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く】

過去に一度登頂した経験があるとはいっても、それは10年も前の話。近頃の不摂生と運動不足が積み重なった私の体にとって、この企画は文字通り「挑戦」という言葉があてはまるものでした。

登山のための備品を買い、それなりに運動も再開させてはいたものの不安は消えません。そんな気持ちを含んでいただいたのか、富士山登山の前に届いた「事前練習」の案内にはすぐに飛びつきました。当日、金華山に登頂はしたものの、笑う膝をひきつった笑いでごまかして強がって、翌日は筋肉痛というお約束のコースを見事に辿ることになりました。しかし、この事前練習がなければ運動のペーシングを上げることもなく、富士山登頂はできなかったかもしれません。企画グループの皆さんの企画力、そして心遣いに頭が下がります。

そして富士山登山に臨みました。徐々に強まる山の傾斜に加えて、風雨などの自然の厳しさとの戦いになりましたが、励まし合いつつ一歩ずつ歩を進めたからこそ、全員で登頂することができたのだと思います。（御来光はそこへ褒美でしょうか）

この企画では「厳しい中でも挑戦し、一歩ずつでも着実に歩む」ことの大切さを学ぶことができましたが、「情熱」、「自分のできることをして、一丸となる」といったこれまでの活動で学んだことを思い出せた点で、自分にとってはこれまでの活動の集大成となったように思えます。

3. 殻の外へ！そして…

さて、ここまで各企画を振り返ってきましたが、結局、「殻」とは一体何なのでしょう？ 私は間伐作業などで陥った「先入観や誤った認識と、その思い込み」というのは自分の殻の一つではないかと考えていますが、これは私個人のもので、やはり殻とはその人によって異なるものなのでしょう。ただ殻とは決して一枚の分厚いものではなく、幾つもの種類の殻が一人に対して何重にも重なっているのではないかと思います。そして私達はそれを一つひとつ破りながら成長していくのではないのでしょうか。ただし、自分に一体いくつの殻があるのかは当然誰にも分かりません。ですので、殻を破るということは地道な、終わりの無いものというようになります。その時、重要になるのが「情熱を持ち」、「自分のできることに自信を持って取り組み」、そして「一歩ずつ着実に踏み出す」という今

回の産政塾で学んだことなのだと思います。このことを今後も心に留めて、少しずつでも着実に成長できるように、努力していきたいと思っています。

4. 最後に

今回、産政塾において参加させていただいた企画は、どれも日常では得難い体験であり、さらに塾生の皆さんと議論を重ねたことも相まって非常に貴重な経験となりました。そして、何より塾生の皆さんと知り合い、交流を持たせていただけたことも産政塾に参加したからこその大きな財産です。産政塾での経験、そして繋がりを大切にして、今後も一社会人として歩んでいきたいと思っています。

最後になりますが、東塾長、松井さんはじめ中部産政研の方々、塾生のみなさん、それぞれの企画でご指導いただきました皆様、そして忙しい中にもかかわらず快く送り出させていただいた職場の皆さんに改めてお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。

産政塾に参加して感じたこと



トヨタ紡織株式会社

上 田 治

<プロフィール>

うえだ おさむ (O 型)

- 1969 年 3 月 27 日 福岡県 北九州市出身
- 1987 年 4 月 入社
現在に至る

<趣味> ウォーキング・温泉旅行

<家族> 4 人 妻・長女 (小 6)・ 長男 (小 1)・
ペット 小鳥 (金華鳥 2 歳)

■はじめに

第19回産政塾への参加は、当時の上司より「産政塾に行ってみないか？」とのお言葉をいただいたことがきっかけである。正直、最初聞いた時は産政塾って何？なんか大変そうだなと思った。また、募集対象者が28歳く35歳程度となっていたことが気にはなったが、異業種の方と交流を深めることによって視野が広がる、自分自身を見つめ直す良い機会だと思い参加する旨を上司へ伝えた。

■第1回開塾式（08年1月23日）

豊田市のカバハウスで行われた開塾式では最初、会議室内が重々しい雰囲気で緊張したことを覚えている。自己紹介ではどの塾生も大変、話し上手との印象を受けた。その後グループに分かれ、事前に考えてきた企画について議論を行った。私は社交的な性格では無いので、今後の活動への大きな不安と少しの期待を持った。ただ、せっかくの貴重な機会なので全ての企画に参加出来るようにしたいと思った。その後行われた懇親会では今後の活動を共にする塾生の皆さんとの交流を深めた。

■第2回 無の探求!!自らを見つめなおし、更なる成長へ（Aグループ企画 3月26日）

岡崎市の「渭信寺」で行われた企画は大変静かな場所にあり、日常生活ではあまり経験できない、落ち着いた雰囲気、時間もゆつくりと経過している感じがして、とても心が落ち着いていた。最初に座

禅をしながら住職のお話を伺った。「人生は一度きり、だから、自らが考え自らの道を歩んでいかなければならない。人生幸せになろう。」とのお言葉に大変心を打たれ、今までの自分歩んできた人生が脳裏の思い浮かんだ。年少の頃のこと等、平凡な人生だが結婚し、2人の子供にも恵まれたことなど自分は大変幸せ者だと思った。正直、座禅で「無になる」ことはできず、同じ体勢を維持することに苦痛を感じたが、貴重な経験をさせていただいた。

■第3回 地球を守る、着実に行動を起こす!! (Eグループ企画 5月14日)

豊田市の足助支所で原田課長、北岡主幹から環境についてのご講演をいただいた。その後、森へ移動し、2グループに分かれて間伐を行った。足場の悪い急斜面を上り、現地へ向かった。木を切る事の難しさと間伐が非常に重労働であることを認識させられた。間伐の重要性和環境について一人ひとりが真剣に考え取り組むことが大切だと思った。

■第4回 宮崎県の地域活性化の取り組みを学ぶ (Dグループ企画 6月12日～13日)

私は、九州出身だが宮崎県には一度も行ったことが無かったので非常に楽しみに参加させていただいた。ただし、高所恐怖症の私は飛行機に乗ることに非常に恐怖感があった。宮崎県庁で「地域活性化の取り組みについて」講演をいただいた。人口の減少(1年で6千人)、少子高齢化、地域活力の低下、地域経済の停滞、穏やかで人情味がある反面、保守的で積極性に欠ける県民性などの課題に対し、「県

民総力戦」という名の下、宮崎県民がそれぞれの得意分野や持ち味を生かして自発的に様々な取り組みを行う。東国原知事を筆頭に活動を推進しているとのこと。また、東国原知事へは「自分の言葉で話しをする。」、「周りの意見も聞く（調整型 意外?）」との評価であった。JA西都でマンゴーの出荷工程を見学したが、ある基準（糖度、色など）を満たせば「太陽のたまご」というブランド名で高価格での取引されることであった。西の都酒造では芋焼酎の製造工程の見学を行った。各設備がシンブルに設置されている印象を受けた。翌日は、高千穂町へ移動し、高千穂町役場にてANA総合研究所の柳田氏より講演をいただいた。地域活性化にはまず、地域の人と話しをし、地域のことを知った上で有効な地域活性策の実施についての話しを伺った。現地現物の重要性を再認識した。知名度の高いタレント出身の知事が県民はもちろん、県庁職員からの信頼も厚いこと、県内の各地域での様々な取り組みなど宮崎県のまとまり・一体感を感じた2日間だった。

■第5回 すべての始まりは情熱から（我らBグループ企画 7月9日）

私はBグループとの事前打合せ（懇親会）の時、メンバーに「情熱」とは何ですか？と聞かれて答えることができなかった。家に帰って早速パソコンで調べると「ある物事に向かって気持ちが燃え立つこと。またその気持ち」であった。そして考えた。最近、「気持ちが燃え立つこと・物事に夢中になったこと」があっただろうか？結婚して12年の月日が経ち、平日は仕事に追われ、プライベートでは子供中心の生活である。ゆつくりと自分の時間をとることもできていないと思うが、それに満足してい

るのも事実である。正直、今の自分に「情熱」をもつて取り組んでいるのではないと思う（あえて言うなら子供の運動会でのビデオカメラの場所取りくらいしか思い浮かばない。）が、「情熱」を考える良い契機になったのは確かだ。今回の企画の成功は、開塾式から一貫して「FC岐阜」訪問を紹介いただいた、丸柴の築尾さんの熱い情熱によるものがとても大きいと思う。

今西GMの講演は、幼少期の被爆体験談から始まったが、被爆された4歳時の記憶が鮮明にある程、衝撃的な出来事だった事が容易に想像できたのと同時に自分は平和な時代に生まれ不自由なく生活できている事を改めて認識し、そのことをとても幸せに思った。また、「ひたむきにこつこつ」という言葉がとても印象に残った。最後に塾生に贈っていた言葉「心が変れば、行動が変わる。行動が変われば、習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変わり、人生が変わった。」を大切にしたい。予定時間前から予定時間を大幅に超えて講演いただいた今西GMにお礼を申し上げたい。

服部強化部長のトレーニングは、自分の体力の無さを痛感した。土曜日まで太ももの筋肉痛が残っている自分が情けなく思った。こんなことでは、次の企画である富士登山など、無謀な挑戦であることを痛感し焦りを感じた。服部部長とカワイコーチによるトレーニングは工夫された内容であり大変楽しく運動することができた。熱心にご指導いただいたことに感謝したい。最後のミニゲームでは、ゴールを決めてやろうと気合を入れていたが、私のチームは、3戦全敗で、ゴールを決めることもできなかったことが心残りだった。久しぶりに思いっきり体を動かし、汗をかいて運動したことは、とてもすがすがしい気持ちだった。

今回の企画でリーダーを担当されたBグループ最年少の関東自動車工業の小澤さん、連絡・調整等を担当された、刈谷市役所の佐々木さん、最初に企画案をだされた丸栄の築尾さん、発言に説得力のある中部電力の中和田さん、冷静なトヨタ車体労組の塗師尾さん、良きメンバーに恵まれたことに感謝したい。また、個人的に、7月14日より自転車通勤を徒歩通勤に変更した。目的は、運動不足解消・ダイエット、富士登山に向けてのトレーニングだが、今回のテーマ「情熱」を持って出来る限り継続し、習慣となるようにしたい。(この塾誌作成時点10月30日まで継続中です)

■第6回 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く！(Cグループ企画 7月27～28日)

事前練習には都合により参加できず、また、登山経験も無い自分が日本一の富士山に登る事など到底無理だと思い、正直、欠席することなど、ずるい考えも頭をよぎったが、この企画案にもあった、「本気で何かに挑戦し、自分たちが決めた限界を取っ払い、真に殻の外へ踏み出そう」を念頭に勇気を持つて参加することにした。この想い・行動(普段の自分では絶対にやらないこと)が自分にとって一つ殻を破ったことなのかとも思った。五合目からガイドの方のご先導で登山を開始した。非常にペースが遅い。が第一印象だった。(この考えが素人だった)それほど疲労も感じず、七合目まで登った。(楽勝?)甘かった。徐々に疲労感が出てきた頃、ガイドの方から「あれが今日宿泊の富士山ホテルです」と言われ見上げた、はるか先に小さく見えた。一気に疲労感が増した。これが富士登山なのかと。険しい岩場が続く中、なんとか富士山ホテルに到着し、夕食のハンバーグカレーを一気に食べつくした。

3時間程の仮眠の後、山頂を目指した。人の多さには大変驚いた。大渋滞で先に進まず、途中、進路を変更し、4時30分頃、ようやく山頂に辿り着いた。やりきった事への達成感もあったが、誰一人脱落することなく全員一緒に登頂出来たことがなによりうれしかった。ただし、本当に大変だったのは、この後の下山だった。今まで経験した事が無い筋肉痛・疲労が容赦無く襲ってきた。出発地の五合目に何とか到着した。これも下山を一緒にした愛知製鋼の松尾さんのお陰と感謝したい。締めくくりの企画に相応しい第19回産政塾の集大成の企画だった。

■第7回 閉塾式（08年8月21日）

産政塾のテーマである「殻の外に飛び出そう」についてグループで論議したが、私にとつての殻とは、「現状に満足していること」だと思う。この事が新しいことに挑戦する意欲や気持ちが持てず、行動する事が出来ず、自身の成長を妨げている。そして、殻は破るものばかりではないと思う。殻の中が自分自身の世界であるのなら「守るべき殻」もあるのではないかと思う。例えば、自分の妻・2人の子供、家族こそ私が守るべき大切な存在であり、守るべき殻であると思う。

■やがて11月

今回の産政塾への参加を勧めていただいた職場上司、活動を共にさせていただいた塾生の皆さん、

東塾長、そして事務局の松井さんへ深くお礼を申し上げたい。今回の活動を通じて、今までの自分を見つめ直す良い契機になった。これからも第19回の産政塾に参加しことに誇りを持つて今後の会社生活及び人生への糧としていきたい。

「気づき」「改革」「体験」



ジェイテクト労働組合連合会

大 田 秀 幸

《プロフィール》

おおた ひでゆき

- 1964 年 大阪府出身
- 1983 年 光洋自動機（後の光洋精工）
入社
- 2001 年 光洋労組 支部専従
- 2003 年 光洋労組 本部専従
- 2007 年 ジェイテクト労連 本部専従

はじめに

当労組委員長から「産政塾」へ参加するように話しがあった。私の担当業務が教育係ということが理由である。これまで「豊田工機労働組合」として「産政塾」に参加していたが、「ジェイテクト労働組合連合会」としては初めての参加。今後の「産政塾」への参画をどうしていくのか体験を通して考えなさいという指示であった。参加することを決め申し込んだ。が、「産政塾」への参加要件を見て気分が落ち込んだ。「産政塾」は、「三十歳前後の若手で構成され」という文言である。私の年齢で（組合専従も七年目を迎え）一人浮いてしまわないか？また、統一テーマが「殻の外へ踏み出そう」であり、私のように幾重にも厚みの増したコテコテの「殻」を今更破るのは不可能だ！という理由である。重い気持ちのまま日々だけが過ぎ、とうとう開塾式の日を迎えた。

産政塾に参加する前の「殻」のイメージ

私なりに「産政塾」が始まるまでに「殻」について考えてみた。

- ・自分には見えないが、他人には見えるもの。
- ・自分では「殻」に気付いているが、そこから脱することができない、しようとしない。
- ・「殻」＝マイナスのイメージ。

第十九期の活動を振り返り

第一回開塾式

カバハウスに集合。会場の机の上にある名簿を見て、やはり・・・、想像していた通り、私が今回の第十九期生の中で最年長であつた。しかし、ここまで来たら仕方がない、覚悟を決めた。

まず、東塾長から挨拶があり、沢山の参考になる言葉を頂戴した。中でも、リーダーの要件の一つに、「人の話は最後まで聞くこと、人の話を聞くことも大切」という言葉があつた。このことは、普段上司からも言われているが直らない。今日、再認識するとともに、実行していくことを誓つた。

次に各々のグループに分かれ、今後の企画についての討議の場となつた。自分達で企画を立て実行していくことが、我々に与えられた一つのテーマである。幸い、我がグループは積極的な方ばかりで、リーダーや他の役職も立候補によりすぐ決まり、順調にグループ討議が進んでいった。さて、各自が持参した企画案から、我々のグループで担当する企画を決めていくわけであるが、私の持参した企画案が、「裁判員制度導入に際しての模擬体験」というものであり、ごくありふれたもの。他の方々の奇抜で斬新な企画案を聞き、やはり自分には相当厚い「殻」が覆っているなと痛感した。今後の「産政塾」の活動で、この「殻」から踏み出すことができるようになるのか不安を抱く一日となつた。

第二回企画（無の探求 自らを見つめ直す、さらなる成長へ）

私の属する「Aグループ」による企画である。二回の打ち合わせと下見を経て当日を迎えた。岡崎市にある「渭信寺」において、「坐禅体験」と「習字」を行い、自らを見つめ直すという狙いである。本格的な坐禅は初めての体験であつた。作法から学ぶことができ、大変良い体験ができた。ただ、残念ながら最後まで「無」になることはできなかった。他人の腹の鳴る音や昼ごはんの匂い等の様々な雑念がまとわり付いた。しかし、「無」になることは体験できなかったが、座禅終了後は気分がすっきり。少なからず、落ち着いた気持ちになれた。（産政塾が終了した今も、たまに気分転換に自宅で座禅を実施している）。

さて、本日の企画では、住職からありがたい言葉をたくさん頂戴したが、その中のひとつ、「人生に余生は無い。日々、楽しく精一杯過ごす」が印象に残った。また、東塾長からの「結果も大切であるが、それまでのプロセスも大切」という激励の言葉も今後、大切にしていきたいと思った。

※帰路のバスでトラブルが発生した。すると、今回の参加者が率先してそのトラブルに対処。第十九期生の前向きな姿勢に感心するとともに、今後の「産政塾」での活動でのまとまりを予感した。

第三回企画（地球を守る 着実に行動を起す）

前日は雨、当日も心配されたがどうにか持ち直した。さて、今回の企画は事前の情報から、単純に「エコ」について考えるもの？と、軽い気持ちで現地に向かった。バスからの景色が徐々に緑濃くなり、ここが豊田市？という感じ。後の足助支所担当者による説明により、合併によって最近豊田市となったことがわかった。

まず、「人工林」や「森の仕組み」等の説明を聞き、その後、実際に「間伐」を体験した。今回の企画に参加するまでは、山の木を伐採することや割り箸の使用は悪いとの認識であった。しかし、山の手入れ（間伐）は、山を強くする（木が密接した状態だと根元に光が届かず、森が壊れていく）。割り箸の使用も、森林の管理作業から出る端材を原料に使えば、国内森林資源の維持につながる（今、日本で使用されている割り箸は、外国の木を乱雑に伐採したものから作られている）。ということを学んだ。本日の企画に参加して、我々が持っている認識（現在はさまざまな情報が飛び交っている）が、「本当に正しい情報が基になっているのか」、「自らの体験からのものか」を考えさせられた意味深い一日となった。

第四回 企画（宮崎県の地域活性化の取り組みについて学ぶ）

残念ながら業務の都合で参加できず。参加された面々が、地域やまた、自職場の活性化に、今回の「企

画」で学んだことを役立てて欲しいと思った。お土産ありがとうございました。

第五回 企画（全ての始まりは 情熱 から）

今回は、FC岐阜を訪ね、マイナーであったこのチームが、地域に密着し、ここまで立ち直ってきたことから何かを学ぶというものである。チーム再建の立役者、今西GMから長年の経験からさまざまなお話を聞いた。リーダーに大事なものであるとの心得を聞いたが、中でも、「負けん気は大事だが、切れてはいけない」という言葉、私は些細なことでもよくされる。今一度、心にしていこうと思った。さらに、『心が変われば、行動が変わる』

『行動が変われば、習慣が変わる』

『習慣が変われば、性格が変わる』

『性格が変われば、人生が変わる』という激励の言葉を頂戴した。多分、塾生全員が感化したのであろう。自分が変わる、変えるという気持ちが大切だということを学んだ。

最後に、「情熱」という気持ち、完全に忘れていた。いまさら、ということもあるが、心のどこかに響いたのは確かである。

第六回 企画（富士山に挑戦 富士山麓に塾生泣く）

今回で「産政塾」第十九期生最後の企画となる。皆で何かに挑戦し、限界を超えようという企画、「富士登山」であった。日曜日の早朝に名古屋駅を出発し、その日中に八合目まで登り仮眠、その後、夜明けまでに頂上に到着し、ご来光を見るところという内容。言葉で書くと簡単であるが、登り着く（下山もつらかったが）までは大変だった。普段体を動かすことは苦にならない私だが、今日はきつかった。特に、八合目から八合目半までの道のりは相当きつかった。

さて、結果的には、全員が企画案通りに登頂（下山も）することができ、ひとつの目的に向けての意識の共有化ができた。ただ、振り返れば、そこへ行き着くまでの準備と皆で支え合えたことが成功のポイントであつたと思う。富士登山の当日までに近郊の山での事前練習会の実施やさまざまな登山に対する情報の提供。まさに、「結果も大事であるが、それまでの準備が大切であり、結果は後からついてくる」ということを学んだ。また、一つの目標に向かって、皆が情報の共有化をすることの大切も学ぶことができた。

第七回 閉塾式

第十九期「産政塾」の活動を全員で振り返った。そして、「殻」について語りあつた。明確な答えはなかったようであるが、「殻」の外へ踏み出すことの重要性については、全員で認識し合うことが

できた。

最後に

今回、「産政塾」へ参加する機会を与えていただいたことに感謝いたします。できれば、若い時期に体験できればよかったというのが率直な感想です。

まとめとしては、それぞれ立場の違う方々から、たくさんのためになるお話を聞けたこと（気づき）、また、常に新しいことへチャレンジする気持ち（改革）、何事もまずは身を持って（体験）について学習することができました。今後の活動に活かしていきたいと思えます。

産政塾に参加後の「殻」について

明確にはなっていないが・・・

- ・「殻」個人の経験からできた「バリアー」。
- ・「殻」を無理に破る必要はないのかも？
- ・住み心地が良い場所。
- ・ただ、常に「殻」を意識し、必要に応じて踏み出すこと。

かけがえない時間



松阪屋労働組合

萩野 聡子

《プロフィール》

おぎの さとこ 鈴鹿市在住

- 2002年 松阪屋入社
非専従組合執行役員
現在に至る

〈家族〉父、母と同居

〈趣味〉読書、映画鑑賞、旅行

△はじめに▽

まずはじめに、専従ではない私にこの様な貴重な経験の場を与えて頂いた松坂屋労組の皆様に感謝いたします。またいろいろと支えてくださった東塾長、松井さん、中部産政研の方々、第十九期塾生の皆さんにお礼申し上げます

今回、「産政塾」の話をいただいた時は正直、名前も知らずそれは何？という感じでした。（本当にすみません・・・）しかし、内容を聞いてみたところ、おもしろそうだし社外の人との交流があるという興味津々興味深々で参加させていただくことになりました。

△開塾式▽

開塾式で印象的なのは、皆さんの自己紹介が参加の動機や意志がはっきりとしていてとても素晴らしくて圧倒され、塾長の情熱にも心を打たれ感動したのを覚えています。それと同時に自分についていけるかどうかすごく不安にも感じました。

そして産政塾のテーマが「殻の外へ踏み出そう」と知り、殻とは何？殻を破るとは？という想像もつかない大きなテーマでそこでも大丈夫かな？ついていけるかな？と思ってしまう、また不安で一杯でした。

グループに分かれて企画について話し合う中、みんな初対面なのにいろいろと意見が飛び交いしかも話しやすく、安心しました。そして、不安↓安心↓期待へと私の中で変化がありました。私たちのグループは、最終企画となり責任重大であるものの、まだ時間があるから大丈夫・・・と思います。懇親会は楽しく終了したのを思い出します。

△第1回 無の探求！自らを見つめ直す。更なる成長へ▽

座禅を組んで無を追求する！というテーマですが、座禅という体験を一度もしたことがない自分にとっては、あまり想像が付きませんでした。普段から正座もままならない生活をしている為、不安でいっぱいでした。お寺の住職の方の話を聞き座禅に入り、いかに「無」になるということの難しさを実感しました。座禅中は、足が痛くなってきたり、時計が気になったり、いろいろなことが頭を駆け巡ってしまいました。ただ、ここで座禅を体験できたことは、本当に素晴らしい経験だったのは間違いありませんでした。

△第2回 豊田市所足助支所を訪ねて「地球を守る、着実に行動を起こす」▽

はじめに、足助支所の方よりいろいろな取り組みについてのお話がありました。その中で一番感じ

たことは、皆さんが本当に地球のこと、自然の事を真剣に考え活動を実施されている姿勢が強く伝わってきました。そこで自分たちで、森林に入り伐採し、なぜこういったことが必要なのかを体験しました。急な山の斜面を登り、（体力に自信のある私は楽勝だと思いましたが、下から見た斜面とは違いかなりの急斜面で驚きました）そして、チェーンソーで木を切り倒す時は、グループのチームワークが大切となり（この頃は出会って間もない私たちが、一つの事に一緒に取り組む瞬間が感じられました。）見事に伐採に成功した時は、みんな喜んで時は最高に気持ちよかったです。そして、仲間になった瞬間でした！今までは、自分の地域の自治体がどういう活動をしていて、地球のため、環境の為に何をしているのかを自分から知ろうとしていなかったことを反省できた体験でした。

△第3回 宮崎県を訪ねて「地域活性化の取り組みについて学ぶ」▽

この企画は、話題の知事がいる宮崎県を訪問という事で、それだけでテンションアップの企画だったので今まで以上にワクワクしました。実際に県庁で、宮崎県の取り組みについてのお話を伺うと、県政を取り巻く状況を分かりやすく説明していただき、また職員の方が知事が変わったことでみんなのモチベーションに変化があったということを教えていただきました。

県民総力戦を浸透させることによつて、県政を活性化させるというテーマの中に、県外からの観光客や移住者等に「おもてなし」の心で接するとありました。これは、私たちが宮崎のいろいろなとこ

ろを視察した時に、すごく肌で感じる事ができました。県の職員のみなさんはもとより、小さな売店の店員さんやお土産物屋さんなど行く先々で、笑顔で挨拶のおもてなしを受け、県民の方の意識の高さを実感し驚き、出来ることを皆が実践しているということに感動しました。自分もおもてなしの心を忘れずに日々の業務に生かしたいと思いました。

△第4回 F C岐阜を訪ねて「夢に向かって挑戦する姿勢から情熱を学ぶ」▽

プロの方の指導を受けられるという素晴らしい機会にめぐり会え、講師の方の情熱あふれる貴重なお話を聞くこともでき、サッカーの奥の深さも知りかなり貴重な体験をして、いつも夢は持ちそれに向かっていくことが大切だと再認識しました。

△第5回 皆で富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く▽

この企画は、私のグループの企画であり産政塾での最後の企画でした。初めは、最終企画だからまだだから・・・なんて思っていたのですが、毎回いろいろな企画に参加することが楽しすぎて、あつという間に企画を練らなくてはなりませんでした。私のグループは、頼もしい方ばかりだったのでかなりおまかせになってしまったことは反省です。リーダーから「富士登山」の話を女性の立場から意

見を求められた時は、やはり最終ということもあり皆で一緒に達成感を味わいたいと思い、大賛成でした。(ただ、この時は富士登山の大変さはよく分かっていますませんでした) それからは、普段の運動不足を少しでも解消する為に会社や駅では、常に階段を使うことを徹底しました。また、自主練習を皆で考え近くの山で練習したときは、どんどん皆が一つになっていく感がありました。目的は、皆で一つのことにチャレンジすることが大前提だったので、途中のリタイアも皆にとつて意味のあることだと思っていました。実際に登り始めると、皆の思いが一つになり、助け合いながら頂上に向かっていったことを今でもはつきりと思い出せます。そして、誰一人リタイアすることなく、皆で登頂に大成功してご来光を見た瞬間、感動の嵐でした!! 今までの体験したことが一気に駆け巡り、もし産政塾に参加していなければ絶対に経験できなかった感動だと思いました。(下山は、正直かなりきつくて泣きそうでした・・)

△最後に「殻の外へ踏み出そう」▽

閉塾式は、業務都合のため参加できなかったのでパーフェクト参加を目指していただけに残念ではありませんでした。

「殻」をやぶる、「殻」の外へとは、今振り返ってみると私にとつて、産政塾で知り合った仲間と体験した貴重なこと全てがそれに値すると思います。本当に私にとって素晴らしい財産になりました。最後に、東塾長、松井さん、事務局の方々、塾生の皆様、本当にありがとうございました。そして、これからもお付き合いよろしくお願い致します。

産政塾参加にあたり



関東自動車工業株式会社

小澤 真純

《プロフィール》

おざわ ますみ

- 1982年7月7日 生まれ
- 2005年 関東自動車工業(株)入社
現在に至る

<趣味>ヨット、
ウィンドサーフィン (レース活動)

<座右の銘>やった者勝ち！

—はじめに—

当初、産政塾に参加することは自分の希望ではなかったし、そもそも産政塾そのものの存在すら知らなかった。なぜならば、当社（＝関東自動車工業株式会社）はしばらく、というか過去長い産政塾の歴史の中で数えるほどしか企画参加をしていなかった。僭越ながらも関東自動車の歴史に残る塾生となったことで、少々の興味と、多大な不安で産政塾が始まったことを今では懐かしく思っている。

8カ月という長くも短い産政塾に参加させていただき、また入社3年目という、まだまだ知識も経験もない自分にとっては同業種、他業種、多種多様な職種の方と議論をかわせたことは、非常に貴重な経験だったと実感している。また、グループ企画にあたっては、リーダーという役職につかせていただき、未熟な自分のためにグループ員の方には大変ご迷惑をお掛けし、また大変助けていただいたことをまずはお礼を申し上げたい。

塾誌原稿の執筆にあたり、内容を思い起こすとともに、自分にとっての『殻』とはなんだったのかについても考え直してみたいと思う。

―産政塾に臨むにあたり―

産政塾に臨むにあたり、基本テーマである『殻を破り、殻の外へ踏み出そう』ということについて、漠然と『殻とは？』について考えていた。日本人という殻、関東自動車社員という殻、人材部という殻、労務担当という殻、殻という枠組みの中で、大きいものから小さいものまでくり方は様々だが、自分は知らず知らずに殻に収まり、またそうした殻に収まっていること＝自分のidentityだと思い込み、そうした自分を当然の様に日々過ごしていた。3年目ではあるが、仕事は日々忙しく、毎日の目の前の仕事だけしか目を向けず、そうした自分の担当という『殻』の中にすっぽりと収まっているな。ということだけは考えるに容易だった。ただ殻の『外へ踏み出す』ということについては、あまりイメージがつかなかった。殻を破ることは自分が自分でなくなることじゃないか？

そんな殻に収まりきって、今の自分に満足し、新たなことに挑戦しない自分には、産政塾はとても刺激的な場所であった。関わりのない会社、関わりのない業種、関わりのない様々な仕事をもった方達との論議（世間話？）や、何もないところからテーマを練り上げていく企画、アポイントとりから始まる行動、普段出張することすらまれだったので、産政塾の1日1日がすごく新鮮で、また色々なことに興味を持てた。また開塾式にあった塾長の挨拶を今でも鮮烈に覚えている。

殻を破るために大切なこと

① 歴史を紐解く

先人の努力に敬意を表し、その上で変えるべきもの、変えてはいけないものを選別する。

② 情熱をもつ

こうあるべきというものに対してはしつかりとした気持ちを持つ。意識をすることは可能性につながり、自分の自己研鑽につながっていく。情熱がなければいくら理屈をならべても人は動かない。

③ 行 動

百聞は一行、百聞は一見にしかず。動かなければ何も始まらない。

大変耳が痛かった。人材部では歴史をかえりみることにすらあれ、日々の業務ではうまくいかないことばかりで、情熱を持つことや行動を起こすことについては3年目の自分の自分ですら忘れて（忘れたふりをして）いた。産政塾では自らで動き出さなければ何も動かなかった。情熱を持たなければグループ員や他の方々の心には響かない。そして自分の腹に落し、情熱を持って行動していくと、大変で労力を使うことはあれ、なぜか事がうまくいくし、一つひとつの企画で何かしら感動することがあった。自分達で考え、行動し、結果を表現することは、今回企画自体は短い期間だけだったので殻を破り捨てるまではできなくとも、殻を大きくすることⅡ自分の視野を広くすること、行動の重要性を知ることができた。またユニークで前向きな塾生と意見を交わし行動することは刺激的で、また意識の高い皆に焦りを感じるほどだった。

企画

企画については、全7回（開・閉塾式含む）実施されたが、自分については業務都合上、4回しか参加ができなかった。大変残念だった。各回の感想を述べるときりがないため個々には追わないが、参加できた全ての回に共通することは、『みんなアツイ。』それぞれ1つのテーマについて計画して、段取りして、実行していくということに関しては、今後の仕事にも共通して重要なことではないかと考えられる。

1つだけ触れるとするならば、やはり自分達の企画した第5回企画

FC岐阜を訪ねて、『夢に向かつて挑戦する姿勢から『情熱』を学ぶ』が一番印象強かった。

社会人になり、『情熱』やら『夢』ということを考えなくなったような気がする。そうなることが大人になったということなのかもしれないが、今の自分のように日々の限られた生活に満足し、時間だけが過ぎていくことが大人になったということならば、少し寂しい感じもする。

また、個人的にもこのテーマには非常に興味があつた。個人的なことになるが、私は学生時代にヨットを競技（レース）として行い、国体に出場したり、学生代表メンバーとして海外遠征に出たりもした。ただそうした競技ヨットに『情熱』を燃やしたかというところは疑問なのである。確かに努力は人並み以上にしたつもりはあるが、成績が出たのは幸運に恵まれたり、人より早く競技を始めた分（親の影

響で小学生から始めたので）少々自分の方が経験値が高かったりというだけであって、何が何でもがむしやらに、というと思うような気がする。さらには社会人になつてもう一段高いレベルに挑戦することもなく、一般の企業に就職し、普通の安定した生活に収まっている。そう考えると、自分にはヨットは『好き』だったし、『熱中』もしたが、『情熱』とは少しかけ離れたようなものだったと思う。だからこそ今回お邪魔したFC岐阜のようなこれからJリーグを目指し、また破竹の勢いで快進撃を続けるチームのお話を聞くことで、『情熱』や『モチベーション』を感じられることが出来るのではないかと感じていた。

お話を伺った今西GMや、運動を一緒に行つた服部強化部長のお話は簡単にまとめると以下のとおり

○プロとアマの違い

・プロであるほど、チームの結果を大切にする。個人の結果にこだわらない。アマチュアほど個人・個人の結果にこだわる。

○リーダーシップとは

・リーダーとは、なろうと思つてなるものではない。個人ではなく、集団の一員として「誰かがやらなくてはならないこと」がある。これらをとにかく全力でひたむきにやる。チームを思いやり、それを行動に移すと、「あいつには世話になった」という人が増えてくる。自分が困つた時にい

つか助けてくれる。そういう人を何人作れるかがリーダーシップ。リーダーとはなろうと思つてなるのではない。その人の生き様の結果である。ひたむきに頑張る結果、周りがリーダーにしてくれる。

一貫しておつしやられたことが、『組織』『チーム』として結果を出せるのが、本当の『プロ』ということ。確かに自分は競技者であつた時はまずは自分の成績が第1だったような気がする。チームで行動していても、レース前になると自分の世界に入り、時にはナーバスになつてチームに迷惑をかけたこともあつた。皆を盛り立ててチーム全体の雰囲気の下上げをし、それが成績につながることは達成感につながる。自分の成績だけを追求するのは短い期間では良い結果につながるが長い期間でみるとどこかでつまづいた時に落ち込みが大きいし、大抵は自分の中だけの自己満足の成績に終わる。確かにそんなことが『情熱』につながつていくようにには思えない。

チームの一員（ここでのチームとは会社や友達など自分の周りのある一定の集団に対しての意味付け）である以上、そうした集団の中で自分が何ができるか、または自分にしかできない、与えられた役割は何かということを考え、ひたむきにやりきること。それがチームワークであるし、『情熱』の原点であるように感じた。よくスポーツでは『皆は1人の為に、1人は皆の為に』という言葉聞くが、まさにそれこそが『情熱』そのもののなのかもしれない。

何となくもやもやがうつすらしてきたような、してこないような感覚なのだが、こうした『情熱』

だとか『夢』だとか一見青臭い事柄であるが、塾生皆で考えまた企画前にはグループで3時間ほどのテーマに議論をし、非常に気持ちの良い時間であったと感じている。

―産政塾終了にあたり―

産政塾が終わり、『殻の破り方』についてもう一度振り返ってみると、正直まだよくわからない。殻はどこにでも存在し、人間きつと殻を全て打ち壊すことはできない。ただ、殻について幅を広げていくことや、あらゆるつながりの中で沢山の殻を持つこと、そうした自分の培った殻を組み合わせることもつと大きな視点で世界が見渡せるのではないかと思う。大事なことは常に前へ進むこと、何にでも興味を持ち、一歩前へ（↑当社のスローガンでもあります）という気持ちで、意欲と歩みを止めないこと。勉強することは沢山あり。そうした活動を止めないことで、いつか『殻なんてどこにある？』と思う日がくるのかと思う。そう信じて突き進むことが塾長の言っていた常に『意識』をする事であり、自分をレベルアップさせることにつながるのではないかと感じている。

2008年は自分にとって大きな出来事がたくさんある1年だった。

1つは仕事、人事異動があったり、後輩ができたりと仕事の内容や仕事の質が大きく変わり、また責任や求められるものの大きさに悩んだ年でもありました。

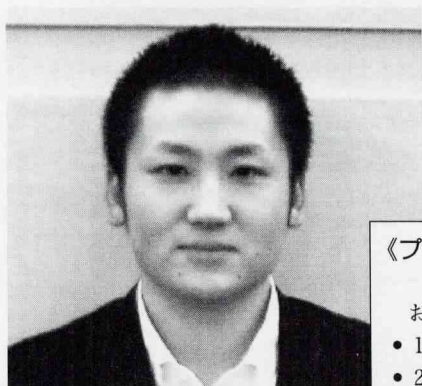
2つ目はプライベート、7月に結婚し、そしてその後妊娠も発覚。来年には出産と、家族が一気に増える。

そうした激動の1年に『殻を破る』というテーマについて考えることはタイムリーだったというか、タイミングが良すぎるくらいに実感を持って産政塾に参加することができた。

今後は公私共に、自分の殻に閉じこもらず、とらわれず、世の中の流れを感じながら何事にもチャレンジをしていきたい。世の中的には未曾有の大不況の中、当社の主力である自動車も大変環境の変化の激しい、厳しい時代となっていく。ただそうした時代の暗さに負けることなく、明るく前に進んでいくことが、まだまだ社会的には若手の自分達にできることだと感じている。肝に銘じて頑張っていきたい。

最後になりますが、今回の産政塾運営の皆さんや縁あって同期生となった皆さんとのつながりは本当に良いものでした。(特に、グループ員の塗師尾さん、中和田さん、筑尾さん、上田さん、佐々木さん、また的確なアドバイスをしていたいただいた事務局の松井さん、本当にお世話になりました。) また今後是非関東自動車の後進には産政塾への参加を勧めたい。そうしたつながりを自分で作っていくこともある意味殻を外す、他の人の殻を外していく手助けになると思っている。

『こころ』



株式会社東海理化

小 野 彰 之

《プロフィール》

おの あきゆき

- 1980 年 4 月 11 日 愛知県岡崎市生まれ
- 2003 年 4 月 株式会社東海理化入社
人事部所属

<家族> 妻・長男（6 ヶ月）

<趣味> 上手いコーヒーを入れること
（コーヒーコーディネーター検定資格取得）
写真撮影 （特に空・雲と山の風景）

【田中】

夏が終わり、窓から入ってくる風にも、すこしばかり秋の様子がうかがえるようになった頃、上司から声を掛けられた。「小野、ちよつと！」また何か言われるのかと思いいながらも、いつもと様子が違うことに気が付いた。「小野、産政塾って知ってるか？」

いつも昼食時間を一緒に過ごしている職場の先輩が前期塾生であった為、何となく話は聞いていた。「来期の産政塾にお前はどうかと思ってるがどうだ？」その投げかけに、迷いはなかった。「是非！」。前任者からは、いろんな会社の人との人脈ができる、本当に良い経験ができると聞いていたので、断る理由が見当たらなかった。

そんな話があつてまもなく、私は第19期産政塾の申込書と向き合つた。少し気になっていたのが、塾へ参加する為の思いやら、開塾式での討議の課題やら、何やら私の想像していた、「楽しいもの」とは違うのではないか、ということであつた。過去の活動内容を読んでみたが、やはり想像とは違う。楽しむというよりは硬いイメージであつた。今まで自分が経験してこなかった内容ばかりの活動なのだ。ただ、なぜか不安な気持ちは一切なかった。むしろ、早く始まらないかとワクワクさえしていた。2008年1月23日（水）、ついに第19期産政塾開塾式が行われた。前日の夜、なかなか眠りにつくことができた。興奮していた。明日はどんな人が集まるのか？どんな雰囲気なのか？打ち解けることはできるのだろうか？不意に小学生の頃を思い出した。まるで新学期のクラス替え発表の前日の

ようだった。とにかく楽しもう！と心に決め眠りについた。

当日は1月ということもあり、冷たい風が肌をさした。豊田市駅を降り、タクシーに乗り換え、いざ「カバハウス」へ。カバハウスに到着したが、それらしい人は見あたらなかった。集合の30分前に到着したので、少し1階フロアを見学し、会場の会議室へ向かった。

会議室へ入ると、既に4人、5人が到着していた。初めが肝心とばかりに大きな声で挨拶をした。さすがは産政塾へ参加する若手社員。みな気持ちの良い反応をしてくれた。指定された座席へすわり、みなへの到着を待った。しばらくして。事務局の「松井さん」が入ってきた。「皆さん硬くならず、ネクタイでもはずして楽しんでみましょう！」。その言葉を聴いて、真っ先にネクタイを外したが、あたりを見回すと外した方が少なかった。

到着して、15分の間に全員が揃った。悲しいことに、第19期生が全員集合したのは、この時が最初で最後であった。第19期産政塾は東会長の言葉で幕を開けた。**『何事にも情熱をもってください！』**

「殻の外へ踏み出そう。」産政塾のテーマである。私は「殻」とは、「自分自身の限界ライン」だと考えた。そして、自分自身の限界ラインを超えることで、今までと違った何かが見えるのだと思った。自分自身の限界ラインを探す旅が始まったのである。私はAグループに選ばれた。早速グループ討議が始まった。私はグループリーダーに立候補した。

これは、前日から決めていた。自分自身の弱みを改めて知り、克服するチャンスだと思っていたか

らだ。グループ員は全員快く受け入れてくれた。私は、Aグループのリーダーを担当させてもらい、本当に感謝している。本音を言うとな不安が多かった。社会のことあまり知らず、また自分自身の発言は、根拠がない。思いつきで話をすることが多い私は、各企業の将来のリーダーである若手社員を相手に会話が成り立つのか？そう思っていた。さらには、要点を的確に相手に伝え、話を纏めることが、うまくできない。話が腹に落ちず、いつも適当な言葉になってしまう。自分自身の弱みに気付いていながら、なかなか克服できずにいた。だからこそ、チャンスだと思った。産政塾では、各々で企画を立案し、要点を塾生に伝え、実行に移す。私の苦手な要素がたくさんあるからだ。

私の進行の下、討議が始まった。ずっと不安に思っていた塾生との討議だったが、すぐに不安が安心に変わった。Aグループのメンバーは、少しの話題を大きく広げてくれた。討議が順調に進むように、援護してくれたように思えた。各々がどんどん発言してくれたおかげで、Aグループの企画は決まった。本当にうれしかった。限られた時間で、企画をまとめることができるのか？リーダーに立候補したものの、役に立てるのか？前日から決めていた事だが、腹をくくることができずに一人不安を抱えていたが、ひとつ解消できたからだ。開塾式で行ったグループ討議は、Aグループ全員が揃った最初で最後でもあった。だがあのぎこちない雰囲気から始まったグループ討議での熊谷さん、柳瀬さん、松浦さん、大田さん、日下さんの顔は今でもしっかりと覚えている。本当に、楽しかった。

【変化】

殻を捜す旅は、全5回。初めの企画担当である、我がAグループは、自分自身を見つめなおし、原点に戻る「無の探求」をねらい、お寺での1日修行体験を行った。1日2回の坐禅を行い、感じとった気持ちを書にする。岡崎市にある滑信寺いしんじというお寺に企画を持ち込んだ時、御住職は快く承諾してくれた。坐禅は想像以上に辛かった。しかも1日2回も。心を無にする為に行ったのだが、なかなか難しいことに気付いた。ついつい雑念が浮かんでくる。無が何かはわからなかったが、私は坐禅を通じて「心」という一文字を書にした。何事も、すべては心から始まるのではないかと考えた。「心が動く」、「心が弾む」、感情から物事を考え、そして「決心」する。そして「心を込めて」行動に移す、言葉にする。心がけひとつで、すべてが変わる。そう思い、紙いっぱい「心」という言葉を描いた。この日御住職から心に響く説教をいただいた。「余生、余生と言うが、余った人生などないのですよ。」これは効いた。人生いつ何が起こるかわからない。だからこそ毎日を後悔の無いように一生懸命生きていく。そう理解した。自分自身はどうだろうか？ただ毎日を過ごしていいいか？私は生活の中で何でもいから、一つ目標を持ち達成する。そう決めた。最初の旅では、これからの旅を迎えるにあつての、目標を見つけることができた。

「これから出会った人、体験を確実に心に留めよう！」

第2回の間伐体験。これは貴重な体験であった。今まで「木を切る」とは、森林伐採で良くないこと、と思っていたが、そうではなかった。多くの地域では「人工林」と呼ばれる人の手によって創ら

れた森がある。伐採を補う為に良かれと思つて行つたのであらうと思つたが、この人工林が、集中豪雨での土砂崩れを引き起こしている。先日、あるテレビ番組のインタビュで、「50年後の地球環境をどう思われますか？」という投げかけに「50年後なんてもう生きていないからわからない。今大丈夫だから。」と笑いながら回答した大人を目にした。きつと、一昔前に森林を伐採し、そして植林を行つた人たちも同じ気持ちだったのだらう。今が大丈夫だから良い。こういった考えがある限り、環境問題を解消する事はできないだらうと思つた。実際に間伐体験をしたのだが、これは違う意味で効いた。間伐ポイントに向かうまでの急勾配。普段は電気ノコギリで間伐するところを、手動でやつた。1本の木を切ることがこんなにも辛いとは思わなかつた。だがこの辛さこそが、人間が長い年月をかけて壊してきた「自然」を元に戻す難しさであるとも思つた。この体験をする、数週間前、私はひとつの命をさずかつた。私は、子供の将来の為に何ができるかを考え、1日1回、省エネを意識することにした。

第3回は、地域活性化を学ぶ為に宮崎県に飛んだ。泊まり企画ということもあり、1週間程前から胸が弾んだ。宮崎県庁について最初に受けた印象は、まるでショッピングセンターを思わせる程の入りやすさだった。県庁と聞くと、非常に硬いイメージであつたが、いたるところに、特産品の写真やら、知事の等身大写真などがあり、また働いている人達が活気に満ち溢れていた。ここでは、東国原知事を先頭に取り組んでいる地域活性化活動について話を伺つた。「おもてなし日本一」を目指した、県民協力戦を実施しているとのことだったが、この政策は至る所で実感した。JAの方、西の都酒造

の方、町の店の方。どこへ行っても笑顔で迎え入れてくれた。宮崎県自体が、気候とは関係なく暖かく感じた。自分自身、地域活性化をどうしていけば良いかというよりも、どんな町に住みたいかというイメージができた気がした。活気のある町には魅力があった。

残念ながら、第4回の企画には参加できなかった。だが、参加した塾生のレポートを読んで、今後の自分を変えるきっかけとも言える、「言葉」に出会った。「心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変われば人生が変わる。」やはり全ては「心」から始まるのだと確信した。

【発見】

ついに最終の第5回を迎えた。最後は全員で何かを成し遂げる！ということと「富士登山」に挑んだ。正直なめていた。厳しさは歩き始めて2時間程でやつてきた。体力が低下していた事もあったが、徐々に冗談を言う気力が薄れてきた。今思えば、一人では到底登頂はできなかっただろう。一歩一歩足を進めながら、「殻」について思い直していた。「限界ライン」とは、一体何なんだろう？ラインって。きつと体力面での限界とはいえないだろう。

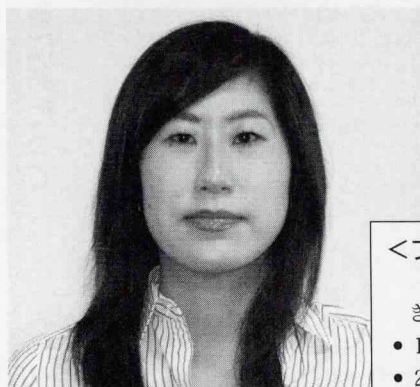
歩き始めて5時間程たっただろうか。ほぼ限界に近かった。そんな自分を支えてくれたのは、仲間励ましかった。「大丈夫か？」、「顔がきてるぞ！」いろいろと声を掛けてもらった。ふと気づいた。

「殻」。「限界ライン」。それは、どんなに辛い局面にいても、前向きに思える「心ばえ」ではないかと。そこで前向きに思えるかどうかで、その後の行動が変わっていく気がした。無事に全員が登頂に成功し、全員で見たご来光。最高だった。日本で一番高いところで見つけた答えだった。

【最後に】

半年間の産政塾。参加の機会を与えてくれた会社・上司、企画の中で出会った全ての方、そして第19期の塾生。本当に感謝している。この半年間で得た大きな財産。「絆」と「殻」。いつまでも大切にしていきたいと思う。私が思うに、人生とは自分自身の命を賭けた最大の投資である。一分一秒全てに命がかかっていると思う。だからこそ、本気で考え、生きていきたいと思う。全ては「こころ」。これからも辛いことや悩むことは、たくさんあると思うが、その度に、胸に手をあてて乗り越えていきたいと思う。本当にありがとう。

産政塾を振り返って



デンソー労働組合

北 村 美 帆

<プロフィール>

- きたむら みほ
- 1980 年 7 月 滋賀県生まれ
 - 2003 年 4 月 (株)デンソー入社
調達部配属
 - 2006 年 9 月 デンソー労働組合 執行委員
現在に至る

<趣味>旅行、音楽鑑賞

1. 産政塾へ参加するにあたって

産政塾へ入塾する際、上司から1枚の申込書を手渡されました。

そこには、「企業や組織に永くいれればいるほど、新鮮な問題意識が希薄化し、既存の“殻”を破る“こ”へのチャレンジ精神が減退し、広い視野での独創的な発想や総合的な判断が知らず知らずのうちに難しくなる。そして、この“殻”はどんどん破りにくくなっていく。この殻を破り、個人が成長し、企業も成長することが今求められている。」という問題提起とともに、「殻の外へ踏み出そう」というテーマが記載されていました。

当時入社5年目であつた私は、ある程度の業務を任せてもらえるようになり、ある程度までは成果を出せるようになったものの、新入社員から数年間に感じていたような、自分が昨日より確実に成長している実感をなかなか感じられなくなっていた時期でした。毎日の業務をこなすことに忙しく、過去から続けている同じやり方を何となく繰り返すだけで、今の考え方・進め方で本当に良いのか立ち返ってみるのが少なくなっていました。そのような時期に産政塾と出会い、「殻を破るってなんだろう・・・」と感じたことを覚えています。

「殻」とは「ここが限界だ」と何となく自分で決め、それを当たり前として捉えている境界のことだろうか、「殻を破る」とは自分がいつも行っている仕事の進め方、いつも接している方々との人間関係などについて、今までとは違う新しい視点で考え直してみようということだろうか、と自分なり

に考えました。

そこで、産政塾を通じて学びたい・得たいこととして、「異業種の参加者の皆さんや講師の方々が何を考え、何を大切にしているのかを知り、自分と比較することで、新しいものさしの存在を知り、そのものさしを自分の当たり前に取り入れてみることを」を心に決め、各企画に参加しました。以下、特に印象深かった2つの企画を取り上げ、振り返ってみたいと思います。

2. 活動を通じて学んだこと

(1) 宮崎県を通じて、「地域活性化の取り組みについて学ぶ」

当企画は、私が所属するDグループが企画したこともあり、最も思い出深い企画でした。当時の宮崎は、東国原知事が「宮崎をどけんかせんといかん」とアピールし、地域活性化に取り組んでいましたが、新しい知事によって何が変わったのか、県民がずっと変わらずに地道に取り組んできたことは何か、現地を訪問し現地現物で確認すべく、当企画を立案しました。

宮崎県庁の方々、地域の食産業や観光産業に関わる皆さんのお話を聞き、実際に取り組んでいる内容を自分も経験し、私が最も感銘を受けたのは「県民総力戦」についてです。

宮崎県では、人口減・少子高齢化、地域経済の停滞、雇用の悪化など、取り巻く状況が厳しい中で、

知事や県職員、経済団体などの一部の人間だけが考え・行動している現状を転換しなければならないということから、県民総力戦を掲げています。県民総力戦とは、宮崎県の発展に向けて、県民全員が、それぞれの得意分野や持ち味を生かして、自発的に様々な取り組みを行っていくというものです。行政主導でテーマを設定して県民に実施・参加を呼びかけ、行政が支援を行うという従来の県民運動ではなく、県民総力戦を合言葉に、県民一人ひとりの意識改革を促し、県民みんなで知恵を出し合い、新しい発想で行動を起こしていくことに取り組んでいます。

一人ひとりが課題を他人事ではなく自分のことだと捉え、自分ができることから取り組みことで、宮崎県は変革を成し遂げたわけですが、組織の変革を考える際、これこそ大切なのだと思います。宮崎県庁の方は全員野球だと表現されていましたが、全員が自分なりの課題意識を持つてみんなを取り組まない、組織はなかなか変わらないと感じました。宮崎県が県民総力戦を成功させた理由として、トップが強力なメッセージを発したこと、行政の役職者など特定の人だけにアプローチするのではなく、県民と直接対話するフォーラムなどの場にて意識啓発を図ったことにあるとの説明がありました。自分が何らかの組織をまとめていく役割を担う際には、この手法を参考にし、生かしていきたいと思っています。

(2) 皆で富士山に挑戦！～富士山麓に塾生泣く～

当企画は、Cグループの皆さんの企画で、「日本人の心のふるさと」『富士山』に皆で挑戦し登頂することを目標に、各人が準備と努力を尽くすことで、至極の成長感・達成感を全員で味わう」、「助け合い、励まし合うことを通じ、塾生間の更なる絆を深める」、「勇猛と無謀、慎重と臆病、リスクテイクと賭け、様々な局面で、各々の違いを見定める力、そして決断する力を養う」ことなどを目的に、全員登頂を目指して富士登山に挑戦しました。

私は今回の産政塾で三回目の富士登山でした。過去二回の富士登山はとにかくつらく、息が苦しく、頂上までが長かったという思い出しありません。しかし今回は、つらいことも息が苦しくなることもなく、頂上までの距離も過去ほど長く感じませんでした。

その要因として、過去の登山と今回の登山において大きく異なると感じた点は「計画性」です。過去の登山は、苦しくなるまでは1時間以上休憩を取らず、調子が良い時には小走りで登るような、自分のペースで好きなように登るスタイルでした。それに対し今回は、疲れていても疲れていなくても、何分歩いたら何分休むというペースを守って登り、どんな急斜面でも平らな道でも、決まった歩幅を守って進むというスタイルでした。頂上までの距離は今も昔も変わらず、頂上まで登ったという成果も同じであるのに、過程が違うだけで、辿り着く大変さがこんなにも違うものか・・・と思います。

私は日々の仕事において、よりしつかりとした計画性を持って進めたいと考えており、計画的に進める能力を磨くことが課題だと思いました。ただ、頭では分かっていたものの、真には分かっ

いなかったと反省しています。今回の富士登山を経験して、計画性を持つことの大切さを身をもって感じました。同じ成果を出すのであれば、より計画的に効率的に進めることができるよう、自分の仕事の進め方を改めて見直します。

また、富士登山には後日談があり、登山の三日ほど後に偶然、塾生の一人にお会いしたのですが、全身が筋肉痛でここ数日動けなかった私に対して、その塾生の方は「全く筋肉痛にならなかった」とおっしゃったのです。その時私の頭に浮かんしたのは、下山の出来事でした。頂上からは各人のペースで別々に下山することになったのですが、私はとにかく早く楽になりたい一心で、ほとんど休憩を取らず、全速力で走って下山しました。その結果、たくましい塾生男性の皆様を差し置き、誰よりも早く一番に下山した私ですが、帰りに無茶をしたばかりにひどい筋肉痛になってしまい、やっぱり計画性は大事だなあと痛感したのです・・・。

3. 今後取り組んでいきたいこと

「異業種の参加者の皆さんや講師の方々は何を考え、何を大切にしているのかを知り、自分と比較することで、新しいものさしの存在を知り、そのものさしを自分の当たり前に取り入れてみることを」を心に決めて参加した産政塾でしたが、参加前と参加後では、自分の中のものさしに少し変化があったと感じています。何事も頭の中で考えているだけでは真に理解することは難しく、自分たちで考え

たことを現地現物で体験する機会をいただけたことは素晴らしいことでした。

今後、今を当たり前とせず、広い視野で物事を考える姿勢を常に忘れないようにします。言葉では簡単でも、実践するのはなかなか難しいですが……。産政塾に参加後、私のモットーは「殻を破る」に変わりました（ちなみに参加前は「生涯青春」でした）。産政塾スピリットを持ち続けて、残りの人生を過ごしていきます。

最後になりましたが、東塾長をはじめ、事務局の松井さん、塾生の皆さん、特にDグループの皆さん、本当にお世話になりました。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。塾生の皆さん、今後とも交流を深めさせていただきたいと思っていますので、どうぞよろしく願います。

「殻探し」の旅を終えて



アイシン労働組合

日 下 喜与美

《プロフィール》

くさか きよみ

- 1992 年 4 月 アイシン精機株式会社入社
営業企画部配属
- 2001 年 4 月 人材・安全衛生部へ異動
- 2004 年 9 月 アイシン労働組合中央執行委員
- 2008 年 9 月 アイシン精機株式会社
人材開発部
現在に至る

<趣味> 茶道、華道、フラメンコ

1. 「殻探し」のはじまり

次代を担うリーダー育成を目的とした産政塾が開塾した。「殻の外へ踏み出そう!」というかなり漠然としているテーマに、不安とプレッシャーを感じる一方で、仲間と共に活動を進め、それぞれの活動から何を得ることができるとか期待が膨らんだ。

この産政塾での経験により自らを成長させるためにも、まずは原点に立ち戻り、私にとつての「殻」とは何か、それをしっかりと見極め、そのうえで殻の外へ踏み出す努力をしなければならない。

8カ月間の「殻探し」について、各活動内容と共に振り返ってみたいと思う。

2. これからの活動に向けて ～開塾式にて～

労働組合の専従執行委員となって4年目になる。事務局の松井さんとは、同じ単組であり、また同期でもある。お互い専従役員最後の年にあたり、ともに貴重な経験をさせていただくことに胸を躍らせた。

そして、開塾と共に始まった憧れの東塾長のお話して大事な考え方をご教示いただいた。

「大切なこと」①歴史を紐解くよう勉強する ②情熱を持つ ③行動をおこす

「学ぶ姿勢」①自らの意見、考えをどんどん発言する ②チームワークを作る

③一つでも多くの感動を得る

東塾長の謙虚でありながら堂々とした信頼感を感じさせる姿と、一人ひとりの目を見て情熱的に話してくださったことは、私の心を浄化した。忘れかけていた情熱を取り戻し、心気一転気持ちを切り替え、これからはじまる「殻探し」に対する姿勢が整ったように感じた。

3. 成長に向けた無の追求!! ～第2回会合～

第19期企画初回、これからの活動をより効果のあるものとするために、「無の追求!! 自らを見つめ直し、更なる成長」をテーマに、座禅を通じて「無」になることを行なった。我がA班の企画として、開塾式から間もない限られた時間の中で、打ち合わせを行わなければならない、何とか多忙なメンバーの日程調整をし、企画案を練った。

座禅という苦痛な時間を体験することにより、自分自身を少し見直すことができた気がする。自分にとっての限界を知る、自分自身を見つめ直すという貴重な体験であった。

また、座禅の後には墨を磨り、感じたことを筆で記した。仲間の感じたことを伺うことで、同じことを体験したにも関わらず意識の違い・経験の違いで感じるこの違いを実感した。

4. 真実を知る・そして行動を起こすことの大切さ　　～第3回会合～

テーマは、「地球を守る、着実に行動を起こす!!」。環境問題について考える機会になった。

環境問題という言葉は、あらゆる場面で耳にする言葉だったが、今回の取り組みで正直度肝を抜かれた。勝手な思い込み、表面的な知識で分かったつもりになっていたことが大きな誤解だと知り、今回の活動を通して、正しい知識を知ること・伝えることの大切さを改めて認識することになった。

また、実際に間伐体験することで、作業の大変さを知ると同時に、私たちの地球を守る喜びを実感することができた。それ以降、正しい知識を職場の仲間、趣味の仲間など、できるだけ多くの方々に伝えることを実践している。

仲間とともに作った木のベンチは、両親の営む店の片隅で母とお客様の井戸端会議をさらに長くすることに貢献している。ベンチ利用者には環境に関する正しい知識を母から伝えることになり、産政塾の仲間と作ったベンチは大活躍です!!

5. 参加することの大切さ　　～第4回会合～

宮崎県に場所を移し、宮崎県の地域活性化の取り組みを学んだ。自分自身のこと、自分の住む地域のことについて以外と知らない（考えてない）ことを再認識する機会になった。

東塾長に「考えることが重要で、自らが主体的に、他人事にしない。人と一緒に生きるのは人としての役割」との言葉をいただき、ドキッとさせられた。家庭内の役割、職場での役割は、毎日生活をする上で考えなければならない環境にあるのは間違いない。ただ、社会人として他人任せにしていたのは否めなかった。範囲が大きくなれば、一人ひとりの影響力は大きいものではないが、微力でも多くの人が変わること、行動を起こすことで大きなうねりを起こすことができる。

また、自らの街を守るために街全体を巻き込んだ取り組みに触れ、改めてリーダーのあり方についても考えることができた。自らが目標とし勉強したいのは勿論だが、私たち一人ひとりがリーダーを決める重要な選挙権を持つこと、そして、その一票を自分のこととして、そして地域・社会をより良くする可能性のある貴重な一票を私事として深く考える機会にもなった。

6. 始まりは情熱から 〈第5回会合〉

「すべての始まりは『情熱』から」という魅力的なテーマだった。開塾式で塾長にいただいた言葉だ。当日、講話いただいた今西GMは実に魅力的な人柄で、講話の内容も終始興味深く聞かせていただき、時間の経過がかなり早く感じた。「心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変わり、人生が変わった。」と激励の言葉をいただき、志があれば人生が変わることを身をもって教えていただいた。

講話の後は、服部部長の指導により、サッカーボールを使い皆で運動した。運動服で汗だくになった仲間に対し、体と心の距離が縮まった気がした。スーツ姿では感じ得ることのできない感覚だっただろう。情熱を持ち、心と体でぶつかり合っていた学生時代に戻れた瞬間だった。

7. 仲間と共に乗り越えること ～第6回会合～

この第6回会合は、今回の産政塾の、そして、私自身の組合専従4年間の集大成となった気がする。富士山登山は、これまでも何度か登りたいと思いながら、実行できていないことだった。いざ当日を迎え、ガイドの船藤さんに指導をいただきながら登山を始めた。先頭を歩く船藤さんは、「足の裏をしつかり地面に付けて」「呼吸を深くしながら歩いて」と、疲れが溜まりだした頃に、的確なアドバイスを何度かしてくださった。仲間と声を掛け合いながら、休憩の際には仲間と食べ物を分け合いながら、着実に一歩ずつ山頂に近づいていく。途中で見た夕焼け、夜景は心に染みる程、美しかった。仲間全員で拝んだ御来光は言うまでもない。

リーダーの的確なアドバイスと、苦しみ・喜びを分かち合う仲間がいたからこそ、富士山登山を全員で登ることができたのだと実感した。職場でも同じだ。リーダーがいて、リーダーと一緒に付いていく仲間がいる。一人ではなく、志を共にする仲間と乗り越えることで、大きな感動を得ることがある。

また、何より企画班の皆さんが、事前にたくさんの情報を調べ展開してくださったこと、事前練習

会を企画してくださったことが、全員が無事に登ることができた大きな要因だったのではないかと思う。大きな感動をありがとうございました。

8. 「殻」とは何か　　↳閉塾式↳

「殻」とは何か。「殻探し」の旅を終えるにあたり、仲間全員で話し合うことができた。

私の場合、社会人になり、いつしか情熱を持ち取り組むことよりも、複数の意見を波風が立たないようにならめたり、上手に取り繕うとしている自分がいた。これが組織での生き方と信じていたが、塾生一人ひとりの熱い思いに触れ、数年前まで抱いていた、自分の信念を相手に伝える情熱を思い出させてくれた一つのきっかけになった。

情熱を持ち続けることが、自分自身を成長させ、同じ志を持つ仲間を動かし、大きな力になることを身をもって体験し、そのような意識を持つことで少なからず自身の成長につながったと感じる。

「守・破・離」という言葉がある。私はこの言葉の意味を深く考える機会を持つことができた。職場での仕事では常に改善を求められていた。この改善という言葉の意味を表面的にしか理解できてなかったことに気づかせてもらえた。

また、普段の組合活動自体に改善を感じることができなかった。しかし、労働運動の勉強をしつつ、先輩方の活動の一つひとつ紐解いていくと、労働者（組合員）として全員参加しやすい活動、そして

意思を結集できる活動が今の形になっていることを知ることができた。私は、変えることを目的としていたのかもしれない。

私は、アイシン労組で初めて女性の執行委員をさせていただけでなくことになったが、最初は文化の違い、意識の違いに戸惑うことが多かった。ただ、これはアイシン労組の長い歴史の中には、私の悩みは本当に小さなもので、先輩方が大きな決断を迫られながら、多くの人々の意識や文化を変える努力を継続し、現在私たちは働きやすい、恵まれた環境の職場で仕事をする事ができている。このような先輩方の活動による結果だということを常に感謝の気持ちで忘れずにいたいと思えるようになった。

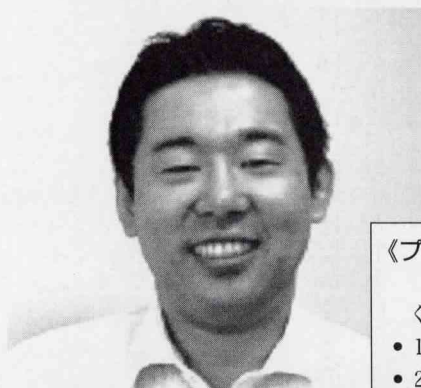
9. 最後に

この第19期産政塾の経験を通し、今現在の私の「殻」を見つけることができた。まだまだ「殻を破る」「殻の外へ踏み出す」ところまでは至っていないが、考えるべきこと、やるべきことは明確になった。決して小さな殻に閉じ込められることなく、無限の可能性に満ちた殻の外へ踏み出すことにより、より大きく自らを成長させていきたい。

第19期として産政塾の活動は終了したが、自分自身の「殻探し」は、今後も続けなければならない。この気持ちを持ち続け、成長し続けることが今後の私の課題になると考えている。

このような気持ちを思い出させてくれた産政塾の東塾長、事務局の松井さん、そして参加をさせていただいた上司・同僚の方に改めて感謝申し上げます。

「私を変えたメンバーからの言葉」



株式会社デンソー

熊谷 靖 公

《プロフィール》

くまがえ やすひろ

- 1977 年 5 月 13 日 福岡県生まれ
- 2000 年 4 月 (株)デンソー入社
現在に至る

<家族>妻

<趣味>ゴルフ・健全な麻雀

1. はじめに

昨年12月、私は直属の上司にこう言われて産政塾に参加した。

「仕事のご褒美をあげる。」

そして先日、上司に産政塾を終えて「ご褒美はどうだったか」と、聞かれてこう言った。

「人脈づくりがすべてでした。」

今考えると、人脈という言い回しは正確ではなかったと思っている。

人脈というと、その脈を足がかりに、会社人生を有利に進めるという印象がある。

もう一度言い直すなら

「出会いがすべてでした。」となるだろう。

会社人生ではなく、人生そのものを豊かにする出会いだった。

私はもうすぐ8年間特定会社の特定部署のほぼ特定の仕事に在籍することになる。

人によつては普通だと言う人もいるが、欧米と違い事務系にジェネラリストが求められる日本の中ではあと数年働けば、長い部類に入ってくるだろう。

特定の会社の特定部署が長いと、典型的に起きがちな3つの現象が私の身にも起きていた。すなわち、

①1日で話しをする相手の95%が同じ部署の人間である。

(喜ばしいことに妻も同じ部署にいたため、95%という数字は大げさではない。)

②初めての仕事が来ても、勘がはたらき、うろたえることが少なくなる。

③仕事場が心地よく、月曜の出社が苦ではない。

欲をかなければ、こんなに居心地の良い状態はないだろう。成長はしづらいが、病気にもならない。レストランの店員に例えれば、店内の人間関係、伝統の味、その他限られた情報への内向きな敏感さで勝負できている一方で、外を通るお客さんの懷具合や周りの店の変化には鈍感になっている。

私の好きな言葉に、豊田佐吉翁の「障子をあけて見よ。外はひろいぞ。」という言葉がある。

障子の中で夢中になつていた私も、そろそろ外に目を向ける時だと思つていた。

都合が良い話だがそんな私にとって、産政塾という社外の集いは確かに「ご褒美」であり、入社したての頃、「会社に入っても5割は社外の人との人脈を持つ」と意気込んだ自分にとって、損得抜きでの「出会い」が得られる絶好の機会であつた。

次項以降、終塾にあたり寂しさを感じざるを得なかつた、すばらしい仲間との出会いを振り返りたい。多少かつこよく言えば、私にとつて大切だつたことは行つた場所や出来事ではなく、第19期生同期や企画先での講師との出会いであり、また私が自分の殻を内側から破るきっかけをくれた彼らの「言葉」だつた。

そこで、ここからは「私の考え・行動を少なからず変えた言葉」を軸に、当時の心の変化を描写し、産政塾の意義を示したい。（事前に根回しもせず、勝手に名前を出された友人には、申し訳ない。）

2. 私を変えたメンバーの言葉

（1）「無理だと思うことでも、必ずやり遂げる方法がある」…トヨタ人事 吉清さん

2008年5月、第3回企画終了後の懇親会のときだった。ほろ酔いの我々にトヨタ人事吉清さんを含むCチームのメンバーが、産政塾の最後の企画案を、おもむろに話しはじめた。

「富士山に全員で挑戦したいと思う。」

そう提案を受けて、まず私の頭に浮かんだことは、「絶対全員は無理」ということだった。

当時、登頂経験はなかったが、話を聞く限り、参加者20数名全員が登りきることはリスクが高すぎた。その時まで開塾式も含めて計3回、皆が楽しく、一体となる活動ができていただけに、塾を締めくくる大切な企画に1人でも脱落者を作るようなしかけをすべきではない、と直感的に感じたのだ。周囲にも同じ思いを抱くメンバーがいて、柔らかくだが、リスクが高すぎることを訴えた。その時に出きたのが、この「無理だと思うことでも、必ずやり遂げる方法・工夫がある」という言葉だ。

吉清さんはさらに続けて言った。

「最後の企画だからこそ、皆で本気で挑戦し、限界を超えた企画にしたい。そのための準備は惜し

まない。」

当時私は、その言葉に「1人2人の脱落者は覚悟の上で、挑戦の方を選ぶのか」と誤った捉え方をしていた。しかし、その後の彼らCチームの準備は情熱的かつ周到だった。彼らは本気で「全員登頂」を信じていたのだ。

私が覚えているだけでも、彼らの準備には次のようなことがある。

- ①計3回の事前練習会の企画・実行（猿投山×2回、金華山1回）
- ②購入すべき登山グッズの品定め、詳細なアドバイス
- ③登山ガイドの選定と、綿密な打ち合わせ

各人、会社の仕事も忙しい中で、土日を多くつぶしていた。簡単ではなかったであろう。

しかし、この準備のおかげで、いや100%この準備があつたからこそ、途中激しい雨と雷に見舞われながらも、塾生全員が、誰1人残らずに、富士山頂まで登頂できたのだ。

1人も欠けずに富士の山頂から見た、何も覆い隠すものがない眼下の美しい光景が今も目に焼きついている。

富士下山後（私にとっては登山より下山の方がずっと苦しかった）、疲れ果てた帰りのバスの中で、私はあの言葉を思い出し、自ら反省し



<富士山頂にて朝日を浴びる第19期生（2列目中央が吉清さん）>

きりだった。まだ年齢的には若いはずの自分の考え方・生き方が老いてきているのではないかと。社会人になった当初は、高い壁を見たらどうやったら登れるかをワクワクして考え、困難であればあるほど燃え、そのための準備を惜しまなかったはずだ。

じりじりと、胸を熱くしてくれる、そして一步一步の積み重ねの大切さを思い出させてくれる、そんな貴重なメッセージを頂いた吉清さんに感謝。

（２）「JRだ？名鉄に乗らないかんて!!」…名古屋鉄道労働組合 坂西さん

私の会社（デンソー）は、JR刈谷駅そばにある。また、私の家は、JR刈谷駅から1駅の野田新町という駅にある。つまり、よほどのことがない限り、名鉄に乗る機会はない。そんな私も、名鉄坂西さんの前では、「JRに乗ってきました」とは一度も言えなかった。しかし、それは、名鉄から参加された方の前だったから言えなかったわけではない。相手が坂西さんだったから言えなかったのだ。

坂西さんはいつも「名鉄に乗らないかん」と言う。それはもう口うるさいほどに。

自分の企画の時だけでなく、どの企画の時にも、丁寧に名鉄電車や名鉄



<泥沼にはまったバスを救出する坂西さん（エンスト中?!）>

バスの時刻表を調べ、塾生に事前に連絡をしてくれる。そしてことあるごとに、民主党河村たかし顔負けの名古屋弁で名鉄のPRをまくしたてる。

坂西さんに直接言ったことはないが、私はそんな生粋の名古屋人の純粋な愛社精神、愛郷土精神に、強く感銘を受けていた。

果たして私は、知り合いに会うたびに、あるいは故郷の福岡に帰るたびに、はずかしげもなく「デッソーをよろしくお願いします」「デッソーの製品が入った車を買ってください」と言っているだろうか。口うるさいほどにお願いしているだろうか。

坂西さんを見ると、我々がサラリーマンである前に商売人であり、就職ではなく就社しているという当たり前のことを思い出させてくれる。

自分が所属する会社に対する純粋な思いに気付かせてくれた、皆から愛されるおちやめな坂西さんに感謝。

（３）「来年も富士山に挑戦すべく、早速体を鍛えはじめました。」…東海理化人事 小野さん

富士山に登った翌日だったと思う。極度の筋肉痛と限界に近い眠気の中で、朦朧（もうろう）と会社で昼休みを過ごす私の携帯に、同じ企画Aチームのリーダーである小野さんから、こんなメールが入っていた。

「来年も富士山に挑戦したいと思います。早速今日から体を鍛えはじめました！」

なんと、無邪気で、情熱的で、力強い言葉だろうか。決して彼は肉体的にスーパーマンというわけではない。富士山では皆と同じように疲れ、同じように膝の痛みにぎりぎり耐えた1人である。私が「皆で登った富士山は確かに充実していた。だけど、二度と登るものか」と最も強く思っていた瞬間に、小野さんは既に次の行動に、足を一步踏み出していたのだ。

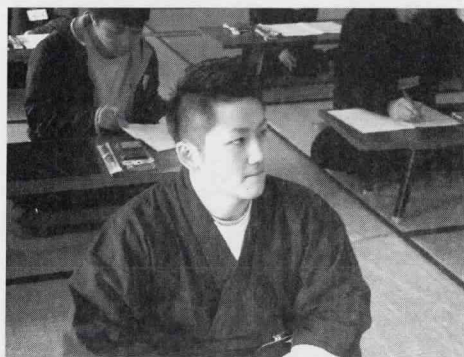
彼は企画Aチームの最年少で、27歳という若さであったが、自ら立候補してリーダーを務め、我々をまとめてくれた。前述の言葉は、彼の情熱と、旺盛な挑戦心とバイタリティを表す一つの例である。そこに年齢は関係ない。

私は彼のガッツを一つの見本とし、この1年間大いに元気をもらい、そして「ごたごた言っていないで、動いてみる。一步踏み出してみる。」ことの意味を信じることができた。

産政塾のテーマ、それは「殻の外に踏み出そう」である。東塾長は開塾式の際に、我々塾生にこう語りかけてくれた。

「殻から踏み出すのに大切なことは、まず歴史を知ること。次に、情熱を持つこと。そして、最も大切なのは、行動することだ。」と。

今後も小野さんを見本とし、師匠とし、ライバルとし、いつも好奇心旺盛に、新しいことにチャレンジしたい。



＜住職の話真剣に聞く小野さん＞

ちなみに、まったくの独断と偏見で、彼から怒られそうだが、その熱くわかりやすい語り口と持ち前の実行力は、政治家向きだとしばしば感じた。万が一国政あるいは県政に立候補するようなことがあれば、後援会長を喜んで申し出たい。若年の師匠、小野さんに感謝。

3. 最後に

最初にも書いたが、総じて同じ場所に長くいると、深く専門性を追求する時間を確保できる一方で、自分の中の常識が凝り固まり新たな発想やエネルギーが生まれにくい。私が3人から受けた小さな「異文化」は、私を確かに変えた。きっと私だけでなく、各人がそれぞれに刺激を受け、与え合い、連鎖的な成長が生まれたと感じる。30代前後の異なる文化を有する若者が集い、「殻を破る」という同じ目標の下に、貴重な時間を共有できる産政塾は、今後も廃れることなく続いて欲しい、すばらしいしかけだと思う。

実際には、ここであげさせていただいた3人以外にも様々な人の様々な言葉や行動に感銘を受けており、今も、それぞれの顔と言葉が鮮明に思い浮かぶ。ただ、あまり書くと、うつかり変なことまで書いて皆から怒られそうなので、しぶしぶ、ここで筆を置きたい。

どの世代でも言われるのかもしれないが、改めて振り返ると、第19期生はガッツがある、いい奴が

多かつた。彼らから存分に刺激を受けた一方で、私が彼らの刺激になれたかどうか不安は残る。頂いたものの恩返しは、これからも続くであろう第19期生との付き合いの中で、あるいは自らの後輩に「外はひろいぞ」と伝えることで、ゆつくりと返すことにしたい。

最後の最後ではあるが、我々第19期生に、公人としてお忙しい中、暇をぬってまるで同期のように若々しく付き合ってくださいった東塾長、そして時にわざと自らを笑いのにし、おどけながら、しかし情熱的に我々をリードしていただいた事務局の松井さんに心から感謝したい。本当にお世話になりました。

産政塾誌によせて



全ユニー労働組合

近 藤 智 也

《プロフィール》

こんどう ともや

- 1972 年 5 月 愛知県江南市生まれ
- 1995 年 3 月 サークルケイジャパン株式会社
(現㈱サークルKサンクス) 入社
- 2007 年 9 月 全ユニー労働組合
専従 中央執行委員
現在に至る

<家族>妻、子供 1 人

<趣味>読書 (歴史物)

自分のチェンジへのチャレンジとコミュニティづくり 第19期産政塾に参加して

Ⅱ 産政塾Ⅱ

冒頭から皆様におわび申し上げます。

私は産政塾暦1回という不名誉極まる記録を作ってしまった。企画打合せは一度参加させていただけましたが・・・。

余り言い訳をしたくありませんが、個人的にはものすごく参加したかったのですが（特に企画に参加させていただいた宮崎）何しろ単組でのどうしても外せない業務がことごとくバッティングしてしまいました。

松井さん始め、班のメンバー諸氏にはこの場を借りてご寛恕いただければと思う次第です。

私の無念と、参加はできませんでしたが、産政塾魂を受け取ったものの私がどう殻を破りどうチェンジし、どう今後の人生に繋げていくかをツラツラ記載させていただきますので、ご笑読いただければ幸いです。

＝私にしろ＝

子供の頃の私は、末は博士か大臣かとよく親ばかりを揶揄する例えだが、かなり期待を集めていたらしい。そして期待を裏切り続けてきたのが、これまでの人生と言えるかもしれない。そして現在はチェンジ目指してチャレンジを続ける毎日であり、親として子育てをしている。この後、少し私についてお付き合いいただければと思う。

幼少時親戚縁者からもてはやされた本人もまんざらではなかったらしく、確かに本ばかり読んでいた記憶がある。なにしろ、同世代の子供達が耽溺していたと思われるウルトラマン、仮面ライダーとか、戦隊もの？に関する記憶が見事に無いのだから・・・。今思えばかわいげのないガキだなあと赤面する思いばかり。

じゃあ何してたかたと言うと、初めて触れた本は物語日本史という全20巻に及ぶ大作？だった。小学校入学前の子供にそんな本を買ってくる父親に一言言いたい気がするが、期待の裏返しといえなくもない。おかげで好きな言葉は「義を見てせざるは勇なきなり」という型の人間が形成されてしまった感がある。今うちの子供は2歳半。最初に買い与える本は・・・やはり歴史モノ？

神童？が長ずるにつれ、神童説を見事に払拭して普通の学校を普通の卒業生として卒業し、普通の会社？に普通に入って普通のサラリーマンとして普通に結婚して普通に生活してきたつもりだった。そんな私に変わるきっかけを作ったのは仲間であつたと思う。

労働組合活動は当初大嫌いだった。何しろ最初に関わったのが新入組合員ユニオンスクールという代物で、当時研修中でコンビニの夜勤明けの休みに、休日返上かつ強制的に出席させられて、余りの睡魔に耐えかねて？半分寝る気満々で、寝ていると頭を思い切りどつかれた記憶しかなかったから・・・。

その後、労組と無縁の2年を過ごし、研修を終えて店舗指導員になったとある飲み会で現在某組織で三役をやっているY氏に酔っ払った酔眼で見据えられて「お前がやれ」と当時の地区の委員になったのが、きっかけだった。

その大先輩はその後、正しい役員の頼み方等々それなりの話しをされているが、現在の私もそうしたキライが無きにしてもあらずなので自戒せねばと思いつつ、まあいいかという自分もいたりする・・・。

その後、会社員として店舗指導員から店舗開発担当になりTV出演をしたり、普通の会社員からモレツ会社員に変身しながら、労組役員としては、酔っ払いに任命された地区の委員から、いつの間にかサークルKサンクスの支部長（委員長）を勤めさせていたでいる私がいきました。

社会人として、会社の先輩から業務遂行習ったこともありましたが、組合活動から習ったこともたくさんその頃あった。中でも卑しくも組織の長たるものキライな人間、意見の合わない人間の意見こそ傾聴し、間違っても排除したりするなというアドバイスは今でも私の中で大きな存在感を持ってい

る。

これまでもそれなりにまとめる立場みたいなものはあったが、公的に？代表となるのが始めての私には非常にありがたい言葉であり、今後この地位を引き継ぐときに、このような、有益な助言をできる人間となれるよう研鑽したいものと思ったことを覚えている。（できたかは疑問符がつくが）

思えば人とのつながりは不思議なものであり、人間は人とのつながりで良くも悪くも影響をうけるのではないかと考えている。そうした意味で産政塾は得がたい機会を提供していると改めて思う。

いろいろな所から人が集まり、一緒に物を考え、一緒に活動する言葉で言うとは簡単だが、面白い逸話を思い出したのでここで披露したい。T社の人事畑の参加者にT労組の会館（伏せた意味なし？）での会議つてどうですか？尋ねたら「完全アウェイで緊張する」と言っておられたのを記憶している。確かにこうした機会でもなければ、一緒に活動はしない組み合わせの最たるものだった。

話を戻すと組合大嫌い人間がなぜ、ここまで活動をしてきたのかという思いが専従者となる時に改めて去来した。

自分には能力があるから良い、自分の休みを削ってまで活動するなんてとんでもない、競争社会の縮図である民間企業で、連帯などちゃんちゃらオカシイと考えていた人間が年輪を重ねて2万人の組織の中央執行委員に立候補しないかと声を掛けていただくまでなつたかと畏まった記憶がある。

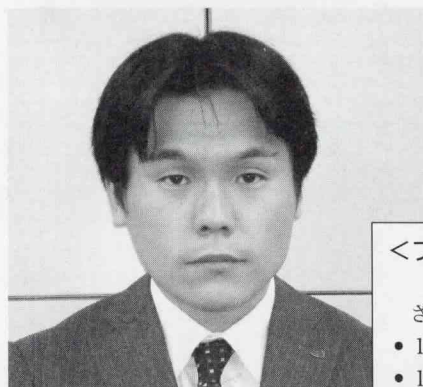
正直業務にマンネリ感を強く覚えていた気がしており、何か変わらなければと思っていた機会ではあった。業務にマンネリ感がありながら責任感もあり正直迷った。今まであまり人には相談しない人間であつたがこのときばかりは色々な方に相談申し上げた。

やると決めたのは、やはり自分をもう一段階進化させたいという思いが強かつたのが決めてと考える、キャリアが止まる、専従をやつた人間はロクな目に遭つていない等々マイナスイメージは強かつた。

それでも自分の人生一度は（もうやらないのか？）滅私奉公的なお勤めをしてはいいのではないのか、自分が断れば、可愛い？後輩たちがこの悩みを再びする等々色々な思いが去来しながら立候補し、中央執行委員として活動をしていくことになった。

そして産政塾へ参加せよと任命され開塾式に参加しました。残念ながら私の産政塾での活動はこれで終わってしまいますが、末席を汚させていただいた者として恥ずかし思いを皆様にお会いした時にさせることだけは無いように精進いたしますので、どこかでお会ひした時は宜しくお願い申し上げます。いと考えます。

『旅の途中で』



名古屋鉄道労働組合

坂西 記 明

<プロフィール>

さかにし のりあき

- 1977 年 9 月 愛知県名古屋市中区生まれ
- 1998 年 3 月 カーディーラーに入社し、
営業職を経験後
- 2002 年 2 月 名古屋鉄道株式会社
自動車事業本部（現 名鉄
バス（株））に入社
名古屋統括自動車営業所に
配属
- 2006 年 7 月 中央営業所へ配転
- 2007 年 9 月 名古屋鉄道労働組合
労働局部員（専従）
- 2008 年 9 月 名古屋鉄道労働組合中央執
行委員（専従）
現在に至る

<家族> 独身

<趣味> 阪神タイガースの応援
旅行 読書 散歩 雑貨屋めぐり

◆◆はじめに◆◆

1977年9月25日、その旅は始まった。

それから長い年月が過ぎたが、世の中がいろいろな輪廻を繰り返すうちにこの旅の中でも善悪いろいろなことがあった。加えて、善悪いろいろしてきた。(恐らく、いや、絶対「悪」の方が多いが…)また、この旅はエベレストの頂上から日本海溝の底まで一気に落ちたり、タクラマカン砂漠の砂塵にも負けないぐらいの嵐が吹き、視界が遮られることもしょっちゅうある。しかし、そんな時でも同じ旅をしている人に救ってもらったり、救ったりして助けられる。助けられた時は、気づけばハイジがペーターと遊んでいるようなアルプスの清々しい花畑にいたりする。辛いことが往々にしてあるが、それがこの旅の面白いところだ。

そんな中「随分遠くへきたもんだな」と言いながら年配の人に「タワケ!!お前いくつだ!？」と訝(いぶか)られていた矢先、2007年9月、その旅の途中で3度はあると言われる2度目の分岐点が訪れ、組合という道を進むことになった。そして、その直後、『塾』に行け。そこにはこれからお前が旅をする上での重要なカギが隠されている!!』と、ある人から一枚の紙が手渡された。

以下は、旅の途中行くこととなった「塾」で自分が体験したある一部の物語である。――

○○○「殻? ? ? ? ? なんの殻? ? ? ? ?」○○○

2008年1月のある寒い日の昼下がり、「名古屋から東の方に行くとかバミたいなのがある。とにかくそこへ行け！」とのことでいざ東に歩を進めた。するとデカすぎるカバが愛環の線路端にいたので、その口の中へ入ってみた。すると、人々が唸っていた。数にして30人足らずぐらいだろうか。「どうしたんですか?？」と問うてみると、「殻!!殻があゝ…」とみんな口にする。すると、多分この人は父親に似すぎるほど似ていて、その父親は恐らく自分（坂西）と同じ匂いをする仕事をしていたと思われる男が近寄ってきた。

「な、なんすか??オレ、塾に来たんすけど…」問いかけてみる。

「あゝあゝ」と、オレは人の話は聞きません!!みたいな軽い返事の後、突然「一緒に『殻』破ってみませんか?？」と、その彼は言う。

「……」

そのうち「レッツビギン!」とか言い出すんじゃないだろうなあと、少し後ずさりしたが「あ、その『殻破り』がこれからのカギになるのかもしれないなあ。」と思い「御意にござる。」と快諾してみた。その瞬間、その人々がどこかきこえないが、温かさを感じる輪をつくり出したのでその中に入れてもらった。後でわかったことだが、その殻破りこそがその「塾」の趣旨だという。しかし、殻ってなんだ?んまあ、よくわからんけどとにかく決めた以上、やるしかない。

「これからこの人たちと何が起こるのかな…」戸惑いに中にもワクワクが120%な自分がいた。

〇〇〇無、む、ム、mu…。〇〇〇

3月のある日、岡崎にある丘陵の谷間にあるという寺に行けば『殻』は破れるらしいとの噂を聞きつけ、みんなが結集した。

メンバーのひとりが、その寺の住職に言った。「あのく殻やぶりたいんですが、どうしたらいいですか？」するとその住職は「まず座禅して『無』になつてみなさい。そうすればなんの殻をやぶるか、わかるかもしれないよ」と、大きな笑みで教えてくれた。

すると、みんなそれぞれに座禅を組みだした。しかし『無』になるのはなかなか難しい…。そのうちヨダレが垂れてくるんじゃないかという具合にただただボー…とすればいいように思うのだが、それがなかなかできない。それは、みんなも同じようだった。

再度メンバーが住職に問うてみる。「あのく、『無』になれないのですが…。そもそも『無』ってなんでですかね？」すると住職は、「なにも考えず、ただただ頭の中を空っぽにするだけなんだけどね。でも、それがなかなかできないし、わからない。みんないろんな悩みや思いをもって生きているからね。実際私もわからないんだ。まだまだ修行中だからね。」と、日々『無』を探求している住職でも真髄はわからないみたいだ。『無』の無限さ、困難さを教えられた気がする。

それでは、いつ『無』がわかるのだろうか。恐らくこの旅の終わりに力尽き果てる時、はじめてそ

れがわかるのだろう。

でも、時には旅の途中で「ボー————」とするのも必要だよ！ということがわかった。が、それからというもの、「おい！なにボーッとしとるんだ!!」とよく怒られるようになった。ただ『無』になっ
ているだけなのになあ…。

しかし、『殻』の核心はまだまだわからない。その探求の旅は続く。

○○○オレ達 地球防衛軍○○○

5月の初夏を思わせるようになった頃、「山の木を切れば『殻』を破れるらしい」となんだかクレイジーなことを聞きつけ、足助の山の中へ行くことになった。その噂を聞きつけた奴とは……。オレ達だ!!

みんなで山のプロ達がいるという足助のある場所を訪ねた。「あのー、木を切りたいんですけど」と、そのプロの一人に話しかけてみると、「まあとりあえず座つてよ」

「いま山がどうなってるか」ということから、その人はいろんな話をしてくれた。山の中が荒れ放題、土まで陽が射さないから木の根が張らず育たない。根が張らないから土が雨で流れてく…などなど、山の中の現状がわかった。

一通り話を聞き終わったところで「それで、うちらができることはなんですか？」と訪ねると「山

の中に入つて要らない木を切つてくれるとありがたいな」との返事。

マ、マジすか……。

しかし！我々が地球防衛軍となり、要らない木というジオン軍と戦うことで地球が救われるのなら、やるしかない！との思いから、頭にヘルメット、首にタオルというモビルスーツを身に纏（まと）い、片手にノコギリをもつていざジオン軍が待つ山の中へ突入した。

でも山の中は猿でも歩かないであろう急斜面を登らなければならない。早くもドロドロの地面にジオンの洗礼を浴びることになった。「グウアゝ!!」「ギヤアゝゝ!!」という悲鳴の中、何とか要らない木が待つ場所へ到達し、対峙した。風が吹くたびに木々のそよぐ音がジーク、ジオン！と聞こえるようだ。それを聞いてみんなノコギリ片手に気合十分だ。

「まずは綱で相手を絞めてから、足元狙つてノコギリでとどめを刺すぞ!」と、山のプロの指揮の下、作業にとりかかった。しかし、プロが綱を締めるにもなかなかうまくいかない。手に汗握る攻防合戦だ。「よしノコギリで足元を切つてくれ」との指令でみんな交互に切り出す。ギコギコギコ……。うん、なかなか切れてくれない。そんな中、足元はドロドロの土と斜面というジオンの罠の只中で苦戦を強いられる。「もうダメか」と諦めかけたその時「後ろに下がれ!」との大号令とともに後ろに下がった瞬間、要らない木は斜面まつ逆さまに落ちていった。我々地球防衛軍の大勝利だ。エイエイオー!!と勝鬨を上げながら下山したのは言うまでもない。

地球を守る戦いは想像を絶するものだと、一同思いながら、要らない木Ⅱ間伐することで地球を

救えるということを広めようということで「PR活動よし!」と最後に誓いあった。何か、やり遂げた達成感がこみ上げ、見えない殻を破った気がした。

○○○どげんかせんといかん!○○○

「どげんかせんといかん!」6月、メンバーのあるグループが提唱した。「で、なにをするの?」と尋ねる。「どげんかせんといかんもんで、それを学びに宮崎へ行こう!」ということで、空路宮崎をめざすこととなった。

まずはどげんかせんといかん宮崎県庁へ。県として取り組んでいることを職員の方から伺った。いろいろ変わったことはあるが、県庁の雰囲気も大きく変わったという。そう、県庁はどげんかなっていったのだ。

それでは、県内はどげんかなったのか? みんなで2日かけて主立ったところを回ることもあった。マンゴ畑や選果場、官民一体となつて運営している焼酎工場、外部の人を招聘して地域活性化に全力で取り組む自治体…。そういったところへ足を運んで思ったのは、それぞれの担当の方の「目の輝きが違う」のだ。まるで、少年が夢見てキラキラさせているかのように。なぜだ? そう、「閉鎖的」という殻を破ったからに他ならない。もう十二分にどげんかなっているし、どうにかしようと試みてい

たのだ。どげんかせんといかん！という言葉が効いたかどうかはわからないが、そうでないにしてもその事業に取り組むひた向きや姿勢、こうありたい！こうしたい！という目標があつてこそ自然とそうなるのではないかと思う。

宮崎には、殻を破るヒントがたくさんあり、殻を破った後の人々がたくさんいた。「ああいうふうになりたい！やってみたい！」と思つたのは自分だけではなかったはずだ。マンガや地鶏ではなく、心に沁^しみる、何事にも代え難い大きなものをお土産として持ち帰つた。あとは、それを今後どう生かすかだ。

○○○絶対に負けられない戦いがそこにある！○○○

いよいよ塾も佳境に入ってきた7月、またまた殻破りな噂を聞きつけたグループがいた。どうもそれは岐阜にあるらしい。

FC岐阜。え？あのサッカーJ2の!?お、よくアポとれたなあ〜と思つていたが、どうも突撃アポだったようだ。メンバーの中にはもう殻を破っている人もいる。自分も早く殻を見つければ…。しかし、この塾は回を重ねるたび規模が大きくなり、また、メンバーの顔つきも違つてきている。なにより、メンバー間の一体感が出てきている。あと何回かで塾が終わってしまうのが寂しくなってきた。塾が終われば、みんなそれぞれの道に散つてまた旅を続けていく。残り少ないメンバーとのひ

とときを大切にしていこう。

さてさて、長良川を渡り未来会館に結集したメンバー。FC岐阜の今西GMも型破りというか、数奇な人生の旅を楽しんでいる一人だ。何か今西GMのルーツを聞いていて、物事を始めるきっかけや歩む道が変わるのは何の変哲のない、普段の生活を営む上でほんの偶然によって変わってしまうものだなと考えながら聴いていた。自分も、この先歩む道が変わることがあるのだろうか。

その後、トレーニング体験。もう……。でも、身体をフルに動かし、汗をじゃんじゃんかくのは楽しい。しかも汗をかいているベトベトな身体で抱擁しあう様子は気持ち悪いが、塾においての殻が破けてきている証だと思った。

○○○そして、またそれぞれの旅が始まる○○○

とうとうこの日が来てしまった。学校でいえば「卒業式」ひとつの節目である。この日を境にまたそれぞれ違う道で旅をしていくわけだ。この半年のあいだで、殻は見つけられたのか、破れたのだろうか。自分としてはもうどうでもよかった。この半年の間でメンバーと旅をし、かけがえのない人間関係を築けたのだから。そして、それぞれ歩いてきた道に戻り、旅を再開していった。決して楽しい旅ではないが、またいつかどこかの交差点でバツリ再会できることを願いながら…。

◆◆◆むすび◆◆◆

自分の人生を『旅』に例え、その道すがら、ふと寄った先が「塾」でありそこで起きたことをパロディーに例えながら筆を進めてみた。

30そこそこの歳の坊が言うことではないが、人生とは長い旅であり、旅のあいだには人情に触れ、同調してくれる人を見つけ、そして旅の果ては「辛くとも、楽しい旅だった」と終えるのが人として一番幸せなことだと思う。今回参加して、一番得たものはやはり人とのつながりであり、これからもあるであろう殻を一緒に殻を破れる仲間に出会えたことが何よりの収穫だった。最初に訪れた寺の住職も「縁を大切に」と説かれたことを思い出す。何をするにせよ「感謝」と「縁」を忘れず人生の旅を続けて行きたいと思う。

そして、仲間へお願い—— 自分がもしエベレストの頂から日本海溝に落ちそうになったら助けに来て、ハイジの花畑まで連れて行ってね。

みんな、Have a nice trip! ありがとうございました。

殻の外へ踏み出せた?! 産政塾の活動



刈谷市役所

佐々木 麻 子

<プロフィール>

ささき あさこ

- 1977 年 7 月 生まれ
- 2001 年 4 月 刈谷市役所入所
- 2004 年 4 月 福祉健康部児童課配属
- 2008 年 4 月 次世代育成部子育て支援課配属
- 2009 年 4 月 福祉健康部健康課配属
現在に至る

<趣味>スキューバダイビング

〈はじめの一步 研修への参加希望〉

私は保健師として就職してから8年目となります。保健師の仕事は保健・福祉分野が大部分を占めており、学生の頃から保健・福祉分野にとっぷりつかっています。漠然と、自分の感覚が偏っているのではないかと、視野が狭くなっているのではないかと不安に感じることもあり、他職種の人が参加するおもしろい研修があると聞き、この研修への参加を希望しました。

はじめの一步を踏み出したお陰で約半年という短い期間でしたが、産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」をキーワードに、他では得がたい貴重な体験させていただきました。この研修の総まとめが塾誌ということなので、各企画の中で感じたことを振り返りながら、気持ちのまま書いていきたいと思っています。

〈第二步目 開塾式〉

産政塾運営精神に「(犯罪以外なら)何でもあり?」と書いてあるのを見て、「何でもあり?」とはすごく楽しみだけれど、どんな研修になるのだろうかと不安を覚えたのは私だけでしょいか。

ただ、東塾長の「この研修とは自分を高めることにある!」という力強い言葉と、懇親会での親しみやすいみなさんの姿から不安が和らぎ、楽しくなる予感に変わった1日でした。

～第三步 無の探求 自らを見つめなおし、更なる成長へ～

2カ月ぶりに集い、『殻の外へ踏み出す』ための姿勢を培うため、岡崎市の渭信寺にて座禅を行いました。

体が硬い私に座禅は無理でしたが背筋を伸ばし、正座をしました。何もせずゆっくり呼吸をすると自然を感じる力が高まるようで、すがすがしい気持ちになりましたし、日々の忙しさなどで整理しきれていない気持ち整理できたような気がしました。ただ、雑念が多いせいか無になるのは難しいようです。

また、学びの共有化ために企画された書道では、参加者のほとんどが「楽」（楽しむ）「集」（集う）「謝」（感謝）など、前向きな表現が多く、ほんわかとうれしい気分になりました。一人ひとりの発表は緊張しましたが、心を柔らかくしてこれからの研修を楽しく、前向きに過ごすためのいい時間となりました。

～第四步 地球を守る、着実に行動を起こす!!～

自然から発せられる警鐘を知るため、豊田市で木の間伐を行い、その木材でベンチを作成しました。

講話の中で、「植林をした人工林は人が不自然に作り出したのだから、手を入れなければ維持できない」と言われ、はっとしました。間伐作業後の話し合いで、このことに気がつかなかったのはエコに対する認識不足や関心の低さであるため、塾生のこれだけはやろう宣言として「エコについてのPRをしよう!」を選択しました。一人ひとりの力は小さくても、関心を持つ人を増やすことでエコにつながると信じ、機会があればこの研修の話題をするようにしています。

身体を動かして、みんなで作業するのは気持ちがいいけれど、「本当のエコとは何?」と考えさせられる一日でした。

〈第五歩 宮崎県の地域活性化の取り組みを学ぶ〉

地域活性化の取り組みを学び、自分たちの住む町の未来を考える狙いで、昨年の流行語大賞である「どげんかせんといかん」で有名な東国原知事のいる宮崎県へ1泊2日で行きました。

知事のPR力がすばらしいことはもちろんのこと、調整型リーダーで、自分たちの意見を理解し、取り入れてくれ、いい意見については認めてくれるので、さらにやる気が起きると明るい表情で職員の人と話してくれたことが印象的で、リーダーとして何が大切かを学びました。

また、リーダーである知事のPR力により、宮崎県の認知度は格段に高まりましたが、それは地元力があつてこそです。そこで根底にある地元の力を体験するために、宮崎を代表するマンゴー畑を

視察しにいきました。商品価値を高める努力と、価値を維持する経営努力にただただ感心しましたし、地域全体で工夫された栽培方法や販売戦略など、「ものづくり大国日本」という言葉を思い出しました。

翌日は地域再生マネージャーの講演会后、この活動は「結局自分の会社が儲けるためだ」という意見もありましたが、地域への貢献は人材提供、事業経費など負担は多く、利益を得るには時間がかかります。それでも地域を育てることで自社の利益を生み出す「協働」の実例を聞くことは、いい刺激になりました。

また、異分野の人と話をする事で、企業の地域貢献がどのようなものか聞きたい機会にもなりましたし、公務員に対してのイメージを改めて聞き、自分たちのPR力の無さを実感するいい機会になりました。

↓第六歩 すべての始まりは『情熱』から↓

開塾式の日に話した方針は、実際研修を行うときには変わると聞いていましたが、私たちのグループは「情熱」を持つ人、行動する人、まとめる人、盛り上げる人など、それぞれがいろいろな役割で楽しく企画し、事務局の松井さんにもご協力いただいたおかげで初志貫徹？頑固？に最初の企画のま研修を行うことができました。

企画段階での話し合いで、「殻を感じるのには『挑戦する心』や『情熱を感じる気持ち』を持つ機会

が少ないからではないか」という意見が出たこともあり、「情熱とはなにか。」について熱く語り合いました。

「情熱」には形がなく、人により感じ方が違うことから結論は出ませんでした。下部リーグからJリーグへ昇格する目標に挑戦し、数々の困難を乗り越え、奇跡的にJ2まで昇格したFC岐阜の方の話を聞くことで、情熱を感じたいと研修を企画し、開催する運びとなりました。

私はサッカーについてほとんど知識がありませんでしたが、今西GMからは心に響くお話をいただきました。人として、社会人として、リーダーとして大切にしなければならぬことが詰まったお話でした。

人生経験を中心に話をしていただきましたが、常にいい結果を出すことが求められる時代の中で、夢や目標を見定め、自分に合った目標を設定し、コツコツと自分を信じて進む大切さや、「プロであることとは」など、自分の社会人生活を振り返るいい機会になりました。

東塾長からも「目標を持ち、前向きに挑戦し続けることで自然に熱中し、情熱が生まれる。今からでも考え、実行してほしい。」というお言葉をいただき、これからの目標を改めて考えるなど機会となりました。

今回の研修にご尽力いただいた服部強化部部长ご指導の下、3チームに分かれてフットサルを行いました。年齢を忘れて熱中できた楽しいひとときでした。

シーズンのお忙しい中にもかかわらず、研修を引き受けてくださったFC岐阜の方には本当に感謝で

す。ありがとうございました。

第七步 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く！

まさかの2回目泊まり企画である富士登山でした。体力のない私が富士山に挑戦して、皆さまに迷惑をかけてしまうのではないかと悩みましたが、いい経験をさせていただきました。

♪行きはよいよい帰りは怖い♪と歌にもあるように、特に下りではくじけそうになることが多々ありましたが、状況判断をしながら参加した全員が一応無事にゴールすることができ、うれしい達成感を味わうことができました。私がゴールできたのは皆さんの励ましのおかげだと感謝しております。

全体を通じて

今回の研修を通じ、初めて企画を無から検討し、勇気を出して研修希望先に連絡するなど、与えられる研修ではなく、作りあげていく研修としていい経験をさせていただきました。また、通常知り合う機会のない異業種の人と出会い、交流し、経験することで、自分の幅を広げられたような気がします。

このように研修を通じて多くの刺激を受け、経験し、すばらしい方々に出会えたことは私にとって大きな財産です。

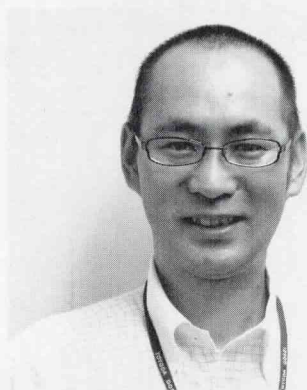
研修のテーマにある「殻」とは、自分が決めた自分の動ける範囲（限界）や、自分が所属している企業や組織など（守ってくれるもの）ではないでしょうか。研修のキーワードである「殻の外へ踏み出そう」の殻を意識しづらかったのですが、「自分の可能性を広げよう」という意味では、今回の研修を通じて、7歩分可能性は広がりしました。さらに自分の可能性を広げるためには、「経験したことは強いが、未経験だとひるんでしまうので、とにかく経験することが大切だ」というFC岐阜の今西GMの言葉どおり、仕事はもちろん仕事以外にもいろいろな分野に興味を持ち、積極的に挑戦していきたいと思います。

また、研修のキーワードは「殻の外へ踏み出そう」でしたが、東塾長のお話はいつの間にか「リーダーに必要なことはなにか」というキーワードに読み替えられていたような気がします。いまさらながら東塾長にもご講演いただきましたかと悔やまれますが、リーダーに必要なことは、「人脈を作ること、多くの情報を得ることである。そのためには傾聴し、真実を聞く勇気や本気が必要であり、謙虚に人を尊重する発言をすることが大切である。」と今の私たちにも必要な姿勢として大切なことを教えていただきました。

最後になりましたが、東塾長はじめ事務局の松井さん、スタッフの方々、また、塾生の方々本当にお世話になりました。ありがとうございました。この出会いを今後も大切にし続けていきたいです。今後もしよろしく願います。

また、忙しい時期にも笑顔で送り出してくれた職場の皆さまのおかげで、有意義な経験を積むことができました。ありがとうございました。

第 19 期産政塾を振り返って



豊田合成株式会社

高 橋 慎 二

《プロフィール》

たかはし しんじ

- 1970年 6月28日 大阪府生まれ
- 1993年 4月 豊田合成㈱入社
- 1993年 7月 人事部（現人材開発部）配属
現在に至る

＜家族＞妻、娘

＜趣味＞ウォーキング、家族とショッピング
ゴルフ

〈はじめに〉

「殻の外へ踏み出そう！」

第19期産政塾の募集要項を見て最初にこの言葉が目に入り、そしてまず思ったことは、「言うは易し、行ふは難し」であった。というのも、私は15年前に豊田合成に入社し同年7月に人事部に配属されて以来、現在に至るまでずっと同部に在籍しており、同じ環境に15年も身を置いてきた訳で、まさに殻の塊のような人間であり、「殻を破る」と言われても具体的に何をすれば良いのか分からず、産政塾に参加したからといって何が変わるというのだろうと思っていたのが正直なところであった。

ただ、新たな環境に身を投じることによって、新たな人間関係の中で、新たな発見をし、また新たな自分に気付き成長できるかもしれないと思い、殻の外へ踏み出す第一歩として、産政塾に参加を決意したものだった。

産政塾に参加した約半年間、今から振り返ってみると、本当に参加して良かったと思える。
その理由を大きく纏めると、

- ・ 新たな出会い・仲間との結束
- ・ これまでにない、また今後もないかもしれない貴重な体験
- ・ 気力・体力の限界への挑戦

であり、この3点について、全7回の産政塾の中での実際の体験をもとに述べたいと思う。

△新たな出会い・仲間との結束▽

開塾式が行われた1月某日は小雪が舞うようなとても寒い日だった。開始時間ギリギリに（若干遅れて？）到着したことを憶えている。

初対面、事前に名簿は見ていたものの、自動車関連に限らず、電力・ガス・鉄道・百貨店・市役所等、よくもこれほどバリエーション豊かな企業・団体から人材を集め研修をしようと考えられたというのが第一印象だった。もし産政塾に参加しなかったら、おそらく出会うことのなかった人々と出会うことができ、これだけでも産政塾に参加した価値があったと思う。

とりわけ我々Eグループのメンバーとの出会いは特に貴重な出会いであり、名鉄労組の坂西さん、織機労組の堀内さん、全トヨタ労連の高橋（哲）さん、豊田市役所の中條さん、私合成の高橋と、幸か不幸か男性のみのメンバー構成であったが、約半年間、強い絆で結束することができたと思う。

特に我々の企画「豊田市の森林の間伐」は、今思えば宮崎や富士山等に比べてやや堅い企画であったかも知れないが非常に意義があり内容も充実したものであった。

企画検討の当初は、環境といってもなかなか絞りきれず、おそらく一人で考えていては一向に決まらなかったと思うが、メンバー全員の知恵を出し合い、いざ間伐をやるとなれば豊田市役所の森林課

に聞き、現地までの交通手段となれば名鉄バスに手配するといったように、メンバーの誰かがすぐに行動することで企画を固めることができた。あらためてチームワークの大切さ素晴らしさを実感することができた。

産政塾が閉塾し、グループメンバーの転勤もあり、メンバー全員が集まることは少なくなるが、これから連絡を取り合い末永く付き合っていきたい、そんな強い絆ができたように思う。

〈貴重な体験〉

産政塾の活動は、全7回のうち開塾式・閉塾式を除く5回は各グループの企画による活動であり、幸いにして私は、①座禅、②間伐、③宮崎、④FC岐阜、⑤富士山、と5グループ全ての企画に参加することができた。我々Eグループの企画に限らず、各グループの企画についても、私がこれまで経験したことがなく、また今後も行けるかどうか分からない、本当に貴重な体験ばかりであった。

最初の企画、岡崎の渭信寺での座禅では、「無の探求」をテーマに何時間も座り続けた。結果的には、座禅の間、何も考えず無心になるというのは難かったが、数時間の間、仕事もせず、休息もせず、本当に何もしないで、ひたすら頭の中で様々なことを考え続けることができたことは、普段はまずできないことであつた。余談だが、懇親会に向かうバスがぬかるみにはまり、塾生全員でバスを押して抜

け出したことは、思わぬハプニングであつたが、最初の段階で塾生の結束を固める良い機会になつたのではないだろうか。

次の企画は、前述の我々Eグループの企画「地球を守る。着実に行動を起こす！」をテーマにした間伐体験であり、詳細はフォーラムでも寄稿したが、木を切るということがなぜ環境保護につながるのかという疑問に対し、正しい知識を勉強することができた。また、実際に山林に入り、薄暗い森の現状を目の当たりにし、杉の木を何本も切り、そしてその木のリサイクルのためにベンチ作りをする、ということを実体験することで、学んだ知識をしつかり頭に刻むことができたと思う。

3つ目の企画は、「地域活性化」をテーマに九州は宮崎を訪れた。私自身もそうだが、宮崎の地を訪れること自体が初体験という塾生も少なくなく、見るもの・聞くこと全てが貴重な体験だと言える。東西を東京・大阪に挟まれ名古屋自体も大都市であり産業が集中している愛知県および東海地方と異なり、大都市から遠くまた東国原知事が言われるように高速道路の建設も進んでいない宮崎県がいかにして地域活性化に取り組んでいるか、宮崎県庁、西都農協、西の蔵酒造、高千穂町役場の方々の努力・苦勞を知ることができた。今回は、塾生待望のお泊り企画ということで、異郷の地で郷土料理を食し酒を酌み交わしながら、塾生同士の絆をより深められた。

△気力・体力の限界への挑戦▽

産政塾の全ての企画はもちろん座学ではなく、現地現物を実感して心に残すのが基本の企画だが、4つ目以降の企画はとりわけ気力・体力の限界に挑戦する企画であった。

4つ目の企画は、FC岐阜のゼネラルマネージャー今西さんからお話を聴き、その後サッカーの練習・ゲームを行った。この企画では「情熱」をテーマに、もはや議論するのではなく、体力のあるかぎりボールを追い駆けることが全てであったように思えた。多少こじつけになるが、頭で考えているだけでは何も進まない。とにかく目の前の課題に取り組み失敗してもそこから学ぶという意味で、仕事でも同じと言えるのではないだろうか。

最後の企画は忘れもしない「富士登山」、今振り返っても産政塾のトリを飾るに相応しい、これまでの私の人生の中で最も過酷で気力・体力の限界を超えた企画であった。そもそも登山経験など皆無に等しい私がいきなり3776Mに挑戦して良いのだろうかと心配しつつ、決して侮らず周到に準備して臨んだが、山頂までの道のりはやはり厳しくどれだけ登っても頂上が遠く、何度リタイアしたいと思ったとこか分らない。それでも私を山頂まで足を動かしたのは、登山中に眺める星空の美しさと、山頂に立ちたいという達成欲求と、みんなに心配かけたくないという責任感であり、塾生全員が同じ思いを持っていたからだろう。実際、富士山頂から拝んだご来光は、登ったものにしか分からない何とも言えないものであった。

ところで、登った後は降りなくてはならないのが富士山である。登山の辛さが体力消耗だとすれば、下山の辛さは膝の痛みであった。体力の限界をとうに超え、まさに気力だけで歩き、下山したときは、本当に嬉しく一生忘れられない思い出となった。ただし、もう一度登ろうと言われると、しばらく考えさせていただきたい。

△最後に▽

産政塾を通して「殻を破れたか？」と問われるとどうだろうか。

今までの会社一辺倒の生活での人間関係や行動範囲を考えると、この半年はそれを大きく破ったのかも知れない。しかし、たった半年ばかり変わっただけでまた元に戻ってしまつては何も変わっていないとも言え、殻を破れるかどうかは今後も新たなことに挑戦し続ける姿勢次第である。

人それぞれには個性的な芯がありなかなか変わるものではないが、他人と係わり合い新しい環境に触れることで、その人の殻は形を変え成長していくのだろう。私もそうありたい。

最後に、東塾長をはじめ中部産政研の皆様には大変お世話になりましたこと、厚くお礼申し上げるとともに、第19期塾生の皆様には今後ともよろしく願います。

以上

『産政塾に参加して』



丸栄労働組合

筑 尾 康 範

<プロフィール>

ちくお やすのり

- 1971 年 6 月 大阪府生まれ
- 1994 年 3 月 ㈱丸栄入社
- 1999 年 9 月 丸栄労働組合
名古屋支部執行委員
現在に至る

<趣味>サッカー観戦 旅行（国内限定）

【おつめい】

今回産政塾に参加させていただきましてありがとうございました。参加のきっかけは決して積極的、能動的なものでなく委員長から勧められて言われるがまま参加したというのが正直なところ です。組合の執行部に第18期生がおりましたので産政塾の存在は認識していたものの活動内容については全く理解していない状態でした。参加が決まってから第18期生の方に話を詳しく聞いてみると単なるセミナーじゃないかと、自分の考え方次第で多くのものを学ぶことができるのではないかと思うようになり、前向きな姿勢で第一回の開塾式を迎えることができましたと思います。

【第1回 開塾式】

そして開塾式を迎えることとなりましたがさすがに緊張していたなと思います。当日私は案内に記載のあった「カジュアルな服装で結構です。」を真に受けて普段着、それこそ趣味であるサッカーの試合観戦に行くかのような格好でカバハウスに行ったわけですが会場に入るとみんなスーツ姿で、「やっちゃったかな・・・。」というのが産政塾の最初の思い出です。おかげで緊張の度合いはピークに達してしまって、誰も覚えていないかもしれないかもしれませんが自己紹介のとき完全にフリーズしてしまいました。何秒位だったかもわからず、その後何を話したかも覚えていなくて今から考えると情けない限

りです。

そんな状態の私でしたが東塾長のお言葉は心に響くものがあつて自分がこの場にいる意味、自分がこの場を通して学ばなければいけないものを再認識させてくれました。

産政塾のテーマである「殻の外に踏み出そう」とは非常に抽象的です。そもそも「殻」が何なのかわからないし、個人ごとでその「殻」は形も大きさも硬さも違うはずですから。

しかしながら、塾長のお話をお伺いしているうちに、その難解なテーマに対して「歴史を知ること。情熱を持つこと。そして行動すること。」をキーワードにして挑む強い意思が自分の中に芽生えたと思います。

その後グループに分かれてテーマ設定を行いました。しっかりとした方ばかりで非常に活発な議論となりました。私自身もはじめのガチガチの緊張はどこに行つた位に、普段の自分を取り戻して話し合いに参加できました。自分の引き出しに無いことが他の皆さんから次々に出てくるあの雰囲気は社内にいるだけでは味わえないあと、それだけでも来てよかったと思えるものでした。そして「これから全部参加したい。これほどの機会を欠席するなんてもつたいたない。業務都合は前日までに絶対クリアするぞ。」と強く心に誓いました。

【第2回 渭信寺を訪ねて、「無の探求!!自らを見つめ直し、更なる成長へ」】

この回からグループの企画がスタートしましたが短い準備時間のなか先陣を切ったAグループの皆さんは大変だったと思います。当日の運営の仕方もある状態でおこなったのですから、本当にお疲れ様でした。そしてその内容も、殻破りの旅に先立ってまず「無」になって自分自身を見つめなおすという、初回にふさわしいものだったと思います。

個人的には雑念だらけで座禅をしてもなかなか集中し切れなかったなあと、それでもその後すっきりした気持ちで自分の思いを書き込めることができました。

【第3回 地球を守る、着実に行動を起こす!!】

この会合においては豊田市足助町に赴き、環境問題について考えましたが、木を切り倒す事が環境維持につながるという全く私の認識にないことを知らされる羽目になりました。環境維持についてはメディアでもいろいろな形で情報提供されていますし、私が勤務している百貨店においても環境問題に対する取り組みは行われていますので、間違った認識はしていないと思ひ込んでいたのが全て崩された気持ちでした。自己弁護ではないですけどかなり多くの人が環境問題に対して間違った認識を持っているのではないのでしょうか。形だけ、名前だけ、口だけの取り組みではなく本物を見ることが、現実を知ることが非常に大事なのだと、そしてその事実を知った者、気づいた者はそれを広く知らしめていかなくは地球規模での環境保全なんてできるはずがないと思いました。この会合後、会社

で立ち話の際に話題にしましたが、この文を書き綴っている今現在ほとんど口にすることも無くなっていることを反省するとともにこれを機会にまた伝えていきたいと思えます。

【第4回 宮崎県の地域活性化の取り組みについて学ぶ】

最初に言っておきます。2日間終始ハイテンションでした。「おまえは子供か！遊びに来たわけじゃないぞ！」と言われても致しかたなしの状態でした。でも本当に楽しみにしていたのは事実です。地域の活性化というテーマについては私たちのグループでも候補に挙がっていましたし、トップが替わってあれほどメディアで騒がれることになった宮崎県の現実を知るには絶好の機会であり、高千穂峡も一度自分の目で見てみたいという気持ちがありましたので先述の状態になっていたわけです。

まず始めに県の取り組みについてお話を伺いましたが、知事の県民に向き合う姿勢が県民の意識を変え行動を変えたのだということでした。この話を聞いて二点思ったことがあります。

一つはトップに立つ者の姿勢についてです。上から目線で指示を出すだけでは限界があるというところ。まさに「笛拭けど踊らず」の状態になってしまえば動く者がいてもその動きは指示される内容にとどまってしまうでしょう。それをトップが皆と同じ目線に立って一緒に考えることによって皆からの意見を引き出し、そのつながりを広げていくことが必要なのだと思います。これは地域社会だけのことではなくあらゆる組織体において言えることではないでしょうか。

もう一つは県民自身の考え方です。「誰かが何とかしてくれる。」と思っていたらこれほど宮崎県が活性化したでしょうか。いくら知事が替わったといつても実際にやるのは県民自身であり、知事はそれを気付かせてくれるきっかけを与えてくれたのだと思います。

これもやはり各組織体において該当することだと思っています。

そして県庁を出て地場産業の現場を訪問しましたが、県庁でお伺いしたことが実践されているなあと感じました。宮崎県の人たちの「今のままではいけない、自分たちで何とかしていこう。」という強い意志を感じました。

翌日、高千穂町にて観光産業への取り組みについてお伺いしました。道路整備もままならないわば陸の孤島ともいふべき地形条件の中、明確なビジョンを掲げ住民一体で取り組む姿勢は見習うべきものがあり、私たちも自分たちの生活する地域において何ができるのか考えていかななくてはと思いました。

そして高千穂峡の自然に触れ、天岩戸神社の神秘的な空気にただならぬものを感じ（私は決して信心深いわけではないですけど、あの張り詰めた空気は明らかに何か違います！）日本には心震わせる、素晴らしい所があることを実感しました。

【第5回 すべての始まりは、情熱から】

いよいよ自分たちBグループの企画です。今思い出すとあつという間の出来事でしたが辿り着くまでにいろいろあつたなあと思います。第1回の会合におけるグループ内の話し合いで自分の提案したFC岐阜を題材にした内容でいくことになりましたが、当初のテーマは「情熱」ではなく「地域密着」で、泊まりの企画と重複するものでした。同じテーマでは厳しいとの声から方針変更を余儀なくされ、その時点で選択肢は二つありました。FC岐阜にこだわるのか、一から考え直すのか。話の流れについては失念してしまいましたが、最終的にJリーグ入りを目指して県リーグから這い上がっていったFC岐阜の、目標に対して「情熱」を持って向かう姿勢を学ぼうということになりました。

このテーマについては東塾長の「情熱を持つこと」という言葉に関わっていますし、社会人になって年月を重ねた私たちが失いつつあるものであり、殻破りの重要な要素であると思っていたので企画内容はともかく題材的にはよかったのではないのでしょうか。また結果論ですが次の企画に繋がる内容になったのもよかったですと思います。

まずグループで事前に話し合いを行つたのですが、Bグループにはスペシャルな方がおみえでした。話し合いを始める冒頭「FC岐阜の服部部長に電話しちゃいました。」早っ！何ていうフットワークの良さでしょう。その一言をきっかけに私はもちろん、このテーマ設定に一抹の不安を抱えていたものさえ「この企画で行くんだ」と、情熱について熱く語る語るしゃべるしゃべる。そのさまはまさに「情熱」を持つてです。「この企画はいける！」

そして服部部長と打合せを行いました。もう部長の話を聞いているだけである種の高揚感という

か子供っぽく言えばドキドキワクワクです。この話だけで企画として成り立つのでは？と思えたぐらいいです。もうこの時点で私かなり前のめりです。

当日は今西GMの生きざまというか人生経験をふまえた重みのあるお話をお伺いすることができました。リーダーとは？充実した人生を送るには？そして最後にいただいた「心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変われば人生が変わる。」は強く印象に残っています。

「心が変われば……」の心を変える源、それこそが「情熱」だと私は思います。物事の判断をする時、そして行動に移す時、「こんなものかな」とか「今までこうだったから」ではなく常に強い意志を持つてより高みを目指す努力をしていくことが大切なのではないでしょうか。

その後の芝生広場でのトレーニングを行いました。参加者がしっかり取り組んでくれるか少し心配していました。しかし始まってみれば、みんな（私も含めて）日ごろの運動不足のせいもあって「しんどい」と息を切らせながらも楽しそうに取り組んでいて有意義な時間だったと思います。

【第6回 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く！】

とうとう最後の企画、RPGに例えればラスボスつてやつですか。確かにラスボスにふさわしい内容でした。この企画は事前の準備段階から他とは異なるものを感じていました。おびただしいメール

の量に委員長・書記次長から「こんなの初めてだ。」と言われる始末ですが、前回企画で「情熱」を持ってしまった私は装備を整え、金華山の練習会に参加しました。結果、得られたものは「危機感」と「覚悟」でした。明らかに体力不足です。しかし当日まで時間もなく出たところ勝負になつてしまいました。当日は厳しいものになるという心構えだけはできました。

そして当日雨の中の登山となりましたが、確かにきつかったですけどガイドの方の絶妙なペース配分もあつて無事山小屋に到着できました。私個人としてはこの調子なら大丈夫だと思っていたながら仮眠したのですが・・・。

仮眠から覚め起き上がろうとした時、頭に激痛が走りました。「何だこれ？高山病？」ズキズキする痛みが止まらず、少し呼吸もきつかったです。一人だったら間違ひなくリタイアしていたと思います。みんなから貴重な水・酸素缶を分けてもらい、肩を借り、激励の声を受けながら山頂に辿り着きました。

山頂からのご来光は格別でした。登り切った満足感・達成感だけでなく、みんなの助けなくては決して拝むことのできない光景だったからだと思います。この企画において私は、情熱を持つて挑戦することの大切さ以上に仲間と助け合うことの大切さを身をもって感じました。一人で何でもできるわけじゃない。そのとき自分を助けてくれる仲間の存在。それは自分の生涯を通しての財産になると思います。この場を借りてお礼をさせていただきます。「助けてくれたみなさん本当にありがとうございました！」

【第7回 閉塾式】

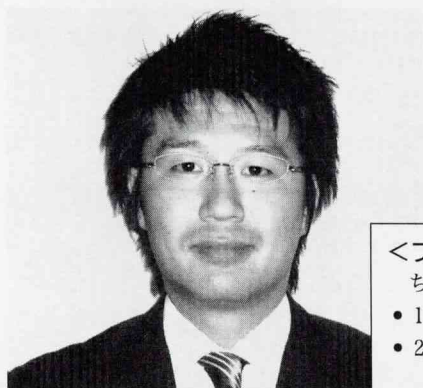
いよいよ最後の会合。一抹の寂しさを感じずにはいれませんでした。カバハウスに到着するともう見慣れた顔があり最後の最後まで楽しく学ぶことのできるセミナーだったと思います。メインテーマである「殻の外へ・・・」ですが殻を破れたかどうか正直わかりません。それでもこの産政塾に参加したことで自分とは違う価値観や考え方を持った人と出会い、その仲間たちと非常に貴重な経験を積むことができたのは事実です。その経験をつんだ自分は開塾式前の自分とは絶対に違うと思います。もしかしたら1月の時にわからなかったこと、できなかったことが今の自分には絶対にも無いことになっていくのかもしれない。自覚こそないけれどこれが「殻を破る」ということではないのでしょうか。自覚できないのはまた次の殻が自分を包んでいてそれに悩んでいるからなのでは？

ではどうするべきか。これからも決して現状に満足せず、より多くの人と出会い、より多くの経験を積んでそれを自分の糧としていくことで次の殻を破っていきたいと思います。その次の殻も、次の次の殻も。まだまだ私の中で産政塾は終わっていません。

【おわりに】

こう振り返ると産政塾に参加できて本当によかったと思います。東塾長の数々のお言葉や松井さんのお気遣いありがとうございます。同じ企画グループだったBグループの皆さん、私の趣味本位の提案を企画の形に仕上げていただきありがとうございました。他の塾生の皆さん、素晴らしい企画を、楽しい時間を、貴重な経験を本当にありがとうございます。また皆さんと元氣にお会いできる日を楽しみにしております。

産政塾を振り返って



豊田市役所

中 條 圭 祐

<プロフィール>

ちゅうじょう けいすけ

- 1979 年 豊田市生まれ
- 2002 年 豊田市役所入所
上下水道局水道総務課に配属
- 2007 年 社会部猿投支所に配属
現在に至る

<家族>妻、長男

<趣味>サッカー、野球、お菓子作り

ⅡはじめにⅡ

「産政塾」は、数ある市役所の研修のなかで、どうしても参加したい研修の一つであった。同世代の異業種の人たちが集まり、自ら企画をし、議論・交流ができる他にはない魅力的な研修である。産政塾のテーマは「殻の外へ踏み出そう」であるが、応募をすることが殻の外へ踏み出す一歩だと思い、大きな期待と少しの不安を抱え、一歩目を踏み出した。

産政塾で体験したこと、感じたことなどを振り返ってみたいと思う。

Ⅱ第1回 開塾式Ⅱ

1月23日に開塾式を迎えた。初顔合わせなので緊張感が漂う中、東塾長の熱い激励（挨拶）のお言葉をいただき始まった。企画内容のグループ討議になると、どのグループも活発な議論が行なわれた。不安はすぐに消え、次から次へといろいろなアイデアが出てきて、楽しい議論はあつという間に時間切れとなった。

Ⅱ第2回 無の追求!!Ⅱ

岡崎市にある衣文観音 渭信寺を訪ねた。座禅は初体験である。座禅を組み、心を無にしようとすればするほど、雑念が入り、集中力がなく、無の世界とは離れていく。座禅はつらかったが、「つらいことをつらいと思わず、楽しみながら自分を磨いていきたい。」「人生は一度きり、必ず死はやってくる。自らが考え自らの道を歩んでいかなければならない。支えられる家族や周りの人たちにも囲まれていることを忘れないように。人への思いやる心、これは自らの成長の糧にもなる。」というご住職のお言葉もいただき、つらいことも楽しむ気持ち、感謝の気持ちをこれからも大切にしていきたいと感じた。

座禅のあと、心を静めて「書」を書いた。塾生いろいろ、人生いろいろで、個性あふれる「書」ばかりであった。「書」に対する思いを語り合い、塾生間の距離が縮まった。マイクロバスが沼地にはまるというハプニングもあり、皆で力を合わせてバスを押し、脱出できた。あのときの行動力と団結力は、第19期塾生の力を感じさせるものであった。

Ⅱ 第3回 地球を守る、着実に行動を起こす!! Ⅱ

この企画は、我がEグループの企画である。環境をテーマにグループで議論した結果、実際の行動につなげるための企画をし、豊田市役所森林課を訪ねた。

豊田市役所の森林課（足助支所）へ向かう車中と会議室で原田課長に「環境問題と豊田市の森づくり」

についてご講演（社会の授業）いただき、北岡主幹には「森林の仕組みと働き」についてご講演（理科の授業）いただいた。実際、自分では森林の働きや現状について知っているつもりであったが、知らないことや想像以上に問題が深刻化していることに驚き、森の一生は800年、人の一生は80年であり、何十年後、何百年後のために、今やるべきことを実行することの重要性を感じた午前の授業であった。

午後は、間伐体験と間伐材によるベンチ作り（体育の授業）を行った。想像をはるかに超える大変な作業だったが、グループで交代しながらのこぎりで切れ込みを入れ、ロープで引っぱり、木が倒れた瞬間は、大変だったことも忘れ、グループでやり遂げた達成感が心地よかった。ベンチ作りでは、木の表皮を削る作業で、みんな童心に返って夢中で削り、立派なベンチが完成した。ベンチ完成後、地球を守るため自らできることについて考え、全員一致で今回の活動で得た知識についてPR活動することに決めた。

今回の活動では、知っているつもりが間違った情報であったり、正しく伝わっていなかったりと、正しい知識を学び、正確に伝えていくことの難しさを知った。そして、森や環境という大きな問題では、自分の一生よりも長期的視点が必要であり、活動を継続していかなければいけない。結果ばかりを求め、やれることから手をつけるのではなく、本当に大事なことを考え、本当にやるべきことは何かを考えさせられ、今、自分にできることを少しずつでもいいから続けていこうと思った。また、森林課職員の熱意に負けられないように私も頑張ろうと思った1日であった。原田課長始め森林課のみなさま、

貴重な経験をありがとうございました。

Ⅱ 第4回 宮崎県の地域活性化の取り組みを学ぶⅡ

東国原知事の活躍で地方の代表として取り上げられている宮崎県では、「宮崎県の将来ビジョン」、「食産業」、「観光産業」をテーマに地域の活性化について学んだ。始めに宮崎県庁を訪ねた。県庁内の廊下を歩いていると観光客が普通に歩いていて、県庁の中まで観光地となっていることに驚いた。「県民総力戦でオンリーワンの宮崎県を!!」と知事自らがPRして、意識改革を促している。もちろん、県職員にも意識改革が始まっていた。「これはできん」から「どげんかせんといかん」へ時代の転換点と考え、知事に引つ張られ宮崎県が変わってきていると感じた。また、東国原知事にお会いでき、うれしかった。知事自らが訪問者全員に握手を求めている姿に知事の人柄を感じた。

食産業のテーマでは、J A 西都と西都酒造を訪ねた。J A 西都では、完熟マンゴー「太陽のタマゴ」を長年の努力で地域ブランドとして地位を確立し、厳しい糖度管理が行われており、農家ではブランドマンゴーを作るために、それぞれ改善をしていた。マンゴー一つが何万円という値段も現地現物を見て納得させられた。西都酒造は、企業誘致を受け西都市に移転をし、水や芋など地元原料を大切にし、また、焼酎粕をバイオ燃料や飼料とするリサイクル施設や省エネ型装置を導入し、資源を有効活用して地元貢献するとともに環境問題にも取り組んでいる。食糧自給率や食品の安全の問題がクローズ

アップされる中、地域ブランドとして確立するためには、継続的な努力と地域・企業・行政が協力し取り組んでいく必要があると感じた。

観光産業のテーマでは、高千穂町役場を訪ねた。地域再生マネージャー事業は、地域の声を聞き、何を考えているのか、何をしたいのか一緒に考え、実践することをビジネスモデルとしており、高千穂町は、高千穂牛や金柑などで事業を拡大した。それだけでなく、観る「観光」から何かを感じる「感光」へ、地域が連携して何を発信し、何を提供できるかを考え、地域密着型事業を展開し、住民自らが行う地域活性化のキッカケづくりをしていた。住民がやってみて、自分たちでやり、継続できるようにするまでのプロセス、地元住民に事業を継続してもらいう難しさを感じた。残念なことに高千穂峡では、豪雨による増水でボートに乗ることができなかったが、また訪ねてみたいと思う神秘的な空間であった。

また、第4回は産政塾の中でも泊まり企画であった。研修中はもちろん、夜も熱い議論が繰り広げられた。熊本空港を離陸するときは寂しく、もつとみんなで九州にいたいという思いでいっぱいであった。

Ⅱ第5回 すべての始まりは、情熱からⅡ

情熱の源を探り、自らの心に更なる情熱を燃やすため、岐阜FCを訪ねた。今西GMのご講演では、

淡々と私たちにメッセージを送っているようであったが、その言葉一つ一つは長年の実体験を基にしたとても貴重なものであった。「自分に足りないものは何か、何か勝てるものはないかを探す。何で勝つのか。」「同じやるなら夢をもつてやる」「志があればやっていくことができる」の言葉は私にとつて、とても印象的であった。

今西GMのご講演の後、こちらも熱い男、服部強化部長とサッカーボールを使った運動を実施した。みんなで名前を呼び合いながらパス回しをしたり、ミニゲームをしたりして、本気になってボールを追いかけて、ゴールを決めたときはみんなで喜びを共有した。次回の富士登山に向けた体力づくりを兼ね、楽しい時間を過ごせた。

Ⅱ第6回 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く！Ⅱ

数年前から一度は富士山に登ってみたいと思っていたが、挑戦できないでいた。おそらく、今回の産政塾に参加しなければ、この感動を味わうことはできなかったかと思う。

バスが富士山5合目に到着すると、雨が降り始め足止めされ、この先の不安は増すばかりであったが、逆に時間が経つと、砂埃が少なくなって登りやすく、自然の恵みに感謝した。猿投山や金華山の事前練習会では、猛暑のため、とにかく暑かったが、富士山は思いのほか涼しく、少し肌寒くらいであった。雨も上がり順調に登っていたが、登っても登っても山頂までの距離は遠く、あとどれくらい登る

のだろうという思いと高山病がいつ襲ってくるのだろうと不安との戦いであった。岩場も多くなり、崖も続き、だんだんと言葉が少なくなってきたが、みんなで励まし合い9合目に到着し1日目を終えた。1日を振り返る間もなく、眠りについた。疲れていたのですねすぐに眠れたが、気がつくともんな目を覚まし、準備を始めていた。1日目より頭が痛い気がする。しかし、誰も頭痛のことは言わないので自分だけかと心配になるが、気力をふりしぼり登り始めた。あとで聞けば、みんな頭は痛かったみたいだ。誰も痛みを言葉にしなかったが、お互いに言葉を掛け合って励まし合い、つらくても助け合って目標に向かって一步一步進めた。その結果、全員登頂に成功した。山頂では不安から解放され、みんな喜びを分かち合った。全員でのご来光は格別であった。

この富士山への挑戦では、全員登頂という最高の結果が得られたが、事前の情報収集や事前練習など準備の大切さや助け合い、励まし合うことで塾生間のさらなる絆が深まったこと、一步一步進めば必ず前進できることなど目標に向かって着実にできることを進めることの重要性を再認識した。富士登山情報や事前練習の場を提供してくれた企画グループや助けてくれた仲間に感謝したい。

Ⅱ 第7回 閉塾式Ⅱ

産政塾が閉塾してしまう寂しさも感じながら閉塾式を迎えた。会場に着き、仲間の顔を見ると自然と笑顔になる。「謙虚で、しかし臆するな!」と東塾長からいただいたお言葉を胸に刻み、意識を持つ

て行動し、常に気持ちを持って頑張つていこうと思い、閉塾式を終えた。

〓おわりに〓

産政塾に参加するたびに、自分も頑張ろうと思った。最高の仲間に出会え、多くの刺激を受けた。東塾長始め研修先でお世話になった人たちからいただいたメッセーじや塾生と一緒に過ごした時間、体験したことは掛け替えのない財産である。富士登山の事前練習会も含め、第19期産政塾すべてに参加することができ、派遣していただいた人事課、業務の調整をしていただいた上司、また、家族に感謝したい。殻の外へ踏み出せたのか、わからないが産政塾で得た経験を活かし、これからも挑戦していきたい。そして、産政塾は終わってしまったが、出会った仲間を大切にし、これからお互いに刺激し合い、たくさん時間を共有したいと思う。

最後になりましたが、松井さん始め産政塾事務局のみなさん、本当にありがとうございました。今後とも末永く、よろしくお願い致します。

「殻」と「情熱」



トヨタ車体労働組合

塗師尾 充

《プロフィール》

としお みつる

- 1969 年 4 月 石川県金沢市に生まれる
- 1988 年 4 月 トヨタ車体富士松工場勤務
- 2006 年 9 月 トヨタ車体労働組合
専従執行委員
現在に至る

<家族> 妻、長男（11 歳）、長女（7 歳）

<趣味> ソフトボール、野球

はつめい

今回、産政塾に参加して感じたことを率直に述べようと思う。

まず、塾での活動を通して、自分の中で固まりかけていた既念がリセットできたような、新鮮な気持ちになったことに感謝したい。

また、これまで知り合うことのなかった異業種の人達と触れ合うことができ、半年という短い期間ではあったが、仲間意識が芽生え貴重な体験を共有できたことは、自分の中で仕事においても、プライベートにおいても大きな糧になると感じた。

そして今振り返ってみると『殻の外へ一歩踏み出そう!』という茫洋としたテーマのもと自分にとって殻とは何か、今までの決して豊富とは言えない経験を、一つ一つ紐解いていくような気分で模索し、塾生同士で話し合い、お互いに刺激し合ったことが考えてみれば『殻の外へ踏み出す』第一歩となったのかもしれない。

産政塾に参加して

今回、産政塾に参加することになったきっかけは、労組での順番のようなものがあったことは否めないが、過去に参加した先輩、同僚達からは一様に「異業種の友人がたくさんできる。面白い人間が

いっぱいいる。単組の中ではできないことができる。」と極めて前向きな部分だけのアドバイスを受け、疑心を抱きながらも自分なりに視野を広げる良い機会になれば……と参加する決意に至った。

こんな漠然とした気持ちで塾生となった自分ではあるが、実際に自分達も含め、各グループで立案したテーマはどれもが興味の湧く、内容も充実したものであったと感じている。

その中で、全ての会合に参加できなかったことが悔やまれてならないが、自分が参加した数少ない機会を通して感じたことをまとめてみたいと思う。

第1回

開塾式

平成20年1月23日

前期生だった同僚からおおよその内容は聞いていたものの、今ひとつ腹に落としこめていないまま開塾式に臨むこととなり、自分も含めて塾生皆、自己紹介が終わるまでは「いったいどんな人間の集まりなのか。」と内心想っていたに違いなく、表情が今より倍くらい硬かったように思える。

そんな中で、その日集まったばかりの者同士が、なかば強引に遠方の泊り企画や地球環境をテーマにスケールの大きい企画を立ててしまうのがこの産政塾のバイタリティーの凄さだと感じた。

第4回

宮崎県の地域活性化の取り組みについて学ぶ

平成20年6月12・13日

第2回の座禅・書道、第3回の間伐の体験に行くことができずに初めて企画に参加したのは6月12・13日のこの宮崎県での泊り企画であった。自分達のグループの会合にも参加できずに、大いに後ろめたさを感じながらセントレアの集合場所に赴いたが、5カ月近く振りに会うメンバーが温かく迎えてくれたことが忘れられない。

まず、初日には東国原知事誕生で活況を帯びている宮崎県庁を訪ね、大坪氏はじめ県の職員の方から現在の地域活性化の取り組みを丁寧に説明していただいた。行政の押し付けではなく『県民座談会』や『県民総力戦』と称した取り組みは、県民の「これはできん。」から「どげんかせんといかん。」への意識を高めると共に、地域の人達と一体となって話し合いを大切にする真摯で温かみのある姿勢を感じることができた。

さらに、西都市のマンゴ選果場、西の都酒造を訪ね、生産から流通に携わる人達がオリジナルの生産方法や、品質管理に工夫と努力を積み重ねている姿は、現地で見ても聞いて、触れなければ知り得なかったことであり、貴重な体験となった。

2日目の高千穂では古き良き日本の風土にこだわりながら、地域活性に向けて住民一体となって取り組んでいる観光産業について触れ、神々しい土地柄と人と人のつながりについて強い印象を受けた。加えて、産業の活性化という観点から、自分達が住む地域を省みた時に、企業や人が集まり財政が潤い、自らもものづくりの企業に勤める中、如何に恵まれているかを思い知ると同時に、地域の人同士の結び付きが希薄になりつつある事にも気付かされた。

また、宮崎県の2日間の滞在を通して、どこに行っても皆親切で『人の善さ』というものを常に感じ取ることができた。

そして何より、産政塾の仲間と寝食を共にし、杯を酌み交わし、いろんな話しができたことが自分にとって大きな収穫となった。

企画担当Dグループの皆さん、遠距離での訪問先の皆様との調整は、大変だったと思いますが本当に素晴らしい企画だったと思います。ありがとうございました。

第5回 自分達の企画 テーマ：すべての始まりは『情熱』から

平成20年7月10日

『殻』とは何か。自分も含めて自分達Bグループのメンバーが暗中模索する中、サッカー好きのメンバーの強い『情熱』が発端となり、下部リーグからJリーグという目標に向かって挑戦し、地域の人達の支援を受けながら活動しているFC岐阜の本拠地を訪問し、考え方・姿勢を学び情熱の源を探るという企画となった。

この企画を進めるに当たって『情熱』とは何か自分自身で過去を振り返った時に、言葉のイメージにピッタリと合う場面が浮かんでこなかったことが本音である。例えば学生時代の部活動や社会人になってから職務の中でも、その瞬間に夢中になって取り組んだことはあったが、人に胸を張って『情熱』を語れる程の経験を積んでないことに気付かされ、四〇歳の大台を目前に控えた今、そのような気持

ちを持って取り組めるものがこの先にもあるだろうかとも感じさせられた。

そんな中で、メンバーの積極的なアプローチが功を奏し、J2リーグに所属するFC岐阜の本部である岐阜市の未来会館で、強化部長・服部順一氏との打ちあわせができる運びとなった。

その時の服部氏の話しの中で「今西GM（ゼネラルマネージャー）は最高。あの人と働けるからFC岐阜に来た。」と伺い、どのような人なのか、会って話しを聞きたいと心から感じた。

また、子供達にもサッカーを教える服部氏自身の「地球は小さい。世界を見ること。子供たちを無人島に連れて行く。指導の基本はサッカーを楽しむでやること。」という話しにも共感を覚え、何か得るものは必ずある！と自分だけではなく他のメンバーも感じたに違いない。

【今西GMの講演を伺って】

今西氏の講演を伺い感じたことは『生かされている。』という表現が自分の感覚としてはぴったりくるように思う。広島生まれの広島育ちで4歳の時に被爆されている。左手足にケロイドも残り少年期は活発に運動することを躊躇（ためら）つたと聞いた。サッカーを本格的にやりだしたのは高校2年からで、不自由な左足を克服する為にゴールポストに藁（わら）を巻いて何度も蹴る事から始まり、後に日本代表選手に選ばれ、Jリーグ発足当時についてはサンフレッチェ広島を立ち上げ、その後、数々の優秀な選手を発掘してきた人でもある。

そして何よりサポーターを大切にする人である。

今西氏曰く、「サッカーが上手かったわけではなく、人より少し足が速かっただけ。」

また、労働組合に籍を置く自分が興味を抱いたのは、今西氏は、優秀なサッカー選手、指導者だっただけでなく東洋工業（現マツダ）時代には企業人として人を相手にしつかりと向き合い、対話や人材育成を重視して業績を残した人でもあるという一面もあること。であり、講演の中の言葉にもあつた「話を聞いてあげること、相手の欲していることを理解してあげること、このようなことができれば人は集まる。役割をもたせ、勝たせてやる。そして試合に出してやること。」という考え方はスポーツのみならず、コミュニケーション不足が叫ばれる昨今、企業や教育の現場にも通じるものがあると痛切に感じた。

そして講演の最後に「心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。…私は性格が変わつて人生が変わつた。」との結びを聞き『変わる。』ことや『変える。』ことには大きなエネルギーを必要とするが、それを恐れずに道を切り拓いてこうとする強い『おもい』こそが“情熱の源”ではないかとも感じた。

最後に、今西氏の講演後の服部コーチ指導によるサッカーの基礎練習、ゲームについても述べておきたい。体力的にも峠を過ぎた男達が向きになつてボールを奪い合い、ゴールを決めて、汗まみれで抱き合う姿は決して見栄えの良いものではなかっただろうが、このような気持ちになるまで真剣に取り組む姿勢が『情熱』のきつかけとなるのかも知れない。

また、補足として付け加えると、ゲーム形式の練習で見た、東塾長の年齢を感じさせない（ほとんど我を忘れたかのような）猛タックルや、童心に返ったかのように塾生皆が無我夢中にボールを追いかける姿は、ここぞ！とばかりに日常のストレスをぶつけているかのようで、心と体に響いてくるものがあつた。・・・きつと心地良い筋肉痛が2日後に訪れたであろう。

服部氏曰く「汗まみれの男同士が抱き合つてサマになるのはサッカーのゴールを決めた時だけ。」
今西さん、服部さんはじめFC岐阜のスタッフの皆さん、そしてBグループのメンバーの皆、参加してくれた塾生皆に心から感謝します。本当にありがとうございました。

第7回 閉塾式 平成20年8月21日

都合により、最も興味があつた第6回の富士山登山には参加できず、山頂で咽び泣くことができずに心残りのまま閉塾式を迎えることとなつたが、思えば7カ月前、カバハウス4階の同じ会場で初めて顔を合わせた時とは違って、自分も含めた塾生一同の顔には笑顔が溢れ、堅さがまったくなく、和やかな同窓会にも似た雰囲気を感じた。

それには『殻の外へ一歩踏み出す』というテーマのもと各グループで討議し、壁にぶつかりながらここまで仲間と共に進めることができた達成感に近いものがあつたのだと思う。

また、今回の産政塾の様々な体験を通し、以前に較べて『殻の外』へ一歩踏み出したと、みんな感

じていたのではないだろうか。

おわりに

産政塾に参加して自分の中でテーマとしての「殻」や「情熱」については、やはり6カ月という短い期間では完全に理解しきることはできなかったと思うが、そもそも自分の中の概念に無かったひとつの壁にぶつかったことだけははつきりと感じる事ができた。

そして、共に活動できた畑の違う仲間との交流が、自分を以前よりもっと前向きにしてくれたことは確かだと思う。

また、この先、殻の外へ踏み出すという『意志』と情熱という『おもい』を持つてポジティブに、いろんな経験を積んでいきたいと考える。・・・もちろん『楽しい』と思うことを忘れずに。

最後に半年という短い期間ではありましたが、自分を受け入れてくれ、いろんなことを教えてくれた第十九期生の仲間達に感謝すると共に、今後とも末永くお付き合いをお願いしたいと思います。

そしてこの機会を与えてくれた労組、共に汗をかいてくれた東塾長、企画、運営を親身になつてサポートしてくれた松井さんはじめ事務局の全ての皆様に感謝したいと思います。

ありがとうございました。

『産政塾』卒業に寄せて



中部電力株式会社

中和田 教 仁

《プロフィール》

なかわだ のりひと

- 1976 年 9 月 大分県生まれ
- 1999 年 4 月 中部電力株式会社 入社
岡崎支店安城営業所 配属
以後 主に営業畑を歩む
- 2007 年 7 月 人事部 女性活躍推進室へ
異動
現在に至る

「参加にあたって」

産政塾の存在を知り、その参加について打診を受けた際は、正直嬉しい気持ちで一杯であった。

私は入社以来の約10年を、営業部門一筋に歩いてきた。

「これはこのまま営業部門一筋かな」と漠然と感じていたところ、昨年7月に人事部門に初の配属となった。

しかも業務は「女性活躍推進」である。

女性活躍推進の活動が目指すものは、究極的には男性を中心とした会社全体の「意識・風土改革」。これは、従来の延長線にある発想ではなかなか実現が難しい。大げさかも知れないが、気分は前人未踏の山に挑戦する登山家の気持ちである。

人事経験の全く無い私にとっては、まさに「五里霧中」「暗中模索」の時期であった。

このため、塾の活動を通じて新しい価値観、新しい発想に触れること、そして、人事経験のある社

外の仲間との交流ができることは、自分のため、そしてこころよく送り出してくれた会社・上司・同僚のために必ずや役立つものと考えていた。

「気づかされたこと」

しかし、特に開塾式での私は今になって思うと少し肩に力が入っていたのかもしれない。「何かを得たい」「勉強したい」という思いが空回りしていたような気もする。

そんな「がちがち」の私とは逆に、開塾式で出会った他のメンバーは、実に肩の力が抜けていた（ように見えた）。もちろん、不真面目という訳ではない。しかし、せつかくの機会を楽しもう、分かち合おうという雰囲気になっていた。

私は新しい価値観や発想に触れ、自分の殻を破りたいと思い産政塾に参加したはずなのに、自らその殻を厚くしているのではないか……こんな「がちがち」の自分で、新たな発想など得られるのか？？

「殻の外に飛び出す」これが、産政塾に集った仲間の共通の目標である。

では、私にとっての殻とは何か。

ご存じのとおり、中部電力は、お客さまに安定して低廉な電気を欠かすことなくお送りする「安定供給」を第一の使命としている会社である。お客さまにとって、電気が毎日使えることは「当たり前」。「安定供給」を褒めて頂けることはなどほとんどない。もちろん、電力会社もそれを自慢することなど無い。

しかし、中部電力で働く仲間が皆、お客さまの生活を、そしてビジネスを、電気の安定的な供給で支えている、という誇りを持って愚直に業務に精励している。私はもちろん、会社の多くの仲間がその使命感に共感し、中部電力で働いていると信じている。

しかし、この「堅さ」「真面目さ」「愚直さ」は、「団結力」につながる、これからも守って行くべき大切な職場風土であると思う一方、「変革」へのエネルギーとしては弱いのかも知れない…とも感じることもある。

かの物理学者アインシュタインは、「我々の直面する重要な問題は、それをつくった時と同じ考えのレベルでは解決できない」と語ったという。例えば「細菌」「ウイルス」という発見が無かった時代、病気の人間にできる治療は、せいぜい瀉血（しゃけつ）のみであった。「細菌」「ウイルス」という新たなレベルの発見がなされて初めて、細菌性、ウイルス性の病気という「問題」を解決するに至ったのである。

ひるがえ
翻つて、

私の業務は女性活躍推進という「職場風土の改革」であるが、この問題もやはりこれまで当社を育んできた「これまでの会社文化」という考え方のレベルでは解決できないのではないかと、と思う。もっと飛躍して、まさに自らの「殻」の外に出て新たなレベルの考えを導くことができれば、決して解は見つからないだろう。

今の、こんな「がちがち」な自分が、殻から抜け出て新たなレベルの発想を得ることができるかと考えた時、「それは絶対に無理」だと思った。

何回目かの活動の際・・・確か宮崎での活動の際だったと思うが、塾長から「何かを得よう、勉強しようと考えても、そう簡単にいくものではない。でも、活動に真摯に、メンバーが楽しく過ごせることを思つて、そして自らも楽しく取り組んでいけば、結果として必ず何か得るものはあるはず。」との講話をいただいたことを覚えている。

肩の力を抜いて、楽しむ時は楽しむ。新しい発想も、価値観も、その中から生まれるものかもしれない。真面目、堅い、愚直・・・ということは一つ大事な長所ではあるが、同時に自分にとつての殻でもある・・・この産政塾では、ここは思い切つて殻を抜け出し、ごちゃごちゃ考えずにまずは楽し

もうと心に決めた。

「活動を通じて」

塾の活動では、座禅にはじまり、間伐体験、宮崎県庁への訪問など数多くの体験をしたが、私が最もに残ったのは行く先々でご対応いただいた皆さんの「暖かさ」であつた。

我々の活動は、財団法人でもあり謝礼らしい謝礼もできない。しかし、謝礼もほとんど出せないにも関わらず、皆さまがお忙しいのを承知で、我々が「勉強したい」というある意味手前勝手なお願いを、「気持ち」だけで強引にお願いしたのである。考えようによつては、迷惑な話である。

しかし、ご対応いただいた皆さんには業務多忙の中、本当にこころよくご対応をいただいた。この感謝の気持ちは言葉では言い尽くせない。

私は以前、営業部門で営業教育の担当をしていたことがあり、研修として企画したとあるトップセー
ルスマンの講演会で次のような講話を伺ったことがある。

曰く、「営業とは、売ることではない。お客さまのためにすることとをただただ愚直に成し遂げることである。そういう経験を通じてお客さまの信頼を積み重ねれば、お客さまは自分から買ってください。だから、営業で必要なことは「いかに売るか」のノウハウではない。「いかにお客さまの信頼を積み重ねるか」のプロセスである」とのこと。

そのトップセールスマンはさらに事例として、（このセールスマンの）お客さまの会社の会長さんが亡くなれば、会社創設以来初となる「社葬」をどのように執り行ったら良いのか、お客さまの総務部長さんがお困りの様子を見て、自ら本社の秘書、総務に電話をし、自社の秘書部長、総務部長をお客さまの総務部長の元にお連れして、「社葬」のノウハウをお伝えする「社葬ソリューション」を実施したとのエピソードを披露してくれた。

もちろん、このセールスマンの会社は葬式業を生業とする訳ではなく、ごく普通のメーカーである。社葬の方法、実施のポイントをお伝えするようなノウハウもないし、お伝えしても自社製品が売れるわけでもない。しかし、「お客さまのために」を考えた結果、自然とこのような「社葬ソリューション」を考えついたのだという。（ちなみに、当時このお客さまとは取引が無かったそうだが、この社葬ソリューションという「感動体験」を経て今では「一番のお得意さまです」との後日談も披露してくれた。）

私は、今回の産政塾でお会いした皆さんに、何故かこのトップセールスマンの姿を重ね合わせていた。

私は、何をするのにも「自分にとつてのメリット」を考えがちである。同じ会社の中でも、「自分の部署のメリット」を考えてしまい、全体最適に目が向かないことがある。

しかし、営業でも、人の信頼を得るのでも、リーダーとして組織をまとめていくのでも、最後は人対人。信頼関係がものをいう。そしてその信頼関係は、「真実」を積み重ねることではか得ることはできない。この真実が、住職さんや、豊田市役所さんや、宮崎県の皆さんや、FC岐阜の今西GMや服部部長…皆さんに見せていただいた、もてなしの心に表れていたのではないかと感じた。

そして、自分も、いつもついつい顔を出す「自分」を消して、まずはどんな機会でも、何かのご縁でお会いする皆さんのことを考えた行動がとれるよう、そして、多くの人から信頼をいただけるよう精進を重ねたいと思った。

「富士山登山」

座禅、間伐、宮崎県等、数々の出会いを経て、我々は最後の企画として富士山登山に挑戦した。

富士山登山を通じ、これまでの産政塾での活動や、会社生活、そして、今後の人生を含め、様々なことを考えさせられた。

富士山の山頂を目指すために必要なもの。それは当たり前であるが1歩を踏み出すことである。今回、我々は山岳ガイドさんの導きを得て、多分通常よりゆつくりしたペースで山頂を目指した。

1歩、1歩を踏みしめながら歩く。歩みは本当にゆつくりだ。しかし、確実に山頂に近づいていく。山道にはもちろん、岩場があれば砂利道もある。登りばかりではなく、時には下りの道もある。

しかし、例えば「岩場は嫌だなあ。」と思っても、瞬間移動して岩場を飛び越すことはできない。1歩、1歩を着実に積み重ねるしかない。しかし、確実に1歩づつ踏み出せば、あんなに嫌だった岩場も、いずれ通り越し、いつしか山頂に立っていた。

例えば、人生も、仕事も、山登りみたいなもの。近道はできない。でも1歩、1歩をゆつくりでも着実に歩いて行けば、いつしか山頂を越え、そして、次の山頂が見えてくる。そういったものではない。

いかと感じた。

そして、仲間やガイドさんの導きも忘れてはならない。

私は登山に全く興味が無かった。産政塾の仲間による富士山登山の企画、そして山岳ガイドさんの的確な導きがなければ、1歩、1歩を積み重ねるところか、富士山に登ることすら無かったと思う。あの感動的なご来光も、見ることは無かつただろう。

いろんな人の助け、導きがあつて、今の私がいる。それを忘れてはならない。

そして私にできるのは、1歩、1歩をゆつくりだが確実に歩くことだけ。決して瞬間移動も、一気に10歩を踏み出すこともできない。

そんなことを、富士山の1歩、1歩を踏みしめながら考えていた。

「卒業にあたって」

我々のグループで企画したFC岐阜訪問で、講話を頂いたFC岐阜の今西ゼネラル・マネジャーは以下のようにおっしゃられた。

「リーダーとは、なろうと思つてなるものではない。個人ではなく、集団の一員として、例えば集団に所属していれば便所掃除でもなんでも良い、「誰かがやらなくてはならないこと」がある。これらをとにかく全力でひたむきにやる。そうすると、「あいつには世話になつた」という人が増えてくる。その人達は、困つた時にいつか助けてくれる。「あいつには世話になつた」という人を何人作れるかがリーダーシップだと思う。だから、リーダーとはなろうと思つてなるのではない。その人の生き様の結果である。ひたむきに頑張る結果、周りがリーダーにしてくれる。」

まずは、人のためになることを、ひたむきにやる。これは、今回の産政塾で出会つた、豊田市役所の、謂心寺の、FC岐阜の、宮崎県庁の、そして産政塾で出会つた皆が見せてくれたことだ。

そして、その道に近道はない。今西GMによれば、リーダーとは、その人の生き様の結果だということである。まるで富士山に登るかのよう、1歩、1歩、毎日をこつこつとひたむきに積み重ねるしかない。

そして、私にとつてもう一つ大事なのは「人のためになることを、ひたむきに、こつこつと」・・・は必要だし、それは大事にするんだけど、あんまり思い詰めずに肩の力を抜いてリラックスすること（笑）。

同じ人生、楽しみながら生きていきたいし、そうしないと新たな発想も生まれないということ、今回の活動を通じて、そして産政塾に集った仲間から学ばせていただいた。

産政塾はこれで卒業するわけだが、この気持ちを忘れず、人生も、仕事も、楽しみながら、ゆつくりでいいので着実に1歩1歩を積み重ねていきたい。

「最後に」

この産政塾という場で出会った皆さんに、多くのことを教えていただいた。皆さん、本当に肩の力が抜けてリラックスされ楽しそうであつた。心よりお礼を申し上げます。

そして最後になるが、この塾は事務局の松井さんの努力無くしては成り立たなかつたと思う。

松井さん、本当にありがとうございました。

出会いと感謝



豊田自動織機労働組合

堀内 清明

<プロフィール>

ほりうち きよあき

- 1969 年 12 月 三重県度会郡南島町
(現：南伊勢町) 生まれ
- 1988 年 4 月 株式会社豊田自動織機 入社
繊維機械事業部配属
- 2006 年 9 月 豊田自動織機労働組合
専従執行委員
現在に至る

<家族>妻、長男（6才）、長女（4才）

<趣味>映画鑑賞、ソフトボール

はじめに

産政塾第19期生として参加させていただくことになり、テーマである『殻の外へ飛び出そう』について、自分にとつての殻とは何なのかを考える貴重な場を与えてくれた皆様に感謝申し上げます。その貴重な経験の中から印象深いところから紹介したいと思います。

【開塾式】

期待を胸にカバハウスへ向かい開塾式会場に到着しました。そこには様々な表情をした第19期生28名が集まり、会場正面に向かってコの字に並べられた席に着き松井さんの司会の下、開塾式が始まりました。はじめに東塾長から「人生の先輩から塾生に贈られた言葉」で、

1. 歴史を勉強すること…変えることが目的ではなく、今までの歴史があつて今がある。
2. 情熱を持つ…情熱をもつて自分を高める、情熱は人を動かす。理屈では人は動かない。
3. 行動すること…行動しなければ言うだけになる。百見は一行にしかず。

感動が得られる様に活動する。感動は人にうつる、個々人を豊にする。

というお言葉をいただきました。その後、塾生の自己紹介に。最初は緊張が見られましたが、喋りだしたら楽しい自己紹介が続ぎ、最後28番目に私の番がやってきました。何を話したかは忘れまし

が、印象に残った言葉は「情熱と行動で人は動く」という言葉から、これまでの人との出会いが頭の中に思い浮かびました。

【中々】

私は、三重県の海と山に囲まれた小さな漁師町に生まれ育ちました。もちろん実家は漁師でハマチの養殖をしていました。そのせいで、もの心がついたときから海の上で、大人になったら父親の後を継ぎ漁師になると思っていました。なぜか今は豊田自動織機労働組合の専従執行委員という立場でこの文章を書いています。小さなころに共に過ごした仲が良かった友人とは今でも三重県の実家に帰省するたびに会っています。気が付くともう30年の付き合いになっていました。この間、さまざまな出来事や人との出会いがありました。高校の頃、私はソフトボール部に入学しました。顧問の先生は中京大学陸上部出身でハンマー投げの選手で室伏選手の父親の弟子という経歴の持ち主、新任教師でソフトボール部の顧問になり私と共に一年生でした。今思えば先生の情熱と行動力で私たちの心が動いてチームがひとつになり、結果3年のときに中日本大会優勝、沖縄国体ベスト8まで進むことができました。最高のチームメイトと監督に恵まれこのときの経験が今の私のベースになっています。余談ですが沖縄国体の少年男子ソフトボール開会式会場で開会式中に国旗が燃やされる事件が目の前で発生し一時は警察と報道の方などで大騒ぎになったことを覚えています。余談はさておいて、そのソフトボー

ルがきっかけで、(株) 豊田自動織機に入社し現在の私があります。

【社会人ともうひとりの親父】

株式会社豊田自動織機に入社して私は繊維機械事業部の精紡機の組立に配属になりました。当時はバブル直前、入社して夏を過ぎるころには非常に忙しく職場には今と違い季節労働者が多く東北地方や北海道から多くの方が働きに来ていました。当時の組長は大変で60人を越える人を一人で管理していました。なぜそれが可能なのか、今思えば正従業員の意識がものすごく高く、普段やんちゃな先輩も仕事になると別人で厳しい先輩で私も鍛えられました。そんなすごい先輩からも信頼されていた組長は当時の私にも仕事では厳しく、仕事を離れると本当の親のように接してくれて、何度も組長の家に家庭料理を食べさせていただきました。

そんな組長が育てた部下は今、重要なポジションのリーダーになっています。時間は過ぎ、当時のメンバーが移動などで離れていくことになり、私の先輩は、組長から「お前は俺より偉くなれ。それまで少し我慢しろ。」と言われ送り出されました。その送り出された先輩も今は約束通り偉くなり次の親父になって人を育てる立場で活躍されています。その先輩から「次はお前が俺より上にいけ。」と言われていますが・・・。

少し脱線したので戻します。

【すばらしいEグループメンバー】

産政塾Eグループのメンバーは5名、

第19期生の名物…坂西さん

優しい顔して…中條さん

フォーラム最高…高橋慎さん

豪快な男…高橋哲さん

と私、堀内はすばらしいメンバーに恵まれ、名ばかりのリーダーを務めさせていただきました。実は私はほとんどの全体の会に参加できませんでした。

唯一、Eグループ企画の会合と下見と打ち合わせには参加させていただきましたが、企画がまとまるまでにはメンバーでの会合で色々な企画が出され、私自身としては、無人島生活や宇宙から地球を見るなどの企画を提案しましたが、最終的には間伐体験を通じて『地球を守る、着実に行動を起こす!!』に決定しました。このテーマを考えるにあたり、環境について多くのことを学び知ることができました、普段の性格の中でできることや、私たちが気付かないところでの環境を破壊しているなど考えさせられました。強い意志をもつて環境についてこれからも考えそして行動していきたいと思い

2008年5月14日

◆記入方法

1日にどのくらい記載されたメニューを行ったかを記入し、排出量の単位を参考にして、CO2排出量と節約金額を計算してください。記入欄は3回分設けてありますが、一回目は普段の日、2回、3回は省エネに取り組んだ日を記入して、どのくらいCO2排出量を減らせるか比べてみてください。

1日のCO₂排出量=CO₂排出量の単位×使用時間(回数)

あなたの行動	CO2排出量の単位 節約金額の目安
テレビをつけていた時間は	60分＝40g 60分＝2.5円
テレビの主電源をつけていた時間は	60分＝0.5g 60分＝0.03円
照明をつけていた時間は	60分＝19g 60分＝1.1円
冷蔵庫のドアを開閉した回数は	10回＝16g 10回＝1円
シャワーを流した時間は	10分＝601g 10分＝58円
ガス給湯器の種火をつけていた時間は	60分＝21g 60分＝1.1円
電気炊飯器の保温時間は	60分＝11g 60分＝1円
電気ポットの保温時間は	60分＝11g 60分＝1円
エアコン(冷房)の使用時間は	60分＝90g 60分＝6円
暖房機(灯油)をつけていた時間は	60分＝237g 60分＝8.4円
ゴミの量は	1kg＝840g ＝
洗濯の回数は	1回＝106g 1回＝24円
自動車の利用時間は	60分＝5520g 60分＝252円
駐車車中にアイドリングした時間は	10分＝332g 10分＝15円

[illegible]

【自らの行動の決意】

(現状)	普段の生活では ⇒ CO2排出量	g	金額	円
(自らの課題・目標)	8月の閉殻式までの節約目標 ⇒ CO2排出量	g	金額	円
自らの行動最終結果	⇒ CO2排出量	g	節約金額	円

ます。
参考資料です。皆様も一度試して下さい。

【最後のその前に】

ある方に紹介された本を読んで心に残っている言葉があります。

「ツキを呼ぶ魔法の言葉」という本には、いつも感謝の気持ちを持ち、何が起きても常に感謝を忘れない。何があっても「ありがとう」「ラッキー」「感謝します」と思う。そしてその気持ちをもつて人と接し行動することが「ツキを呼び」幸せになる。ということが書かれていました。皆様のまわりにも決して人の悪口を言わない人や、常に「ありがとう」と口癖のように言っている人がいると思います。そういう人と接すると何か幸せな間隔になりませんか。皆様も「ツキを呼ぶ魔法の言葉」を常に心がけてみてください。

【最後に】

産政塾に参加させていただき何よりも素晴らしい人との出会いと、普段の生活では体験できないことや、考えることの大切さ、情熱と行動そしてチームワークなど、貴重な経験を支えてくださった東塾長をはじめ中部産政研の皆様そして松井さんには、お世話になりました。本当にありがとうございました。この経験を今後に活かしていきたいと思います。また、出会った仲間を大切にこれからもよ

ろしくお願いします。最後に産政塾第19期生の活動を支えてくださったすべての方に感謝を申し上げます。

産政塾で培われた絆について



東邦ガス労働組合

松 浦 秀登志

<プロフィール>

まつうら ひでとし

- 1975 年 2 月 愛知県春日井市生まれ
- 2000 年 4 月 東邦ガス（株）入社
- 2007 年 7 月 東邦ガス労働組合執行委員
現在に至る

【はじめに】

今回、産政塾第19期生の一員として、さまざまな活動に参加できたことを改めて幸運だったと感じています。産政塾に参加する機会を与えてくれた皆様に感謝します。

ここでは、産政塾で経験したこと、感じたこと、学んだことを振り返りたいと思います。

【第1回産政塾 開塾式】

1月23日、いよいよ第19期産政塾の幕が開けた。自分も含め少し緊張の面持ちで第19期生が集まった。一応、前回参加した先輩から産政塾がどういう趣旨のものか聞いていたのであるが、当然のことながら参加者は誰一人として同じではないため、不安と緊張がぬぐえなかった。

そのような心境の中、ついにスタートした。与えられたテーマは「殻の外へ踏み出そう」であった。正直、大きなテーマである。大きなテーマであるがゆえに、一つひとつの企画に、その目的・意義をしっかりと決め、参加者全員で共有することが必要であると感じた。そして、各班に分かれ、企画案を練ることから始まった。

【第2回産政塾 無の探求!! 自らをみつめなおし、更なる成長】

第19期産政塾の最初の企画となる活動は、私が所属するAグループの企画となった。これから産政塾がスタートし、様々な活動を通じていろいろなものを吸収していくための企画をグループで検討した。そして、たどり着いたテーマが「無の探求」である。ただ一言「無になる」といつても、どんな空間でどんなことを行っているとき、そしてどんな瞬間に無になるかを具体的に考えるのは、非常に難しいことであつた。最終的には、「宗教観」に拠り所を見出し、座禅と書を中心としたお寺での活動の企画となつた。

こうして、第2回産政塾の舞台となつた岡崎にある渭信寺では、日比野住職からの法話、座禅、書、清掃を行つた。

～座禅～

自身、初めての座禅であつた。一回の座禅時間は40分であり、決して長くない時間ではあつたが、体感時間はそれ以上のものであつた。もともと正座が得意ではなかつたこともあり、途中から足の痺れとの闘いであつた。遂に、無になることはかなわなかつた。しかし、静かに佇む座禅の時間のなかにおいて、他のメンバーの呼吸音やお寺に訪れる人の声、外の風の音などを染み入るように聞くことができ、また同時に塾生全員で座禅を行つていふという一体感を感じることができた。

～書道～

書道の時間は墨を磨る時間、書を書く時間ともに同じ時間を費やした。墨を磨るのも書を書くのも

非常に集中でき、下手ながらも味のある書がかけたと思う。最後に一人ひとり書いた書についての発表を行った。他のメンバーが書いた書には、一つひとつ詰まった想いを感じることができた。自分は小学生のころ、字を上手に書けるようになるため習字を習っていたが、今回、表現方法としての書のすばらしさを知ることができた。

こうして、無事に第一回の企画が終了した。この企画が成功したかどうかは、参加者が感じるころであるが、自分としては非常に有意義な経験をすることができ、産政塾のスタートに適したものになったと思う。

我思う、「座禅は、40分自分一人ではできない・・・。」

【第6回産政塾 富士山に挑戦！ 富士山麓に塾生泣く！】

これは本当に泣いた。疲れ、高山病、寒さ、などなど想像以上であったが、結果として、脱落者なしの参加21名全員登頂成功となった。

まずは、この企画において、事前準備の大切さを改めて認識した。2回にわたる練習登山の企画、ルート、ガイドの選定、持ち物等のアドバイスなど、この登山を企画した班の並々ならぬ意気込みを感じることができた。

自分も登山は生れて初めての経験であつた。その初めての登山で、日本一高い富士山というのも非常に不安であり、何か準備をしなければならないということで、この企画が決定してからは、できるだけエレベーター、エスカレーターを使用せず、階段を上ろうと決めた。ほとんど決めただけであつたが・・・。

それでも、自分が登頂できたのは、ガイドさんの適切なアドバイス、登山スピードと、一番後ろでずっと見守ってくれた松井さん、そして、参加者全員のチームワークであつたと思う。後は、富士登山を企画した班の意気込みを裏切るわけにはいかないとの思いと、一人だけ脱落するわけにはいかないと、いう負けず嫌いの根性が少々。こうして、生涯初めて拝むことができたご来光は、忘れられないものになった。そのあと、登つてきたものは降りなくてはならない現実に引き戻された。

富士山に登つて思つたことは、これまでチャレンジすることができない、最初からあきらめていることが自分の一つの殻だとすると、今回少なくともその一つの殻を破ることができたと思う。それは自分一人の力ではないことは確かである。

我思う、「富士山は、自分一人では登れない・・・。」

【第7回産政塾 閉塾式】

閉塾式の日を迎えた。

最後に、第19期産政塾の活動を振り返り、各々が考える殻について話し合った。そして、確かにこの半年で築き上げた絆を感じることができた。皆、自分の持つ殻は違えど、この絆によって半年前に持っていた殻は破ることができたのではないだろうか。

ここで、もう一度、自分の考える殻について整理してみる。

誰しも子供のころは、殻は薄い。好奇心や冒険心の塊である。成長するにつれ、二度と失敗したくない、つらい思いをしたくない、恥ずかしい思いをしたくないなどの自制心、また、人と行動が合わない場合などの非難の目などから、自ら殻を厚くしてきた。ただ、この殻は、社会で生きていくためには必要なものであると思う。大切なのは、これまでの古い殻を破り、また一回り大きな新しい殻を作っていく、これを繰り返し成長していくことではないかと考える。

【おわりに】

日程の都合上、参加できなかった企画が多かったことは非常に残念でした。最後の産政塾で、活動の振り返りのスライドを見て、参加した気になります。

最後になりましたが、東塾長はじめ事務局の松井さん、中部産政研の皆さま、また第19期塾生の皆さん、本当にありがとうございます。この絆を今後も大切にしたいと思いますので、皆さまよろしくお願いいたします。また、この産政塾が末永く続くことを願っております。

以上

産政塾を通して学んだこと



愛知製鋼株式会社

松 尾 康史郎

《プロフィール》

まつお こうしろう

- 2004年 愛知製鋼株式会社
人事部人事企画室 入社
現在に至る

〈家族〉妻、長男

入社して4年が過ぎ、仕事にやりがいを感じながらも、もつと成長したいと思っていた矢先、上司より産政塾の話を受け、非常に光榮に、また絶好の機会であると思ひ、産政塾への参加を決意した。この産政塾を通して、この塾のテーマである自分の殻とは何かを考えるきっかけと、またその殻を破る多くのヒントを得られたように思う。私が学んだこと感じたことを自分なりに振り返ってみた。

開塾式にて

開塾式、期待と不安が入り混じる中、いざ集まってみると、個性豊かな方が多く、皆さん様に「自分の殻を破るきっかけを探したい」「現状を打破して、更に成長したい」「新たな価値観を得たい」というような前向きな姿勢の方が多く、刺激になるとともに大変嬉しかったことを覚えている。

第2回 渭信寺を訪ねて、『無の探究!!自らを見つめ直す。更なる成長へ』

当回では渭信寺を訪ね、坐禅を行うとともに、住職より講話をいただいた。

当回の一歩のテーマは『無』になること。本格的に坐禅を組むことは初めてであつたが、実際にやってみるとこれが非常に難しい。坐禅を組むことで雑念を払い、無になろうと思うのだが、そう思えば思うほど、雑念が次から次に湧いてくる。無になることがいかに難しいかを思い知つた。

当企画にて非常に印象に残ったことに、「自分もいまだ修行の身である」という住職のお言葉がある。70歳になられる住職から聞く言葉には大変な重みがあった。人生において、また一人の人間において、これで良いという限界は決してなく、一生が修行、一生が成長なのだと感じた。「常に自分に満足せずに、謙虚な気持ちで成長しつづけること」が、この世に生まれてきた私たち人間の使命であると同時に、大きな幸せであるように感じられた。住職も坐禅を楽しみながら、自分を磨きたいとおっしゃっておられたが、私もまた「自分の成長が人生を豊かにすること」を忘れずに人生を精一杯楽しんで生きていきたい。

また今後の人生において「自分（の感情）をコントロールすること」が非常に重要だということも学んだ。人間生きていけば、当然、喜怒哀楽、様々な感情が出てくる。苦手な仕事にぶちあたること、理不尽なことに出くわすこともあるだろうと思う。しかし、そんなときに大切なことは、「まわりから影響されるだけでなく、自分を客観的に見つめことで、自分の感情をコントロールし、時には冷静な時には自分を奮い立たせ、物事に取り組むこと」であると思う。そういう意味で個人的には、『無』になるとは「環境に左右されず、私利私欲や雑念を払い、穏やかに、かつ広い気持ちで物事の本質を正しく見つめることが出来る」ということではないかと思う。決して簡単なことでないが、今後も少しでも『無』を理解し、実行できるよう私自身も修行を続けていかなければと思う。

第3回 豊田市所足助支所を訪ねて、『地球を守る、着実に行動を起す』

第3回では豊田市所足助支所を訪ね、森林や環境について関係者の方々から講話を聞き、実際に間伐体験やベンチ作りをさせていただいた。

当回で感じたことは、第一に「自分がいかに環境問題について無知であるか」ということである。間伐という言葉を耳にしたことはあつたが、間伐が日本においていかに重要であるかを知り、森林伐採が一樣に悪いことであると思ひ込んでいた自分が恥ずかしかった。間伐することが、森林だけでなく、そこに住む地域住民の暮らしの安全を守ることにつながることを強く認識させられた。また関係者の方が熱心に話される様子を見て、いかに強い使命感を持たれ、真剣に仕事に取り組まれているかを知り、私自身もその姿勢を見習いたいと強く思った。

実際の間伐作業もベンチ作りも予想以上に大変であつたが、本当に良い経験をさせていただいき、やはり「百聞は一見にしかず」で実際に汗を流して学んだことは知識以上に体に染み込まれるものだと感じた。

今回の活動を通して学んだことは、「無知・無関心ほど怖いものはない」「正しい情報を得ることの大切さ」である。世の中には実際に私たちが知らないこと、または間違つて認識していることが無数にあり、知らなければ自分たち自身にも大きな害があることもあると痛感させられた。今までにも無知が故に正しいと思つてやつていたことが自分でも知らないうちに実は逆の結果を招いていたという

こともあったのではないかと思った。「正しい知識や情報を自ら積極的に得るようにしなければならぬ」、そしてこういった環境問題を何より他人事にせずに「自分のこととして考える」必要があると感じた。関係者の方もまずは知って欲しいとおっしゃっていたが、まずは自分が「知り」、知ったことを少しでもまわりの人に「伝え」、そして何か小さなことでも「実行」していくことが大切だと思う。まずは自分の問題という当事者意識を持つて、将来の地球のため、子供たちのためにも、自分出来ることをどんな小さなことでも、今すぐ始めようと思う。

第4回 宮崎県を訪ねて、『地域活性化の取組みについて学ぶ』

当回では主に、宮崎県の県庁や地場産業を訪ねて、宮崎県がいかに地域活性化に取り組んでおられるかを学んだ。

宮崎県では、東国原知事のもと「どげんかせんといかん」という強い思いで地域活性化に取り組んでおられることを学んだ。従来の考え方にはとらわれない斬新なアイデアを次々に実行され、県庁観光の訪問者や物産の売上増加等、確実にその成果が表れてきていることを知った。私は特に『県民総力戦』という施策に大変感銘した。「主役は県民一人一人であり、一人一人が同じ思い、ビジョンを描き、当事者意識を持つて行動していくことが大切である」という考えに共感したからである。この考え方は地域のみならずあらゆる組織においても重要になる考え方だと思う。「主役は誰でもない自分自身

であり、その自分に何ができるかを考える」この考え方こそが地域活性化の原点・土台になるものであると感じた。

また実際にマンゴー畑や酒造工場といった食産業を訪ねることで、現場で働く方の不断の知恵とアイデアの存在、製品に対する愛情を感じた。地域活性化においては、「地域全体が共通のビジョンを描くこと」、「不断の努力と斬新なアイデア」、「自分の地域や製品を愛すること」、そして何より「自分が主役という思いを持つこと」が必要不可欠だと思った。またこれは私たちの企業にも同様に言えることだと思う。

私も地域人・企業人として自分が主役という強い当事者意識を持って、自分に何ができるかを考え、実行していきたいと思う。

第5回 FC岐阜を訪ねて、『夢に向かって挑戦する姿勢から『情熱』を学ぶ』

当回では『情熱』を学ぶべく、FC岐阜の今西GMより貴重なお話を伺った。今西GMからの実体験に基づいたお話は、私にとって、その一つ一つが将来リーダーとなるため、また長い人生における指針となる大変参考になるもので、今でも心に焼き付いている。

特に印象に残っているお話は、「リーダーとは相談に乗って欲しい、話を聞いて欲しいというような、困っている相手をどれだけ助けてやれるかであり、その結果、あの人のためならと言ってくれる人が

どれくらいいるか、それがその人自身の度量を表わし、結果としてそういう人がリーダーになれる」といったお話である。

リーダーとは自分の考えをはっきりと主張し、まわりをグイグイ引っ張っていくような存在であることも重要であるが、真のリーダーとはそれ以外にも、「いかにまわりから信頼されるか」が大切であり、何よりリーダーには「人間としての度量」が問われるのだと強く感じさせられた。リーダーを目指す上では、自分を信じてくれる人がどれだけいるか、またそのために自ら常に自己研鑽に励み、自分を高め続けることが大切だと感じた。

当回を通して、『情熱』がいかに人生を面白くするかを学んだ。

また最後に今西GMの『心が変われば行動が変わる、行動が変われば習慣が変わる、習慣が変われば性格が変わる、性格が変われば人生が変わる』という言葉を胸に刻んでおきたい。人の性格は変わらないと言うが、決してそうではなく、心が変われば人生さえも変えることができる、「心」という内面や気持の持ち方はそれだけ重要なのだと改めて感じることが出来た。

第6回 皆で富士山に挑戦！～富士山に塾生泣く～

いよいよ最後の企画。富士山への挑戦。

富士山登頂が初めてどころか、登山さえもほとんど経験がなかった私にとって本当に大変な経験で

あつたが、ここからも得たものは数多くあつた。

当たり前のようにだが、仕事においても人生においても「事前の準備」がいかに重要かということである。当企画を実施するにあたり、担当グループの方より、準備しておいた方が良いものや心構え等々、事前情報をたくさんいただいた。正直こういった情報を何も知らずに挑戦していたら、無事に登頂という結果には決してならなかったと思う。また「チームワークの大切さ」も改めて感じた。何度もうじけそうになったが、同じ目標を持つ皆さんと一緒にだったからこそ最後まであきらめずに登頂できたと思う。

最後に　　自分の殻とは、また殻を破るためには

今回、この産政塾に参加し、同塾に参加していなければ、おそらく人生で経験できなかったであろうことを数多く経験させていただいた。また多くの方と出会い、交流を持てたことに心から感謝したい。産政塾を通して学んだこと、感じたことは数え切れないほどあり、私としてはその一つ一つが非常に貴重で、今後の人生の大きな財産になると思う。

今回産政塾を通して、自分の殻というものが何なのか考えさせられた。殻にはいろいろなものがあると思うが、私が思う殻とは、自分が知らずうちに作った「自分らしさという自分の枠」、また自分には出来ないという「自分の限界」、そして自分の中の世界で作られた「自分の中の常識・固定観念」

といったものではないかと思う。

その殻を破るためには、簡単ではないが、この産政塾を通して感じたことすべてがそのヒントになると確信している。その中でも私がこの産政塾を通して「殻を破るために」強く感じたことが2つある。一つは『人は人の中でこそ成長できる、殻を破るためにはたくさんの人に出会うこと大切である』ということである。塾長が「人は一人では生きてはいけない、たくさんの人と関わって生きていかなければならない」とおっしゃっておられたが、まさにその通りだと思う。やはり多くの人と関わることで、多くの価値観を共有することができ、人生豊かになると思う。そのためには「人と本音で向き合っていくこと」が大切だと感じた。2つ目に、今回たくさんさんの経験を通して、やはり『何事にもチャレンジして、経験することで、自分の知らない世界を知っていくこと』が重要であるということである。殻は自分の中の「内」の世界にこもったときに出来るものであると思う。であれば、自分の「外」の世界に目を向けて、自分の限界や常識を覆していくことが何より大切であると思う。『たくさんの人との出会い』、『外の世界に目を向け、チャレンジしていくこと』が自分の殻を破っていく上で重要ではないかと感じた。

今後もしろんな壁にぶつかり、殻を作ってしまうこともあると思うが、この産政塾での学びをぜひ活かしていきたい。最後に数多くのことを学ばせていただいた、産政塾の関係者の皆様、同期メンバーの皆様にご心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

殻を破り続ける「心がまえ」とは



中部電力労働組合

三田地 勇也

《プロフィール》

みたち ゆうや

- 1974 年 5 月 岩手県盛岡市生まれ
- 1999 年 4 月 中部電力(株) 入社
本店資材部管理グループ配属
- 2001 年 8 月 三重支店桑名営業所配属
- 2003 年 7 月 本店大口営業部電力受給
グループ配属
- 2005 年 4 月 本店電力取引部電力受給
グループ配属
- 2006 年 7 月 中部電力労働組合
本部常任執行委員
現在に至る

はつめい

1年前の自分を思い起こしてみる。そして今の自分を見つめ直してみる。われながら「変わったなあ」と感じる。

それが産政塾の影響であることは間違いない。仲間たちとの出会いや、訪問した先々での貴重な体験が、素晴らしい財産として心の中に残っている。

振り返ってみると、産政塾のテーマでもある「殻」について深く考えるたびに、自分の中で新たな発見が生まれた。「殻」について考えることは、自分が生きていく上での「心がまえ」を考えることと一緒であると思う。今にして思えば、産政塾での数々の活動は「お前はこれからの人生を、どんな心がまえで過ごすんだい？」と問い掛けられているようであった。そしてそれは、背筋が引き締まるような、とても心地よいプレッシャーでもあった。

住職から学んだこと

記念すべき第1回目は、寺院での座禅・書道を通して「自分を見つめ直す」という企画であった。この企画で最も心に残ったのは、「住職の存在」であった。70歳にもなるご住職であり、かなり高い位にいらつしやることは容易に分かるのだが、その佇まいは自然体であり、まさに「悟りを追求する者」

の姿に見えた。他人に対して飾らず、ありのままの自分を受け入れるその姿は、私にとって未知の世界であった。本やテレビなどの間接的な情報ではなく、直接響いてくる衝撃があった。それは、慣れ親しんだサラリーマンの世界では絶対に味わうことの出来ない、初めての体験であった。ご住職の前では、自分がとても小さな世界の中で「世間を知ったような気になっている」ことが露わになるため、ひどく恥ずかしい思いであった。そして、その「恥ずかしい」という思いは、自らの「殻」の存在を浮き彫りにしていった。「殻」を自覚することで、その「殻」を破るための方法を模索することができる。やつとスタートラインに立ったことを実感した日であった。

○森を守る人々

第2回目は、日本の森林が抱える課題を学ぶ企画であった。まず最初に、豊田市役所の方々に日本林業の課題について教えていただいた。森の砂漠化を防ぐために、今優先的にやるべきことは「間伐」であるが、私有林・国有林ともに間伐が進んでいない危機的な状況であるということが良く分かった。講義をしていただいた方は豊田市役所の職員であり、いわゆる「役人」なのだが、彼らの森に対する熱意は強烈であった。間伐が遅々として進まない状況に危機意識を持ちつつ、自らのベストをつくして仕事をしているように思えた。我々への説明も熱を帯びていた。「この状況を少しでも多くの人に知ってもらいたい」という熱い思いが伝わってきた。役人というより「山の男」という表現が適切

かもしれない。こういう素晴らしい人達が、公務員という立場で懸命に働いていると思うとホッとす
る。うれしい発見であった。

講義の後は、実際に間伐を行った。間伐する山はかなりの急斜面であり、足を滑らす者が続出する
ほどであった。林業は作業中に亡くなられる方がとても多く、大変な仕事であると聞いていたが、そ
の意味を実感することができた。足場もない厳しい場所で、細心の注意を払って迅速に行動しなければ
ならない。本当に厳しい仕事だ。見たり聞いたりするのではなく、自らが汗をかいて経験することで、
初めて分かることがある。こんな当たり前のことに、あらためて気付かされる。

ここでまた「殻」について考えることとなった。自分の殻を破るには、常に新たな経験を追い求め
ていく姿勢が何より大切ではないか。自らの知識・経験・価値観を打ち破るには、未知の世界へ飛び
込み、多くのことを吸収しようとする心意気を持ち続けなければならない。そのためには、常に「殻」
を意識し、「殻」を打ち破る努力を欠かさないことが必要になる。大事なことを学んだ日であった。

○地域活性化へ取り組む人々

第3回目は、宮崎県で地域活性化の取り組みについて学ぶ企画であった。1泊2日のスケジュール
であったが、非常に有意義な2日間であった。

最初にお話を伺った宮崎県庁では、職員の皆さんが東国原知事のもとで、いきいきと仕事をしてい

る姿が印象に残った。「東国原バブル」と言っても良い状況の中で、それに奢ることなく長期的な視野を持ちながら「宮崎の強み」を模索していた。突破口となるキーワードは「県民総力戦でのおもてなし」であり、この考え方を軸に宮崎の独自色を出そうと努力しているところであつた。知事は「宮崎の宣伝マン」として日本中を駆け巡っているが、その考えは部下である職員の皆さんへもしつかり伝わっていることを実感できたし、その思いは県民にまでも伝播しているように見えた。

また、庁舎そのものが観光地化しており、数多くの観光客で賑わっていた。職員の方々は、観光客がひっきりなしに出入りする中で業務に励んでいた。「これでは集中して仕事ができないうらやまがある」と思う反面、「こういう環境であれば、県民を無視した仕事はできないだろうなあ」とも感じた。テレビの映像ではなく、現場を訪れることで初めて体験できることがある。気付かされることが本当に多い。

その後も、宮崎の実情を知るためにバスで走り回る。その中でも、マンゴー農家や選果場での話は今でもはつきりと覚えている。地方における農業の厳しさは、私の想像をはるかに越えていた。都市部で大人気の宮崎マンゴーでさえも、農家のリスクが非常に高く、後継者がいない状態であつた。宮崎マンゴーが人気を保持し続けるためには、徹底的な品質管理が必要不可欠である。それは、農家に対して妥協を許さない商品提供を求めるものであり、結果的には農家から安定収入を奪う要因となつてしまうことで、後継者不足という問題に繋がっていく。しかし、ブランド力を維持するためには妥協する訳にはいかない。地域活性化を議論する中で「それぞれの地域で強みを見つけて」という言葉

を良く耳にするが、その実情は壮絶なものであった。都市部に住んでいると、こんな大きなことも見落としてしまいそうになる。日々勉強であることを、あらためて思い知らされる。

自らの足で動き回ること、これまでとは違った世界が見えることがある。そうして得た経験は充実感をもたらし、自然とさらなる未知の世界を求めるようになる。この繰り返し「殻を破る」ということではないか。そうであるならば、生きている限り「殻」は破り続けるものとなる。

サッカーに賭ける男達

第4回目はFC岐阜を訪問し、スタッフの熱い情熱に触れる企画であった。今西GMをはじめとするスタッフの皆さんと話をしていると、「自分の信念を貫くぞ」という思いがひしひしと伝わってきた。安定した職業を捨てて、FC岐阜のスタッフとして飛び込んだ方もいた。皆が今西GMを慕って全国から集まってきた。全員が良い顔をしている。充実した顔ばかりだ。

何かを成し遂げるときには1人では限界がある。リーダーは人を導かなければならないが、それは結局のところリーダーの情熱によるところが大きい。もちろん、リーダーは情熱の基礎となる信念を持つていなくてはならない。そして、その信念は「殻」を破り続けることで形づくられていくのではないだろうか。口だけではない、それまでの人生で「殻を破り続けてきた姿勢」が人を動かすのではないだろうか。熱い男達を見てそう感じた。

富士山への挑戦

最後はこれまで学んだ多くのことを生かしながら、塾生が一体となって富士山へ挑んでいく企画であつた。

これまでの企画と違ったのは、塾生達の間で事前トレーニングなどが自然発生的に行われた点である。こういった企画当日にいたるまでのプロセスが、チームの結束力を高めていった。一体感が増すにつれて、塾生のモチベーションが上がっていくのが手に取るように分かつた。

私は残念ながら体調を崩したため、登山に同行する事ができなかったのだが、それまでのプロセスがとても充実していたことから、「全員が無事に登頂成功」の報を聞いたときに、非常に感激したことを覚えている。塾生それぞれが仕事で忙しい中、何とか時間を工面しながら協力し合ってきたことが報われたことを思うと、我が事のように嬉しかったのだ。

それぞれが「自分の殻を破ろう」と必死になつて取り組んでいくことによつて、チームとしてのまとまりが出来たのだらうと思う。思い出に残る、悔いのない企画であつた。

殻を破り続ける「心がまえ」とは

「殻を破る」という行為に終わりは無いのだろうかと思う。必ず次の「殻」は待ち構えている。でもそれで良い。常に「殻」を破り続ければ良いのだ。それは苦痛ではないと思う。むしろ「殻」を破るための努力を惜しまず、次の「殻」に挑戦できることを喜びと感ずるようになりたい。もしも自らが勝手に限界を設定すれば、もう破るべき「殻」は現れないだろう。

殻を破り続ける「心がまえ」とは、具体的に言うとは、どういうことなのだろうか。常に「成長したい」という信念を持ち続けること、フットワークが軽いこと、人の言うことには素直に耳を傾けること、口だけではなく行動で示すこと、努力を惜しまないこと、熱い情熱を注ぐこと、等々。

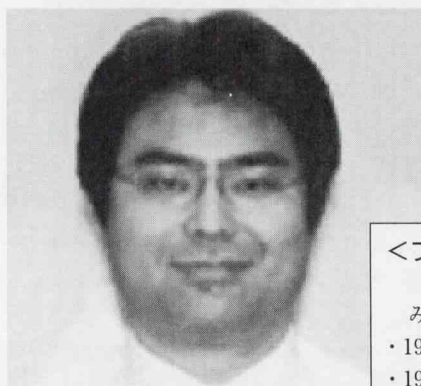
1つ1つが難しいことばかりであるが、それでこそ、やりがいがあるというもの。絶対に終わらない人生の宿題みたいなものか。ならば、急いで取りかからなくては・・・。

最後に

最後になりましたが、我々塾生を導いてくださった東塾長ならびに事務局の皆さんには、本当にお世話になりました。心より御礼申し上げます。

特に事務局の松井さんの細やかな配慮無くして、第19期産政塾はありませんでした。感謝感謝です。本当にありがとうございました。

産政塾を振り返って



トヨタ車体株式会社

皆 川 和 孝

<プロフィール>

みながわ かずたか

- ・1974年9月18日 愛知県生まれ
- ・1998年4月 トヨタ車体(株) 入社
経理部配属
- ・2007年1月 人事部異動
現在に至る

<家族>妻

はつめい

まずはこのような機会を与えていただいた東塾長はじめ中部産政研のみなさん、松井さん、受け入れていただいた各機関には大変感謝している。

また送り出してくれた職場の上司、同僚、部下のみんなにも感謝したい。

そして楽しく刺激的な会合を一緒に送った第19期の塾生のみなさんにも。

自分なりに半年の活動をまとめてみたい。

「殻」とは

参加にあたり活動のテーマである「殻の外に踏み出そう」について以下の仮説を立ててみた。

「殻」とは自分で限界を作っている「思い込み」であり、今までの成功経験ではないか。

自分の限界を超え、幅を広げるためには、新たな成功経験を持つことが必要であり、時には過去の成功体験を捨てることも必要となる。

能力向上する曲線はゆるやかな上昇を続けるのではなく、階段のようにいきなり上昇する能力向上の過程はしみじみと実感するものでなく、ある時に「できるようになっている」と気付く。

「殻の外に踏み出す」ために必要なのは「まずやってみる」という姿勢と心構えではないだろうか?』

この仮説に沿って各会合毎に行動した（はず）。各会合毎に私自身が感じたことを綴っていききたいと思う。

第2回 「集中力」

岡崎の渭信寺で座禅、書道を行った。

合計2時間弱座禅を行ったが、雑念ばかりで無心にはほとんどなれなかった。

無心にはなれなかったが、なぜか集中できる時間帯があった。

集中している間は時間がスローモーションで流れていた。

飛んでいる虫がスローモーションに見えるほど。

一瞬でも集中できる時があるとその時間は恐ろしく長い。

きつと能力が少し広がったのだと思う。人間の能力はほんの一部しか使っていないらしいから。

集中できるきつかけ、スイッチの入れ方を作り、集中できる時間を増やしていきたいと思った。

またできれば自分の能力を伸ばしていくことができるよう行動していきたいと感じた。

第3回 「思い込み、先の見通し」

豊田市役所にて森林の理解間伐体験。間伐が必要であることが初めて理解できた。

今までは地球環境を良くする為には木を植えることが良いことだと思っていた。

しかし日本についていえば間伐をして森林を正常な状態に保つことが必要。

現状は植林された杉、檜が過密に植えてある状態でした。根が張れている状態ではない。

よって一たび激しく雨が降ると洪水、土砂災害等の被害が甚大となる。

なぜそんな状態になっているのか？

昔、杉、檜は高価で取引されていたためあらゆる場所植林をした。

今では国内需要の低下及び外国産ほとんど儲けがでず、生計は成り立たない。

また行政が間伐を実施しようにも、80%は私有林であり強制的には実施できない。

この事実を「行政に計画性がない」「林業に携わる人々が未来を見通せていない」とは言い切れない。

常に環境の変化を考え、計画にもいくつかのオプションを考える必要があり、先を見通す目を養っていかねばならないと強く感じた。

間伐も非常に大変なもので、危険も伴う。これを実施されている足助支所のみなさんの努力には頭が下がる。

体験後の討議で自分の周りの人々に森林の事実を伝えることをみんなで誓った。

私も10人くらいには展開できたと思う。

第4回 「ビジョンの明確化」

1泊2日のプランは私たちのDグループが担当することになった。

まずは私達を受け入れ対応いただいた宮崎県庁、西都市役所、J A西都、西の都酒造、高千穂市役所の皆様にお礼を申し上げたい。「本当にありがとうございました。」

テーマは「地域活性化」に決まっていたが、その後の進みが遅くかなり追い込まれた状態でのプランニングとなった。

宮崎県庁で県民総力戦の話を聞き、その後具体例を現地（マンゴー畑）で確認するといった流れは決まった。

まだ少し足りない気がしていたところに新しい酒造会社（西の都酒造）ができ、工場見学をさせてくれるとのこと。

ここでようやく県↓農業↓商業↓観光といった流れができた。

個人的にはリーダー（知事）が変わって、どう県庁が変わったのか確認でき非常に有意義であった。知事は県庁の施策をきちんと学び、自分の言葉に置き換え話することができる方。また独善的でなく調整的な態度であるとのこと。

ビジョンが明確になっており、アピールをうまくすれば、変わることができると感じた。

(もちろんリーダーを支えている多くの人々の努力の上に成り立っているのは言うまでもないが。)

また人々の努力を無駄にしないためにもリーダーは的確な判断、ビジョンを明確に示しアピールすることの大切さを感じた。

またブランディングの大切さを学んだ。太陽のマンゴーとして売れることにより実に4倍もの値がつく。そのブランドを守るための努力は非常に大変である。

これもきちんとビジョンをメンバーで共有し、方向付けた成果であると思う。

ビジョンを明確に出していたのは西の都酒造、高千穂町も同じだった。

また各訪問先で良くしていただき、人をもてなすことの大切さを感じ入った。

土産のマンゴーを正直に頂いてしまったのは反省しきりです。みなさん失礼しました。

第5回 「責任感 真剣」

FC岐阜にて今西GMにお話を伺い、サッカー体験。

今西GMから訥々(とつとつ)とリーダーのあるべき姿を明確に話していただいた。

プロはまずチームのことを考える。またサッカー中心の時間の使い方をする。

責任感を強く持つこと、ポジティブシンキング、チームワークで勝つこと、全ての部分で負けるわけではないどこかで勝つ、先を見越した行動がとれる。

様々なお話を頂いたが、繰り返し登場したのは「責任感」だった。

「責任をとる」ことがリーダーとしての最もわかりやすく、難しいのではないか。

「責任」を取れない人間は仕事もできず、何事も中途半端になると思う。

服部さんの指導でサッカーをしていたが、一番真剣だったのは東塾長だった。

何事にも積極的に取り組み、真剣にやる姿勢が大切と感じた。

第6回「助け合い 仲間」

全員で富士山登頂しご来光を拝む。

事前に3回の練習会があり、その内容また装備品について全員にメールで連絡がされた。

危機感の共有化がなされたことが、21人全員の登頂に繋がったのでないだろうか。

5合目に到着してすぐの通り雨で出発が30分程遅れる。

思いの他遠い山小屋、悪天候にみんなの話し声も少なくなる。

そんな中、周りに声をかけながら登っているみんなが素晴らかった。自分ぎりぎりで登っていたのでな

仮眠後、ゆっくりしたペースだが息が苦しい(気がする)。御来光10分前に21人全員で無事登頂成功！
後は下山だけだが、下山の方がきつかった。体重を支えきれず、膝が悲鳴をあげた。

最後は4人となったが、最後まで一緒に下山してもらった。

1人だったら自分に負けて、6合目からは馬の背中（1万円を払うと5合目まで乗せてもらえる）に乗っていただろう。

仲間の大切さを実感した。一緒に降りてくれたみなさん、本当にありがとうございました。

「殻の外に踏み出す」とは

半年間の活動を通じて感じた「殻」とは『思い込み』であり、「視野の狭さ」であると思う』
そして「殻の外に踏み出す」ことは経験を増やすことであり、「何でもやってみるという前向きな姿勢と心構え」と言える。

私の感じたキーワードでまとめると

『先の見通しを盛り込んだビジョンを明確にもち、責任感を持つて真剣に取り組む』

または『思い込みを排除し、仲間を大切にし、助け合いながら集中して取り組み』と言える。

日々自身に言い聞かせながら、行動していきたい。

最後に

塾生みんなが前向きで常に相手のこと、全体のことを考えながら、まず行動する姿をみて自身を振り返る機会となった。

また富士山登頂以降、塾生みんなが行動を変えている、もしくは変えようとしていることは感動した。

第19期塾生として恥ずかしくないように頑張りたい。みなさんこれからも宜しくお願いします。

「殻の外に踏み出した？」 以前と今、そして今後



トヨタ自動車労働組合

森 下 宏 浩

《プロフィール》

もりした あつひろ

- 1971年8月 愛知県常滑市 生まれ
- 1990年4月 トヨタ自動車（株）入社
- 2006年9月 トヨタ自動車労働組合
執行委員
現在に至る

＜家族＞妻、長男（7才）、長女（5才）、
次男（0才）

《産政塾 開塾式まで》

組合専従になった日から、数多くの貴重な経験をさせていただきました。その一つが産政塾での経験であります。産政塾の入塾にあたり、最初に感じたことは産政塾って何？産政塾テーマ「殻の外へ踏み出そう」殻って何だろう？しかも案内書には、「今回申し込まれた動機を御記入下さい。（必須）」と書いてあるのです。非常に困った。産政塾のことすら知らなかった私に、「申し込まれた動機」を記入と求められても、動機を考えるのが大変でありました。

“今回申し込まれた動機”を考えながら、ふと思い出したことが・・・。

今から10年程前のことですが、自主活動をする機会がありました。その活動結果を資料にまとめ、最後に発表をするのですが、発表の時に取り組んだテーマの選定理由を「どうせやるなら・・・」と言ったところ上司から「その言葉は使わない方が良い」とアドバイスをしていただいたことを思い出しました。後ろ向きに取り組んでいてはいけないという理由からでしたが、ハツとしたのを覚えています。このことを思い出しながら、「今後のために産政塾を通して何かに“気づき”変わるためのきっかけにしたい」という動機を記入し、前向きな気持ちで参加させていただきました。

《#1 開塾式》

開塾式の印象…やる気満々な人がたくさんいるなあ。

《#2 渭信寺を訪ねて、「無の探求……自らを見つめ直し、更なる成長へ」》

欠席…評議会対応の為 ぜひ参加してみたいと思った企画でしたが残念ながら参加できず。

《#3 地球を守る、直実に行動を起こす!!》

欠席…海外セミナー出席の為 間伐体験してみたかった。

《#4 宮崎県の地域活性化の取り組みについて学ぶ》

私達のグループの企画でしたので平日の夜にも、メンバーで集まって事前準備を進めてきました、メンバーの方々の企画力や行動力にとっても刺激を受けました。まず、テーマを「地域活性化」に決め、訪問先を宮崎県にしました。注目を浴びている宮崎県ですが、ここ最近で、一気に知名度もイメージも変貌を遂げた理由を探るべく、実際に訪れて何かを感じることが出来ればと考え訪問先を宮崎県に絞込みました。

宮崎県では、まず、県庁を訪ね県庁の方々に宮崎県の将来ビジョンとプロセスについて伺いましたが、強力なリーダーシップのもと、県民自らが主体性（県民総力戦）を持って様々なことに取り組んでいるなあと感じました。ここで感じた“気づき”は、受身な姿勢では、何もできないし、変わらない、

そして変えることができないということでありました。自主性が芽生えれば、また、自主性を芽生えさせることができれば何かを変えていけるのだと感じました。

県庁の後は、食産業を知るために、西都市のマンゴー選果場へ行きました。ここでは、マンゴーブランド「太陽のたまご」の出荷にあたつての、選別の方法（規格等）を実際に出荷の現場を見ながら説明していただき、ブランドイメージを高めるための努力などを直接見させていただくことができました。そしてマンゴーを栽培しているハウスも実際に見るために見学をさせていただきました。最近では宮崎県といえば完熟マンゴーとイメージするほどの有名な特産物になりましたが、その栽培は非常に手間暇がかかり、予想以上に大変なことが分かりました。そのためにとってもコストがかかり価格が上がってしまうのを現地現物で実感することができました。栽培は大変そうでありましたが、生産者の方が誇りを持つて仕事をされていることがよく分かりました。

次に西の都酒造へ行き、焼酎を造る際のくふうや注意している点などの説明を受け、現場も見せていただきました。食産業を見学して、”気づいた”ことは、地域に愛されるためには、そこで働く人一人ひとりの絶え間ない努力やくふうがあること、そして造っていることに自信や誇りを持つているということ、造る物への気持ちが入っているということでした。このことは、すべての製造業に必要なことではないかと感じました。ものづくりに対する強い思い入れが大切なことに、”気づいた”企画でありました。

次に観光産業を知るということで、高千穂役場で地域再生マネージャーの方から高千穂での観光へ

の取り組みについて教えていただきました。ここでも、地域住民の方と一緒にたつて取り組んでいることがよく分かりました。

最後に今回訪れた、宮崎県での活動を通して塾生で議論を行いました。議論した内容は、「自分たちの住む地域の活性化のためにできることは何か？」です。多くの意見が出ましたが、身近なことを、小さなことでも良いから行動に移すことが大切だと感じました。自分にできることから始めよう。

《#5 すべての始まりは情熱から》

欠席：評議会対応のため

《#6 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く》

実は開催日が、3人目の子供の出産予定日でしたので、最後まで参加するか迷っていたのと、当日まで、参加出来るのか不安でしたが・・・参加してしまいました。

日本一高い山、富士山に登るのですから、事前の準備（登山靴等のグッズを購入・体力づくり？）が必要だなあと思いつつもなかなか始動できないままに日が過ぎました。事前トライの金華山にだけは参加しなければと思い、参加する1週間前にやっと靴を買い、その日に30分位歩いて体力づくり？して金華山へ登ってみました。しかし登山恐るべし！足が震える、息は上がるし、汗はダラダラと・・・

非常に疲れました実際に事前トライに参加して登山する人がかなり居て驚いたのと山に登る理由が分らないまま頂上に着きました。登ってみたけどやっぱり分からず、下山もきつい。帰りの車の中で、「富士山はどうなるのだろうか?」「体力的にも精神的にもきついのは分かるが、登山することでも何か感じることはあるのか?」などと考えながら家まで帰りました。

当日を迎え、実際に登り始めましたが、ガイドの方がついてくれており、登るペースも休憩の取り方も絶妙だったため、体力的な面では、きつさは無かったように感じます。休憩の時には、登ってきた所を見下ろして、これだけの時間を費やして登って来た割には、たったこれだけしか登っていないのだなあと感じながらも何とか7合目を過ぎました。まわりも暗くなりヘッドライトを点灯して一歩黙々とのぼり、足もだんだんと重くなり、気持ちも重くなり疲れも出てきました。

8合目の山小屋での食事(カレーライス)の、なんともおいしいこと!?!そしてけだるい中での宿泊(仮眠)は、寝返りを打つと隣の人と肩が当たる程の寝袋一枚分のスペースしかなく、窮屈さと、息苦しさで、仮眠にもなりませんでした。

3時間程休息して、再出発!そして目指していた頂上へなんとかメンバー全員で登りきることができました。想像以上に寒かったことと、登山をしている人の多さに驚きました。そして山頂からは、運良く御来光まで見ることができました。登りきった気持ちで見る、御来光でしたので余計に感動しました。

下山は疲労からか太ももとひざの両方が痛くなりきついものでした。でも下山後温泉に入り富士山

の頂上を見上げたとき、「あそこまで登ったのだ！」と達成感でいっぱいになり疲れも吹き飛び良い気分でした。

登山開催日が予定日だった子どもは数日後無事に産まれました。頂上で見た御来光が素晴らしく、太陽をイメージした名前をと思い次男に命名しました。

こうした経験をしてみて“気づいた”ことは、普段の生活の中でも、やってみたいなあとか、行ってみたいなあと感じることはたくさんありますが、色々と理由をつくってあきらめてしまったりすることが年齢を重ねるごとに増えて来たように感じます。しかしこれからは、新たなことにチャレンジする場合も足踏みせずにまずはやってみようかなと思いました。富士登山を経験したことでやってみるこの大切さに“気づき”ました。

《今後》

産政塾では、貴重な経験をたくさんさせていただきました。この経験がなければ以前の自分とは何の変化もなかったと思います。そして実際の体感や経験が大切だということに気づかされました。この“気づき”が今後の仕事や生活の中に生かすことができばいいと思います。殻の外に踏み出せたかは分かりませんが、「どうせやるなら」といった感覚は持たずに、まずは何事にも前向きにチャレンジしていくこと、それが殻の外に踏み出す第一歩になることでしょう。

最後になりましたが、産政塾 第19期で出会った皆さん、短い間でしたけれども大変お世話になりました、どうもありがとうございました

「育つ」とは 「育てられる」とは



株式会社豊田自動織機

柳 瀬 翼

《プロフィール》

やなせ たすく

- 2004年4月 入社
グローバル人事部
海外企画室 配属
- 2006年9月 グローバル人事部
グローバル人事室 異動
- 2008年1月 グローバル人事部
人材育成室 異動
現在に至る

産政塾では、出身会社がそれぞれ異なる男女28名が一同に会したわけであるが、思い起こせば、開塾式から「何かやるぞ」という気を各々から感じたことは確かであった。外に発する前向きな力によって、期待感は会場内に充満していた。

この開塾式において、自分自身の活動のテーマを標題のタイトルにしようと心に決めていた。

「育つ」。「育てられる」。自分を主人公とした場合、今回の産政塾の活動はどちらであったのだろうか。回想を交えながら、今後の自分自身の糧とすべく、人が「育つ」、「育てられる」について塾誌紙面に考察を深めていきたい。

本論に入る前に、今回の活動を通じ、人が「育つ」要素を以下の5つにまとめてみた。

1. 日々とは異質の体験をする。他から学ぶ。
2. 遊び心を忘れない。難局において知恵を絞る。
3. 自分の役割を見つける。役割を変える。
4. 目指すべきありたい姿を描く。
5. 過去の自分を越える。

また同様に、人が「育てられる」環境を以下の3つにまとめてみた。

1. 人として正しい道を体現している人物とともに存在場所を高めること。

2. 目先の利を追わず、泥を被ることを厭わぬ人物に教えを乞うことができる。

3. 信じることを知り、互いのために役割を負える同志がいること。

これらの考え方は、未来永劫変わらぬことではなく、今後の人生のある時点で付け加え、ある時点で修正をしながら、発展させていくものだろう。仮に10年後に振り返った際、どのように変わっているか、あるいは変わっていないかが楽しみである。

ここからは、「育つ」「育てられる」に関する既述の考え方を一つひとつ掘り下げていきたい。

「育つ」について

1. 日々とは異質の体験をする。他から学ぶ

産政塾では、出身会社が全員異なることが非常に新鮮に感じた。日々社会人として生活をしていると、次第に同質な組織の中で、考え方や行動が狭まってしまうが、バックグラウンドの違いは、創発を促し、新組織に属する喜びをもたらした。また、組織に貢献しようとする意思が次第に私の中に醸成されていく瞬間を経験した。日々とは異質の体験により、内発的に何かを成し遂げようとする意識が生まれる、まさに好循環とはこのようなものかと思う。ただし、異質の体験をするのみでは不十分

であり、他から学び取ろうという心構えの前提は、尊敬できる存在の有無が大きい。敬意を表する相手とは、自分自身を上回る存在に他ならず、ここでは年齢はあまり意味をなさない。齢を重ねるごとに、人間の総合力としては、バランス・大きさとともに高まるであろうが、年下であっても、立派な人物は存在する。肝心なことは、自分に足りない部分を持っている人物を年齢というフィルターを介さずに、いかに見抜くことができるかによるのだと思う。その意味では、塾生には尊敬に値する人物が多くおり、互いに学ぶことができた。

2. 遊び心を忘れない。難局において知恵を絞る

活動の1回目が我々のチームの担当となった。それぞれの仕事が多忙の中、数回集まることができ、活動計画を立案した。テーマは「無になる」であった。概要は産政研の紙面で報告のとおりであるので、詳細は割愛するが、限られた時間でより良いものにしていくコツを学んだ。意見を出し合う中で、方向性は四方八方行き来したが、大事なことは、自分たちがまずは楽しむこと、そのためには、遊び心を常に忘れないことである。難局というには大袈裟であるが、思考がスタックする際に、もう一つ大事なことは、やりきるためにはどうするか、を議論し知恵を絞ることである。実際やつてみれば、多くのひとが知恵や手助けをしてくれるもの。もちろんそのためにも、リーダーや推進者自身がワクワクしていることが条件である。

3. 自分の役割を見つける。役割を変える

新しい組織に所属する際、リーダー、参謀、盛り上げ役など居場所を探すものである。まずは、以前のパーソナリティに合った役割を担い、全体としてバランスが取れていれば申し分ない。今回の活動で磨くことができた役割は、後ろ向きになりそうな場面で、ポジティブな発言、姿勢を貫き通せたことである。また、多くのメンバーを見ていて実感したことは、誰かに負荷をかけ過ぎないように、少しずつ役割を変えていたことである。大なり小なり組織のリーダーは、上下からのプレッシャーを伴う。ここでは、周りの気づきと協力があれば、負荷分散が可能となることをあらためて学んだ。相手の意図・状況・背景を付度する力を養うことで、自分なりの役割をもつて互いに補完し合う関係を築くことができるのであろう。

4. 目指すべきありたい姿を描く

産政塾の同期生となった人たちは、思っていた通り、一方ならない人物ばかりで非常に学ぶところが多かった。例えば、清掃活動を30分実施した際にも、みな進んで分担場所をくまなく掃除していたし、大体済んでいても、手を休めることなく、最初に決めた場所以外も綺麗にしようと、何か楽しげ

に行なっていた。人間万物一様に泥臭いことを好んで行なう人たちがばかりではないと思うが、一見泥臭いことも、没頭して行なう過程でそこから気づくことも多く、一概に敬遠しては良くないと再認した。合わせて泥臭さとの対義語として、私自身は洗練という言葉をよく用いる。必ずしも対極の概念とは考えておらず、表裏一体、紙一重と考えている。洗練された人間になるには、泥臭いことをたくさん経て、他人の目から見ると洗練された雰囲気醸し出しているのだと思う。10年後の目指すべきありたい姿は、泥臭さと洗練さを併せ持ち、周りから信頼を得られる人間になることである。また、その時一定の地位にあったとしても、評論家にはなるまいと心に固く誓いたい。

5. 過去の自分を越える

最近思うことは、他人をベンチマークすることは重要であると思う一方、一番難しいことは、自分を知ることである。特に、過去の記憶を消して前に進むことはできず、常に過去の自分と戦っている。高校生だった頃、ラグビーに打ち込んだ。ラグビーは相手を倒すことはもちろん、相手を倒すにも自分の恐怖心をまずは克服しなければならないスポーツである。タックルをすれば痛い、痛いから少しよける、少しよけるからしつかり相手にぶつからず、余計に痛い。余計に痛いからタックルに恐怖心が生まれる。堂々巡りなのだが、負のスパイラルを断ち切るのは、思い切りの良さであり、気持ちを吹っ切り前に出ることでは解決しない。あの時一度逃げた苦々しい思い出がたまによりぎり、今の自分へ

の戒めとなっている。後悔先に立たずであり、過去の自分を常に越えていく、そこに新しい世界があると信じている。

「育てられる」について

1. 人として正しい道を体現している人物とともに存在場所を高めること

自分自身の経験上、育てられるためには、育てる人がおり、二人三脚で心を一つにして何かを成し遂げようとする中で、教え教えられ互いに学びを得ているのだと思う。今回塾長の全トヨタ労連東会長の高い志、そして塾生のためにご多忙のスケジュールの間隙をぬってメッセージを投げかけてくださるお姿を見て、私自身も正しい道を歩まねばと襟を正すことができた。師と仰げる人がその場にいないことは、育てられる環境の一つの要素である。そのような環境下で、人は正しい行ないを実践し、泥を塗らないようにという意識が働き、自分の存在場所を高めようと成長していくものだと思う。

2. 目先の利を追わず、泥を被ることを厭わぬ人物に教えを乞うことができる

会社においても同じことが言えるが、部下の目から見ると、いかに上司に目をかけられているか、

その上司が高い視点で物事を考え、実践し、部下の目線に立つて教えてくださるか、それらが育てられる環境の次の要素となる。上司も人間であり、時には体裁を保つために目先の利を追うこともある。しかし全般にわたっては、大局観をもつて判断し、もし、部下が間違った行動をしているのであれば、勇んで部下のために泥を被り、守るべきは守り、あるいは正すべきは正す。そうした日々のやり取りが、美しい師弟関係へと昇華していくのであろう。逆も真なり。自分への戒めとして、育てられた分、育てる義務があり、その循環が組織を強くしていくと心に刻んでいる。

3. 信じることを知り、互いのために役割を負える同志がいること

役割を補完し合うことは先に述べたが、人がその中で育てられるためには、信じることが条件である。信じるというと精神的に聞こえるが、互いに疑心暗鬼で役割は担えないだろうし、半端な成果しか出すことができない。15人いなければ、試合ができないラグビー同様、任せることは信じて任せる。また、自他の力を把握してこそ、信じることができる。信じて任せること、任せられること、互いに役割を負う同士がいることが、育てられる環境の最後の要素である。

最後に結びとして、会社では人材育成の機運を醸成する仕事に従事しており、重責を担っていると自負している。特に、新人研修においては、入社後最初に触れる社員の一人でもあり、研修制度の企

画立案の重要性もさることながら、壇上での話や普段の振る舞いに注意を払い、自分自身を高めていきたい。座政塾での経験を基に、人を育て、人が育てられる環境づくりを継続して行なっていきたい。

産政塾を振り返って



東海理化労働組合

山口 久雄

《プロフィール》

やまぐち ひさお

- 1972年12月 愛知県豊橋市生まれ
- 1995年4月 (株)東海理化入社
- 2002年9月 東海理化労働組合執行委員
- 2006年9月 東海理化労働組合書記次長
現在に至る

<家族>妻、長女（1歳）

<趣味>スポーツ観戦、ゴルフ

はじめに

今、塾誌作成のためにパソコンに向かっている。各回で参加した時のことを思い出しながらキーボードを叩こうとしている。振り返ればまだ2〜3カ月前のことだが、非常に昔のようなことのように感じている。単なる思い出で終わらなかつた経験ができたことは、自分にとつて大きな財産となつた。「殻の外へ踏み出そう」という産政塾のテーマどおり、踏み出せたかどうか、ここで振り返つてみたい。

第1回 開塾式（2008年1月23日）

産政塾第19期生として開塾式に臨む。場所はカバハウス会議室。もう半年以上前のことで記憶がぼやつとしているが、塾生皆自己紹介が非常にうまかつた印象が強い。すでにグループごとに座席が分かれており、自己紹介後グループごとで企画を考えることになつた。いつの間にかリーダーになつてしまい、仕切り役を行うことに。産政塾での企画を考える際、テーマ「殻の外へ踏み出そう」のコンセプトにあつた、やりがいのある企画である必要があるし、かといつて突拍子もない内容で実現不可能になつてもいけない。私はCグループだったが、結局最後の回の企画を行うことになつた。7月実施の企画なので時間があるように感じたが実際はあつという間だつた。

第2回 渭信寺を訪ねて「無の探求!!自らを見つめ直し、更なる成長へ」

(2008年3月26日)

開塾式から約2カ月、久しぶりの会合だった。その間、春とりやら何やらと目まぐるしく時間が過ぎてしまっていたが、ようやく産政塾の活動に参加できるという思いでいっぱいだった。と思いきや午前中どうしても出席しなくてはいけない会議が入ってしまった、当日は午後からの参加となった。

場所は岡崎の渭信寺。この回の企画は座禅を行い、「無」の感覚をつかみ、この回で感じたことを書にするとという内容だった。他の塾生がすでに「無」の境地になっているところをひとり雑念を持った男が入ってしまった、なぜか申し訳ない気持ちになってしまった。実際に座禅を組み、「無」になろうとすればするほど、いろんな「邪念」やどうしても良い記憶が蘇るから不思議だ。普段会社や家庭ではこのような「何もしない、何も考えない」という時間がない、というか取れないだけにこのひと時の体験は貴重だった。

その後自ら墨を磨り、今の心境を書に認めた。当時仕事で非常に忙しかったことやこの貴重な時間を持つことができた事などからその時の心境は「時は金」だった。(なぜかその次に「なり」を入れなかったかは、自分でもよく分からないが)今でも時は貴重なものであり、お金と同様少しも無駄にすることはできない、と思っっているがこの企画で改めてそう思うことができた。雑念を取り払うことができた回でもあった。

第4回 宮崎県の地域活性化の取り組みについて学ぶ（2008年6月12・13日）

業務の都合により、第3回の会合に行くことができなかった。

第4回の企画は1泊2日の宿泊の企画であるということと、宮崎県に行くということもあり、楽しみにしていた企画だった。

企画のねらい「地域活性化」という点では、宮崎県は他の地域とは違う事情がある。東国原知事が誕生し、知事自ら積極的に宮崎県や宮崎県の物産をアピールし、宮崎県の知名度を確実に上げたことは言うまでもないところだ。これまでは九州といつてすぐに思いつくのは福岡であり、また観光でいえば沖縄や長崎をイメージできるが、宮崎はなかなか思いつかない県だった。私自身宮崎県に行ったことがなく、どんな県かイメージが湧かなかつたのが正直なところである。

今回の企画では、初日は宮崎県庁、宮崎マンガの選果場、西の都酒造（焼酎造り）を訪ね、行政と地場産業それぞれ現在の自助努力している内容についてきくことができた。宮崎県庁では地域振興、市町村と一体となった地域づくりの取り組みについて県の職員の方からお話を伺った。特に職員の話からは、人口の減少を危惧されているようで、なんとか宮崎県に住んでもらい、人口を増やしていきたいという思いが強かった。また、東国原知事に会うというサプライズもあった。宮崎マンガの選果場では実際にマンガの選果の様子と栽培しているビニールハウスを訪れ、栽培をする上での苦労話を聞くことができた。一つひとつ丁寧に手間隙かけて「宮崎マンガ」というブランドを作り上げ

ていくことの大変さを知った。西の都酒造では、焼酎ができるまでの工程をひととおり見学することができた。職員の方の丁寧な対応が印象的だった。

2日目は宮崎県の北部に位置する高千穂町役場を訪れ、観光産業に取り組んでいる内容について聞くことができた。高千穂といえば神様の町であり、高千穂峡もあり、観光地として名高い場所だが、交通アクセスという点では利便性が良くないという印象だった。宮崎市からはバスで約2〜3時間かかったと思う。途中高速道路も使用しているが一部の区間であり、交通インフラが整備されていないと感じた。（だから高速道路が必要だ、ということではないが）高千穂町としては、東国原知事の言葉を借りれば「どげんかせんといかん」という気持ちで観光地として生き残るためのビジョンを掲げ、住民一体で独自の取り組みを行っていることが感じられた。

この企画を通じ、宮崎県の良さを体感することができた2日間だった。また「地域活性化」というのも、ただ村おこしだ、祭りだ、と派手なことを行うのではなく、地に足のついた活動を地道にコツコツと行うことが「活性化」につながるのだということを感じることができた2日間でもあった。

第6回 富士山に挑戦！富士山麓に塾生泣く（2008年7月27・28日）

第5回企画も残念ながら業務の都合により行くことができなかった。業務と重なり半分ぐらいしか行けないとは聞いていたが、自分もそうなるとは……。出れる回は全て出席したいと思っていただ

けに悔しい。

さて、いよいよ私たちCグループが企画する富士登山の回となった。この回の内容については既に産政研フォーラムに寄稿させていただいている（実は、同じグループの三田地さんに前半部を書いていただいている。）ので、ここではこの企画に至るまでの経緯を中心に触れたい。

Cグループは最後の企画を担当することになり、必然的に塾生皆が全員で成し遂げる達成感のあるものにしようということに開塾式の時の打ち合わせではまとまった。最後企画ということもあり、エンジンかけるのは4月頃からという感覚だった。4月になり、月に1回ペースで（お酒も入りながら）グループの会合を設け、企画を練ることとした。Cグループメンバー新金さん、荻野さん、三田地さん、吉清さん、そして産政塾事務局の松井さんには、忙しい時間の合間を縫って集まっていた。グループメンバー全員、Cグループの企画のコンセプトは共有し、いろいろな案が出てくるのだが、なかなかピンとくるものが見つからない。企画の難易度、費用、そして当然、産政塾の企画としてふさわしいかも考慮する必要がある。（テーマは後付になることもあるが）

2回目にグループで集まった時、どうせ塾生全員が達成感を味わうのなら、思い切って富士山に登るのはどうかという意見が出た。確かに日本一高い山に登るのだから聞こえは良いが、果たして実現可能なのか、という不安がよぎった。いろいろなことを想定する必要がある。途中で一人でも脱落者がでた場合、頂上をあきらめるのか、それとも、脱落者を山小屋に残して山頂を目指すのか。高山病になるのではないか。今回の塾生には4名の女性がいますが体力面で大丈夫なのか。そもそもこの企画

を他のグループの塾生は受け入れてくれだろうか。様々な不安や心配がつきまといつた。

例えば脱落者が出た場合、私はその時点で登山をやめるべきだという意見だったが、行くべきだという意見もあり、なかなかまとまらなかった。最終的にはその時の状況で対応することにし、富士登山の企画を行うことでまとまった。その後、プレ登山（猿投山&金華山）の実施や、登山のために必要な情報を塾生に伝えるなど、いろいろな手段を用い、「富士山全員頂上到達」を達成するためにできる限りのことを行なった。

結果的に目標達成することができたが、一歩間違えれば達成できずに終わっていたかもしれない。このような「殻を破った」企画だったからこそ、皆真剣に取り組めたのではないかと思うし、真剣に取り組めたことが成功に繋がったと思う。登山当日私たちを頂上まで導いていただいたガイドさんにも感謝を申し上げたい。

最後に

閉塾式が抜けているではないか、と思われるかもしれないが、なんと閉塾式にも出席できなかった。3回、5回、閉塾式と計3回出席できなかったことになる。

振り返れば、本当に「殻の外」に踏み出せたかどうか自分自身半信半疑なところが正直ある。しかし、35歳のこの年になって、座禅をくみ、宮崎県に行き、富士登山ができたという体験は、少なからず自

分の人生の幅を広げられたことは事実である。

今私たちを取り巻く環境は開塾式の頃とは一変し、大変厳しい状況になっているが、産政塾で学んだ「殻の外へ踏み出す」という精神を大事にし、様々な局面に立ち向かっていきたいと思う。

今回私たちを見守っていただき、支えていただいた東塾長、事務局の松井さん、そしてCグループのメンバーをはじめとする第19期塾生の方にはいろいろな面でお世話になり、この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございます。

産政塾の活動を振り返って



トヨタ自動車株式会社

吉 清 一 博

《プロフィール》

よしきよ かずひろ

- 1976年10月 大阪府枚方市生まれ
- 1999年4月 トヨタ自動車（株）入社
グローバル人事部に配属
- 2004年1月 人事部に異動
現在に至る

＜趣味＞ ゴルフ、ジョギング、
バスケットボール

□はじめに　　産政塾の活動を通じて

第19期産政塾は、中部産政研の東理事長（東塾長）に松井殿、そして東海地区の様々な企業・労働組合・自治体から集まった28名の塾生によって構成されていた。2008年1月の開塾式から8月の閉塾式までの8カ月間で、都合7回の会合・企画が実施されたが、今思えば、1月の開塾式の時には想像だにできなかった充足感を感じ得ることができた、本当に有意義な8カ月間だった。

私は、1999年4月に入社して以後、基本的にはずっと人事管理・労務管理の畑で過ごしてきた。その間、異動や結婚など、それなりに人生の変化点はあったが、自分自身の行動変容といった意味では、今回の産政塾での経験は何物にも優るものがあった。塾生の中には、「朝の通勤5kmを徒歩にした」「来年も富士山に登るため、トレーニングを毎日欠かさず行うようにした」など、中身は様々だが、産政塾に同じものを感じた者がたくさんいる。かくいう私も、この7月から生活のリズムを大きく変えてみた（今も継続している）。

後述するが、第5回の企画では、サッカーJリーグJ2「FC岐阜」のジェネラルマネージャーである今西和男様のお話を伺う機会があった。今西様は私たちに次のような言葉を贈ってくださった。

「心が変われば行動が変わる。行動が変われば習慣が変わる。習慣が変われば性格が変わる。性格が変われば人生が変わる。」

まさにこの境地である。「人生が変わった」と言うにはまだまだ修行が足りないが、心一つでこん

なにも生活や考え方に変化が生じるものかと正直驚嘆している。

産政塾の何が素晴らしいかと言うと、このように、変に凝り固まりつつある、私たちぐらいの世代の思考や生活や仕事への姿勢を一気に氷解してくれるところにある。産政塾の活動テーマは「殻の外に踏み出そう!」というものであり、10年以上、このテーマで活動をしてきたらしい。この8カ月間を振り返ってみると、殻の外に踏み出すべく活動を重ねた、というよりも、活動を終えてみれば殻の外に一步踏み出していた自分たちがいた、という方が近い。先輩諸氏はどのように思い活動していたのだろうか。もしかして私たちも同じ空気を味わっていたのではなからうかと、想像するだけでとても嬉しく思う。

□ 第1回 開塾式

1月23日(水)

8カ月間、7回に渡る産政塾の活動は、カバハウスで行われた開塾式から始まった。塾生互いが初対面であり、特有の緊張感が満ちていた。しかし、自己紹介やグループディスカッションが進むにつれ、不安は解消する。様々な組織から集まった塾生の皆さんは、全員が個性的かつ魅力的で、さして広くない人間関係の中でしか過ごしてこなかった私にとって、こうした異業種交流の場はとても新鮮なものだった。

東塾長が、「歴史を紐解き、情熱を持って、行動する。そのために、自らの意見を発信し、異なる

意見でも一旦受け止め、チームワークを醸成すること」と、私たちに對し、期待を込めて訓示された。東塾長は、8カ月間、私たち塾生を、時に鼓舞し、時に叱咤し、時には私たちと一緒に悩んでくださった、それでいて私たちの自主性を慮つてくださる、まさに「親父」のような存在だった。いずれにしても、開塾式とその後の飲み会を経て、東塾長と松井殿、そして28名の塾生が団結したのは間違いない。

□第2回 渭信寺で「無」を探求する

3月26日（水）

開塾式に次ぐ活動だったが、私は業務の都合で欠席（ドタキャン）した。岡崎市にある渭信寺を訪れ、70歳になる日比野住職からの法話を拝聴し、座禅や書を通じ、あらためて自分自身を見つめ直した（らしい）。第3回の間伐体験もそうだが、日常生活ではなかなか体験できないことに對し、極めて前向きに取り組むことができる、これが産政塾の魅力の一つ。

この日、私はドタキャンしてまで何をしていたのだろうか。スケジュール帳を見ても、今一つ思い出せない。こんなことなら、仕事の方を何とかすればよかったと、今更ながら自分の手際の悪さを後悔している。

□第3回 間伐体験を通じ、環境問題を考える

5月14日（水）

豊田市役所足助支所を訪れた。産業部森林課の原田課長と北岡主幹の講義を拝聴し、その後、間伐を体験させていただいた。この類のニュースを見聞きしない日はないぐらい、環境問題は身近なものになっている。今回の活動を通じ、正しい知識を身に付けること、そして実際に体験してみることが、どれだけこの問題を考えることに資するのか、とても考えさせられた一日であった。

・豊田市の7割が森林で、そのうち6割がスギやヒノキなどの人工林。戦後の木材需要の高まりから日本国中に人工林が作られたが、今やその多くが過密状態で、森林固有の水源涵養力が失われつつある。豊田市もほぼ同様の状態。

・森林事情は地域によつてまちまちであり、地方行政の担う役割は非常に大きい。その一方、林業の担い手の減少や個人所有地が多いという事情などから、間伐計画が合理的には進まない。

・自然に任せるのが唯一最適な方法である、あるいは、植えることは良いことである、という（偏った）概念を持つている人が多く、間伐体験などを通じ正しい知識を持つてもらおう取り組みが、地道だが重要。

なるほどである。

□第4回 宮崎県にて地域活性化の取り組みを学ぶ 6月12日(木)～13日(金)

泊まり企画である。毎年、泊まり企画には塾生の心が踊ると聞いてはいたが、ご多分に漏れず、そうであった。

初日、宮崎県庁にて、県職員の方から地域活性化の取り組みを伺った。東国原知事の出現で宮崎県がブームのようになってきているが、これを定着させることに一際ご苦労されている様子であった。県庁の廊下で東国原知事とすれ違った。私たちのようなミーハーな団体の一人ひとりに対しても、両手を差し出し、「宮崎県をよろしく!」とおっしゃっていた知事の丁寧なおもてなしの姿が忘れられない。その後、JA西都にて今やブランドとなっている宮崎の完熟マンゴーの取り組みを見学し、西の都酒造(株)にて芋焼酎の醸造工場を見学させていただいた。

翌日は、宮崎県の北西に位置する高千穂町を訪れた。天孫降臨で有名な神話の里である。かねてより一度訪れてみたいと思っていたこともあり、その神秘的な空気を十二分に堪能した。(高千穂町役場ですっかりと勉強もした)

この活動で関わりのあった宮崎県の方々は、全員が、自分の土地のことをどうやって他県の人に理解してもらうかを真剣に考え行動していた。翻って自分自身を思うと、仕事でも私生活でも、第三者に自分の考えを理解してもらうための努力が明らかに不足していると実感した、そんな第4回の活動であった。

□第5回 FC岐阜に物事を成し遂げる情熱を見る

7月9日(水)

岐阜市内の岐阜メモリアルセンターを訪れ、FC岐阜ジェネラルマネージャーの今西和男様と強化部長兼地域貢献推進部長の服部順一様が、J2のステージまで登りつめた軌跡を、苦労話・笑い話を交えて話してくださった。

先述のとおり、私にとっては、ここで伺った話は大変意義深いものだった。この日の夜の懇親会(毎企画、夜は飲み会である。これも非常に楽しい)には服部様もご出席され、塾生全員、大いに飲んだ。その余勢を駆って、私自身、この次の日から色々と生活のリズムを変えてみた。

□第6回 塾生全員で富士山登頂!

7月27日(日) ~ 28日(月)

私が属していたCグループの企画(第6回)は、誰の発案だったか定かでないが、富士登山となった。産政塾の活動である以上、ただの登山イベントになり下がってもいかず、登頂を果たせない者が多く出ても企画としては成り立たず、そういうわけで、7月末の富士登山本番までに、2つ3つ、トレッキング会(猿投山登山・金華山登山)を行うことにした。私を含め、ほとんどの塾生にとって、トレッキングシューズを履いてしっかりと登山に臨むような経験に乏しかったため、こうしたプレイ

ベントを通じ、登山の楽しさ・大変さを事前に少しは体得できたと思う。

そして迎えた富士登山当日。参加した塾生は21名。午後3時、屈強なガイドさんを先頭に、5合目を出発。午後11時、8合目の山小屋に到着し仮眠。翌午前1時、山小屋を出発し山頂へアタック。午前4時、見事に登頂！真夏だというのに気温2〜3度の中、皆、頭はガンガン、足は棒、という有り様だったが、1人たりともリタイアは出ず、全員で登頂を果たした。これだけの人数で全員が登頂というのは、ガイドさん曰く「滅多にない」らしい。

この富士登山の日に至るまでの数々の活動を通じて醸成されていた塾生間の絆は、全員が無事に下山を果たした時、より一層強固なものになっていた。

□やろいっ 〜第7回閉塾式（8月21日）を経て

カバハウスで行われた閉塾式で、東塾長が「リーダーとは」について話をされた。東塾長はほとんどの企画に参加されていたが、いつも私たち塾生に対し、リーダーとしての素質を磨くよう、示唆してくださっていた。塾生のほとんどが同世代であり、皆、組織の中堅・中核として、リーダーシップをもって成果発揮することを期待されている年次である。だからこそ、同じようなことに悩みを抱き、同じようなことに感動を覚える。

私自身、三十を超えて立つことが本当にできているのかよく分からないが、ここでの貴重な経験や

素晴らしい人間関係を糧に更に成長することで、今回の機会を与えてくださった産政塾ならびに職場の皆さんに少しでも恩返しせねばと思っている。そのために、些細なことだが、先ずは心地よくなってきた今の生活リズムをまた少し変えてみるとする。

最後に、東塾長はじめ第19期産政塾の皆さん、ならびに職場の皆さん、大変お世話になりました。本当にありがとうございます。そして、最初から最後まで、陰から日向から、私たちの活動を支えてくださった松井殿には格別の謝意を申し上げ、有意義であつた産政塾の活動を終わりたいと思う。

以上

『第 19 期産政塾の感想』

産政塾事務局

松 井 英 治

第19期産政塾が終了した。そして、私にとって最後の産政塾の運営となった。思い返すこと4年前、ここに派遣されたときに、当時の理事長から、3つのアドバイスをいただいた。1つ目は、出身企業に何かを持ち帰る。2つ目は自分自身が成長する。3つ目は人間関係を広げる。この産政塾は3つ目の人間関係を広げる絶好の機会であった。産政塾を通じ、おかげさまで、第16期 24名、第17期27名、第18期25名、第19期28名と計104名との出会いから、さまざまなことを学ぶことができた。

振り返ると、1年目は事務局として企画実現に向けてここまで関与すべきか迷いがあった。今でも忘れない。事務局として正論???をもとに苦言を呈し、かなり難航した企画があった。塾生から「正論はわかるが前に進まない事情がある。」と言われた。気まずい雰囲気の中で、グループ論議に参加し、お互い向き合い本音で論議した。論議することにより不思議に、皆が何に悩んでいるのか、次に何をすべきか、そして事務局として何ができるのかわかってくる。この苦い経験からお互いが向き合い論議する大切さを改めて認識した。その教訓を活かし、2年目以降はグループ論議にはできる限り参加した。事務局2年目は、会合をやりとげた後の塾生みんなの喜ぶ姿を見て、私自身、産政塾に行くのが楽しくなり、また元気を与えられた。事務局としてではなく、塾生の喜ぶ姿を見たい、何とかみんなで殻を破りたいという強い思いを感じるようになった。事務局3年目は、組織は個人の集団であり、個人それぞれが自分で考え、正しく行動することが大事であることを改めて認識した。企画立案が思い通りに進まなかったら行動力のある人が先方との調整をしたり、遅れが発生したら次の案を考え持ち込んだりするなどそれぞれが自らで考え・行動していた。ようやく、事務局として、周りが見えて

きた時期でもあったのであろう。そして今期は事務局として最後の年となった。

さて、産政塾は、入社して10年前後、一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力もつきつつある異業種の若者が集い、『殻の外へ踏み出そう』をテーマに、人材交流する場である。

今期の企画を振り返ってみると、

【第1回】

『殻の外へ踏み出そう』とする同じ目的を持った総勢28名が、初めて顔を合わせた。はじめに、東塾長から『歴史を知ること。情熱を持つこと。そして行動すること。』とのお言葉から今期の産政塾が始まった。ご存知のように、この産政塾は、若手異業種人材の場として、1990年から『産政塾』を設立し、今期で第19回を迎える歴史のある取り組みである。これまでの塾生はなんと390名となる。今期も、意欲溢れる熱い人材が集まり、活動のスタートを切った。さあ、第2回以降は、塾生の発案による企画を皆で実行し熱い心を燃やすことになる。

【第2回】

この会合では、第19期産政塾をスタートするにあたり、固定概念・雑念などを取り払い、『殻を破る』に挑戦する姿勢を培うことにした。当日は、全員で座禪を組みながら、生涯現役を貫く70歳になる日比野住職から重みのあるお話をいただいた。人生一度であり、自らの幸せになるためには、①自らが何事も本気で取り組まなければならない②周りの幸せを考えること。それが自らの成長の糧になり自らの幸せにも繋がることを改めて認識した。その後、塾生で、自らで墨を磨り、今回の活動で感じたことや、そのときの思い・気持ちを書にした。そして、その書に込めた思いを語り、皆で共有化を図った。みんな自らの思いを、素直な気持ちでそれぞれの言葉で表現していた。皆が素直に語る言葉により塾生間の距離が縮まったと思えたし、それぞれの異なる人生を生きてきたのだと、少し感慨深くなった。何よりも、真剣にこの産政塾に取り組む塾生の姿勢を見て、今年も楽しくなるぞと確信した。

純粹に真剣に取り組むことは、殻を破る条件であるう。

【第3回】

この会合では、『地球を守る、着実に行動を起こす!!』というテーマで、豊田市役所足助支所を訪ね、間伐を体験することで環境維持の大変さを体感し、環境問題について考える機会とした。森林と聞け

ば、緑豊かで自然いつぱいの景色をイメージする。またインターネットで環境を検索すると、植樹活動が多くヒットする。しかし豊田市はじめ多くの地域では、人工林の過密状態にある。その理由は、多くの収入を得ようと木材生産に力を入れてきたものの、木材の値段が30年前とほとんど変わらないことから経済合理性に見合わず成り行きにまかせてきたからだという。いまだ植えることは良いこと・伐ることは悪いという概念を持っている人も多く、なかなか伐ることの重要性について理解が進まないようだ。市民の安全・安心を守るためにも間伐は重要なのである。間違った行動をとらないためにも、正しい知識を知ること・伝えることの大切さを改めて認識した。また、自分の耳と目で見て実態を把握することの重要性を痛感した。

知識を学び、そして経験を積むことは、殻を破る条件であろう。

【第4回】

この会合では、『宮崎県の地域活性化の取り組みを学ぶ』というテーマで、東国原知事誕生で活況を帯びている宮崎県を訪ね、地域活性化の取り組みを現地・現物・現認し、私達の住む町づくりについて考える機会とした。県庁職員によると、「県民との話し合いを重視し、県民の声に耳を傾け自らの言葉で語りかける知事により、引っ込み思案な県民が『これはできん』から『どげんかせんといかん』へと意識が高まり、県民みんなの知恵を出し合う機運が生まれてきた。」という。実際に、地域

の取り組み現場を訪ねたが、行く先々、笑顔で出迎えてくるなどおもてなしの心が県民まで行き届いており、かつ自らの良さに誇りを持ち宮崎の魅力をアピールしていた。宮崎の底知れぬパワーを感じた。これは職場でも同じなのである。何かを変えよう、改革しようと思うなら、理屈は必要だが、人間は理屈だけでは動かない。やはり、自らの熱い思いを表現し相手に伝え、人の心を動かさなければならぬ。まさに改革をする上で意識改革が求められるゆえんである。東塾長はいつも会合の終わりに、我々に自らの言葉で語ってくれる。すると、会合の雰囲気が変わる。やらなければいけないという心にさせられるのである。人の心を動かせる、これこそ真のリーダーであろう。

強い思いを持つことは、殻を破る条件であろう。

【第5回】

この会合では、『すべての始まりは“情熱”から』というテーマで、FC岐阜を訪ね、情熱の源を探り、自らの心に更なる情熱を燃やす機会とした。FC岐阜の今西GMより、長年の実体験をもとにしたリーダーの心得や今後の人生を充実するための貴重なお言葉をいただいた。今西GMや服部部長のお話の中で、「結果を求める前にやることはある。自らができることをコツコツとやりとげること。たとえば結果がでなくても、そうした経験は次につながる。」「負けん気は大事。でも切れてはいけない。たとえ自分の考え方と違う人がいたとしたら、自らのやり方で勝負すれば良い。うまく行かないことを環

境のせいにするな。」「迷わずがむしやりにやれ。」の言葉は私にとってとても印象的であった。この時期は、私自身、早く結果を出したい・認められたいと、焦っていた時期でもあった。根っからの負けず嫌いの相まって、うまく行かないことに対して、環境のせいにするなど愚痴を言ってしまうこともよくあった。しかし、良く考えれば、それでは何も変わらないのである。先を見据えることも大事。でも自分ができる以上のことはできないことを踏まえれば、やれることをひたむきにやっていく。それが積もれば、自分ができる水準もあがっていく。そうすることの積み重ねが成長につながり、さらに結果にもつながっていく。まず自分ができること、コツコツと一生懸命にやりぬくことが大事であることを改めて痛感するとともに、『努力が足りない。もつと努力しよう。』と意欲を掻き立たされた。

まじめにコツコツと努力することは、殻を破る条件であるう。

〔自らで人生を変えた今西GMからの激励のお言葉〕

心が変われば行動が変わる。

行動が変われば習慣が変わる。

習慣が変われば性格が変わる。

性格が変われば、人生が変わる。

【第6回】

この会合は、第19期塾生にとっても私にとっても、最後の企画である。さまざまな刺激を受けながら共に学んできた集大成として、皆で本気で何かに挑戦し、真に殻を踏み出そう！ということで、富士山に皆で挑戦することにした。チャレンジするには一定のリスクも存在する。万が一、登れなかった場合、必要以上に責任を感じる人や、無理をしてしまい病気になってしまう可能性もある。そうした心配から、登るまでのプロセスを重要視しようと、企画グループにより近辺の山で事前練習会を実施した。これが功を奏し、全員のモチベーションが高まるとともに、本音が言える仲に近づいた。何より、企画グループのそうした配慮が嬉しかった。いざ登山。あれだけ遠くに見えた富士山頂上であったが、苦しいながらも確実に歩を進めることで、見事、参加者全員が登頂した。その過程では、苦しい中でも皆で頑張ろうと声を掛け励まし合いながら、氣力を振り絞り歩き続けた。おそらく、皆が同じ思いを共有しなければ、全員が歩き続けることはできなかったであろう。『皆でやろう!!』それは、プレッシャーにもなるが、『皆のために、皆で喜びを感じよう』と大きなパワーにもなる。産政塾を設立した当時の理事長によると、次世代のリーダーの育成することが設立の趣旨であったが、リーダーの育成というよりはここで経験した熱い心を職場に広げ同じ思いを持つ人を増やすことにより、職場の雰囲気を変えることが目的であったという。

一歩踏み出すこと、そして同志を増やしていくことは、殻を破る条件であろう。

【第7回】

最後に、『殻とは何か』、『殻の外へ踏み出すためにはどうすればよいのか』、そして『今後の決意』を皆で論議した。みんな、自らの言葉で純粹に述べた。それは各塾生の塾誌に任せるとして、この経験はどう生かすか、自分の決意を以下にて示す。

1. やさしさと感謝の気持ちを持ち続けること

この変化の激しい時代に、やさしさだけでは生き残ることは難しいのかもしれない。しかし、自分が悩んでいるときに熱心に話を聞いてくれる人ほど、ありがたいものはない。この4年間も多くのことに悩んだ。幸い、私の周りには親身に相談にのってくれる人がいた。この人は、人がいやがることも一生懸命に取り組み、また自分のことより他人のことを優先する人であった。その人に感謝するとともに、自らも相手の欲していることを理解し取り組む!!これができなければ、産政塾の事務局をやった4年間は意味がない。

2. 学習し学び続けること

このことは、中部産政研に来て、一番感じた。中部産政研の諸先輩方は、何かを学んでやろうと、

熱心に研究に取り組まれていた。知識と経験ともに少ない私が学習しなければ、さらに差がひろがる。何より、知識があれば関心を持ち、もつと知ろうとする。それが行動への第一歩にもつながる。新たな発見を楽しむに、学習に取り組む!!

3. まじめにコツコツと努力を続けること

環境のせいにせず、もう少し努力が足りないのだと踏ん張る。自らの強みは、負けず嫌い。絶対にあきらめない!!

4. 必ず一步を踏み出すこと

自らの言葉で語ってくれた東塾長の言葉が耳から離れない。『必ず動け!!』。一步踏み出さなければ何も始まらない。千里の道も1歩から。

◆第19期 産政塾の皆さんへ

本当に真剣に取り組んでいただいたことに対し感謝する。この産政塾は企画内容が云々ではない。皆が真剣に取り組むからこの産政塾は面白いものになる。産政塾の事務局をして、何が良かったかといえば、塾生から、『楽しかった。』と言われたことである。企画実現に向けて、皆が本気になり取り

組んだからこそこの言葉がでくると思っている。一見、周りから見ると、楽しいとは何事だ。遊びだとも言われるかもしれない。でも違う。どの塾生も純粹に一生懸命にやってくれた。企画会合が終れば、企画グループに「良かった、楽しかった。」と声をかけ、そして企画グループからは「次の会合楽しみにしているから、頑張ろうね。」と声が掛けられる。皆、損得勘定なしに取り組んでくれた。なぜなのか、塾生に聞いてみると、『皆に参加してもらう以上、より良いものにしなないと申し訳ない。皆で実行し喜びを分かち合いたい。』という。また『実は、会議があつて参加できない企画もあつたのですが、先期の塾生から休むのはもったいない。私が変わつて会議に参加するから、産政塾に参加してくださいと言われた。だから僕は一生懸命やらなければいけない。』という。人と人のつながり（皆のために、自分のために）がこの産政塾を作っているのだと改めて認識した。また同じ思いを持った人が職場に広がってきていることがわかり嬉しく感じた。引き続き、同志を広げていつて欲しい。最後の閉塾式のときに抱き合つて喜び合う姿はとてもまぶしかった。このメンバーで取り組めたことに対し感謝する。ここでの出会いは何かの縁である。今後もこのつながりを大切にしていきたい。また、業務でなかなか参加できなかった塾生には、本当に申し訳ございません。でも今度こそ、全員で会合を実現し、熱い思いを共有しよう!!

この4年間、無事成功に終わったのも、多士済々たる104名の塾生がいたからこそである。これまでの活動に感謝するとともに、それぞれの職場で、より一層ご活躍を楽しみにしています。

最後に、ご多忙の中、業務のスケジュールを調整し参加いただいた塾生の皆様、また送り出していたいただいた職場の皆様、そして企画を実行する上で大変お世話になった関係各位には、この場をお借りしてお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

産政塾活動記録

《第1回》

期日：2008年1月23日（水）

場所：カバハウス

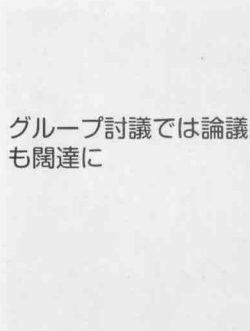
内容：第19期産政塾開塾式、
塾長挨拶、塾生自己紹介、
グループディスカッション
懇親会



第19期産政塾に集った塾生



東塾長より塾生へ激励
の言葉



グループ討議では論議
も闊達に



各リーダー、企画への
熱い思いを語る

《第2回》

期日：2008年3月26日（水）

場所：渭信寺

内容：「無の探求！！自らを見つめ直し、更なる成長へ」

講話、坐禅、書道、懇親会



日比野住職からの法話を聞きながら、坐禅
：人生一度きり。だからこそ自らが考え自らの道を
一生懸命に歩め。幸せになろう！！



墨を磨りながら自らの思いを書に!!



書に込めた思いを皆で共有化する

《第3回》

期日：2008年5月14日（水）

場所：豊田市役所足助支所

内容：「地球を守る、着実に行動を起こす」

講話、間伐体験、ベンチづくり、討論、懇親会



間伐を体験

：実際に森に入り、間伐を体験した。間伐の大変さを体感することになった。



豊田市役所足助支所の
原田課長と北岡主幹に
よるご講演

：市民の安全・安心を
確保するために人工林
の伐採の必要性を教え
られる



間伐材を利用しベンチ
づくり

：出来上がったベンチ
は木材の持つ特性に加
え、皆のぬくもりを感
じるものとなった



全員で論議

：正しく情報を知るこ
と・伝えること、現地
現物現認の大切さを改
めて認識

《第4回》

期日：2008年6月12日（木）・13日（金）

場所：宮崎県

内容：「地域活性化の取り組みについて学ぶ」

講話、施設見学、討論、懇親会



県庁をバックに記念写真



宮崎県庁を訪ね、大坪様はじめ県職員の方達から宮崎県の将来ビジョンとプロセスについて、伺った。

地域の声に対し自らの言葉で答える知事により、引っ込み思案の県民が「これはできん」から「どげんかせんといかん」へと意識が高まり、県民みんなの知恵を出し合う機運が生まれた。

マンゴの選果場とハウス
を見学

：多くの方においしいものを食べさせたい！！ブランド力向上の鍵



「地域活性化について
皆で論議

- ①町の良さを引き出し
伸ばすこと②地域活性化のキーワードは人、
人とのつながり
- ③一人ひとりが小さな
ことから始めよう

《第5回》

期日：2008年7月9日（水）

場所：F C岐阜

内容：「夢に向かって挑戦する姿勢から『情熱』を学ぶ」

講話、皆で運動、討論、懇親会



F C岐阜の今西GMより長年の実体験をもとにした講話

- ：①話を聞いてあげること。相手の欲していることを理解すること。
②役割を持たせ、勝たせてやる。そして試合に出してやること。組織の求心力に。
③結果を求める前に自らがやるべきことをしっかりやること。
④負けん気は大事。でも切れてはいけない。
⑤迷わず、がむしゃらに。



服部GMの指導のもと、運動を実施

：ゴールを入れた瞬間は、抱き合い皆で喜びを味わった。その姿は無邪気であつたが、とても輝いていた。



今西GMからの激励の言葉を胸に、前向きな気持ちを持って
果敢に行動し自らの人生を充実なものにしていくことを誓った。

《第6回》

期日：2008年7月27日（日）・28日（月）

場所：富士山

内容：「皆で富士山に挑戦 ～富士山麓に塾生泣く～」
情熱を持って皆で行動



富士山頂上にて記念写真

：下から見るとあれだけ遠くに見えた富士山であったが
苦しみながらも一歩踏み出すことにより、見事全員が登頂



いざ、出発。富士山に
挑む

雷雨に見舞われる中
で、気力を振りしぼり
前進



皆さんの旅はまだま
だ続きます。お互い
それぞれの道で頑張ろ
う!!

《第7回》

期日：2008年8月21日（木）

場所：カバハウス

内容：第19期産政塾閉塾式

「殻の外に踏み出そう」について討論懇親会



皆さんお疲れ様です!! 今後のますますのご活躍を期待しております。
(頑張ろう!! 頑張ろう!! 頑張ろう!!)



東塾長による贈る言葉

「殻の外に踏み出そう
について」 グループ
議論



今後の決意を語る

産政塾歴代卒業生

※組織名は参加当時の名称

第2期生 (14名)

朝位 克 トヨタ自動車(株)
 伊藤 哲 全トヨタ労働組合連合会
 太田 雅也 名古屋鉄道(株)
 大町 重人 アイシン精機(株)
 桑山 幸次 (株)東海銀行
 小西 正晃 日本電装労働組合
 高橋 恭弘 トヨタ自動車労働組合
 種市 章 豊田合成(株)
 丹羽 漸 中部電力(株)
 松下 恭規 日本電装(株)
 水野 和明 全松坂屋労働組合
 水野 真二 アイシン労働組合
 山内 潔 トヨタ車体(株)
 萬谷 孝之 (株)松坂屋

第1期生 (14名)

江口 光市 全トヨタ労働組合連合会
 尾関 勝隆 (株)松坂屋
 加藤 宏幸 日本電装(株)
 甲村 正男 トヨタ車体労働組合
 清水 和博 松坂屋労働組合
 鈴木 智博 中部電力(株)
 高木 英樹 名古屋鉄道(株)
 土屋 昇大 (株)東海銀行
 中山 直人 トヨタ自動車労働組合
 平野 富広 日本電装労働組合
 本田 文利 豊田合成労働組合
 前沼 聡 アイシン労働組合
 宮崎 直樹 トヨタ自動車(株)
 安井 雅章 アイシン精機(株)

第4期生 (16名)

北村 直久 日本電装労働組合
 竹内 順治 豊田合成労働組合
 朝日 和寛 日本電装(株)
 田中 義和 トヨタ自動車労働組合
 村田 滋 (株)東海銀行
 沢田大八郎 豊田自動織機労働組合
 原 年幸 トヨタ自動車(株)
 中村 武司 アイシン精機(株)
 宮坂 和行 松坂屋労働組合
 山田 法夫 名古屋鉄道(株)
 秋葉 覚 中部電力(株)
 駒沢 修 アイシン労働組合
 岡 啓視 中部電力労働組合本部
 加藤 秀夫 トヨタ車体労働組合
 松野景之介 トヨタ車体(株)
 相原 康伸 全トヨタ労働組合連合会

第3期生 (14名)

石鍋 寿久 トヨタ自動車労働組合
 大島 一峰 アイシン精機(株)
 大西 勝彦 豊田自動織機労働組合
 神谷 直 アイシン労働組合
 岸田 竜茂 中部電力(株)
 雲井 浩 丸栄労働組合
 近藤 郁也 トヨタ車体(株)
 島川誠一郎 トヨタ自動車(株)
 関谷 俊司 日本電装(株)
 竹下 裕之 トヨタ車体労働組合
 塚本 和宏 全松坂屋労働組合
 遠山 泰弘 日本電装労働組合
 深谷 修 豊田合成(株)
 宮川 学 名古屋鉄道(株)

第 6 期生 (15 名)

林 恭吾 丸栄労働組合
 竹内 秀明 中部電力(株)
 近藤 均 トヨタ車体(株)
 光岡 博 アイシン労働組合
 向井 克行 日本電装(株)
 説田 公人 トヨタ自動車(株)
 中村 文彦 松坂屋労働組合
 高橋 誠 トヨタ自動車労働組合
 本田 武志 アイシン精機(株)
 伊藤 裕章 豊田合成(株)
 大島 秀一 名古屋鉄道(株)
 森 晴哉 日本電装労働組合
 横田 晴充 (株)東海銀行
 桑山 完治 中部電力労働組合本部
 石川 勝幸 全トヨタ労働組合連合会

第 5 期生 (17 名)

斉藤 正彦 丸栄労働組合
 橋本 亨 トヨタ車体(株)
 田島 健一 松坂屋労働組合
 稲川 敦之 名古屋鉄道(株)
 荒谷 育三 日本電装(株)
 高井 信弘 豊田合成(株)
 長尾 基晴 アイシン精機(株)
 洲崎 典之 日本電装労働組合
 渡辺 潔 アイシン労働組合
 上田 信也 全トヨタ労働組合連合会
 杉浦 一成 トヨタ車体労働組合
 内田 厚 中部電力労働組合
 加藤 泰孝 中部電力(株)
 荻野 勝彦 トヨタ自動車(株)
 加藤 昭夫 トヨタ自動車労働組合
 磯部 謙二 日本特殊陶業(株)
 二木 芳樹 (株)東海銀行

第8期生

(22名)

有賀 文昭 中部電力労働組合
 伊藤 賢一 トヨタ車体(株)
 伊藤 友博 松坂屋労働組合
 岩城 史憲 名古屋鉄道(株)
 植松 良太 全トヨタ労働組合連合会
 粕谷 浩二 豊田市役所
 川村 淳一 豊田工機労働組合
 栗栖 秀人 (株)東海理化
 佐野 弘忠 中部電力(株)
 杉浦 公紀 アイシン労働組合
 中條 喜之 (株)デンソー
 所 秀樹 関東自動車工業(株)
 丹羽 広志 豊田合成労働組合
 根本 恵司 トヨタ自動車(株)
 服部 健司 デンソー労働組合
 早川 範一 (株)松坂屋
 廣瀬 登 (株)東海銀行
 船戸 正巳 アラコ(株)
 前田 孝広 丸栄労働組合
 前田 直人 トヨタ車体労働組合
 百瀬 和典 トヨタ自動車労働組合
 森本 浩二 アイシン精機(株)

第7期生

(17名)

川村 博隆 アイシン労働組合
 阿久津正典 豊田市役所
 村瀬 俊 日本電装(株)
 河路 直人 豊田合成労働組合
 小林 雅昭 全トヨタ労働組合連合会
 臼井 満 松坂屋労働組合
 星野 悟 中部電力(株)
 柴田 伸彦 中部電力労働組合
 小倉 克幸 トヨタ自動車(株)
 勝美寿美子 アイシン精機(株)
 西田 明生 トヨタ自動車労働組合
 高橋 剛 日本特殊陶業(株)
 吉田 茂 トヨタ車体(株)
 三川 高市 丸栄労働組合
 高井 康之 (株)東海銀行
 吉川 篤史 名古屋鉄道(株)
 田中 英司 日本電装労働組合

第10期生

(21名)

石川 輝彦 アイシン労働組合
 奥田竜太郎 トヨタ車体(株)
 糟谷 道広 (株)デンソー
 門 孝裕 松坂屋労働組合
 川上 茂浩 中部電力(株)
 小坂 好伸 アイシン精機(株)
 近藤 理史 豊田市役所
 杉本 道男 日本特殊陶業(株)
 鈴木 亨 トヨタ車体労働組合
 鈴木 康紀 アラコ(株)
 高橋 勝将 デンソー労働組合
 丹下 隆吉 トヨタ自動車(株)
 徳増 達生 アスモ(株)
 戸田 覚 (株)東海銀行
 西井 俊哉 丸栄労働組合
 船間 淳也 名古屋鉄道(株)
 松田 斉 全トヨタ労働組合連合会
 武藤 成洋 豊田合成(株)
 安田 幸治 トヨタ自動車労働組合
 矢田 勝弘 フタバ産業(株)
 常 兆 名古屋大学

第9期生

(21名)

足立 貴彦 松坂屋労働組合
 石井 直生 トヨタ自動車(株)
 伊藤 裕介 豊田工機労働組合
 宇野 庄一 全トヨタ労働組合連合会
 江口 淳 豊田合成(株)
 見城 篤 中部電力(株)
 榊原 悦人 丸栄労働組合
 坂口 登 (株)東海銀行
 柴田 徹哉 豊田市役所
 須崎 辰彦 トヨタ車体労働組合
 玉木 健二 中部電力労働組合本部
 恒川 智行 アイシン労働組合
 中出 裕之 関東自動車工業(株)
 浜口 誠 トヨタ自動車労働組合
 林 克憲 (株)デンソー
 平岡 典明 アイシン精機(株)
 古川 豊 日本特殊陶業(株)
 本多 篤 トヨタ車体(株)
 前川 武治 デンソー労働組合
 山田 泰準 名古屋鉄道(株)
 山本 雅章 アラコ(株)

第 12 期生 (22 名)

内田 幸代 豊田市役所
 江尾 国博 名古屋鉄道(株)
 梶川 拓也 中部電力(株)
 柏谷 幸彦 豊田合成(株)
 加藤 秀人 トヨタ車体労働組合
 後藤 泰司 丸栄労働組合
 近藤 雅人 (株)豊田自動織機
 高橋 正典 デンソー労働組合
 武田 純康 トヨタ自動車労働組合
 竹中 隆志 松坂屋労働組合
 鶴見 実男 アイシン労働組合
 寺西 知雄 東邦ガス労働組合
 中里 浩一 (株)U F J 銀行
 中村 明史 中部電力労働組合本部
 芳賀 章弘 トヨタ車体(株)
 長谷部知英 フタバ産業(株)
 羽根 章人 アラコ(株)
 本田 隆英 アイシン精機(株)
 松尾 正樹 (株)デンソー
 水野 勝博 全トヨタ労働組合連合会
 村瀬 政彦 トヨタ自動車(株)
 若松 真理 全ユニー労働組合

第 11 期生 (25 名)

池浦 芳一 トヨタ車体(株)
 石本 誉 デンソー労働組合
 板倉 智宏 全ユニー労働組合
 上別府伸一 アイシン労働組合
 大畠 隆之 (株)豊田自動織機
 岡本 雅典 アスモ労働組合
 小野田和広 丸栄労働組合
 柴田 博 フタバ産業(株)
 締次 顕治 松坂屋労働組合
 常 兆 名古屋大学大学院 国際開発研究科
 杉下 昌明 東邦ガス労働組合
 大東 輝彦 (株)東海銀行
 高木 敏光 名古屋鉄道(株)
 高田 学 アイシン精機(株)
 滝野 仁 日本特殊陶業(株)
 武田 和則 中部電力労働組合本部
 鶴岡 光行 トヨタ自動車労働組合
 中村 英行 アラコ(株)
 林 賢士 豊田合成(株)
 三谷 建介 中部電力(株)
 武藤 俊和 トヨタ車体労働組合
 森 崇博 全トヨタ労働組合連合会
 山崎 一生 トヨタ自動車(株)
 横井 雅弘 (株)デンソー
 渡辺 明子 豊田市役所

第 14 期生

(22 名)

浅野 清輝 東海理化労働組合
 大川 博 デンソー労働組合
 奥 丈治 株式会社松坂屋
 梶田 進 トヨタ車体株式会社
 梶原 昭二 豊田自動織機労働組合
 川崎 貴之 株式会社デンソー
 栗原 尚子 アイシン精機株式会社
 小嶋 直樹 松坂屋労働組合
 佐藤 源信 アラコ株式会社
 白井 崇夫 刈谷市役所
 鈴木 輝行 全トヨタ労働組合連合会
 鈴木 利幸 中部電力労働組合
 苑田 隆之 中部電力株式会社
 千種 徳充 トヨタ車体労働組合
 柘植 孝悦 豊田市役所
 長岡 享史 トヨタ自動車株式会社
 藤原 誠二 アラコ労働組合
 堀田 大祐 名古屋鉄道株式会社
 山口 健 トヨタ自動車労働組合
 山下 邦彦 アイシン労働組合
 吉田 研太 株式会社豊田自動織機
 渡辺 憲司 丸栄労働組合

第 13 期生

(21 名)

井上 正勝 トヨタ自動車労働組合
 内田 恭介 中部電力労働組合本部
 梅田 清孝 フタバ産業(株)
 太田 正樹 松坂屋労働組合
 門井 徳孝 デンソー労働組合
 熊崎 俊哉 トヨタ車体(株)
 佐野 智弘 アイシン精機(株)
 鈴木 定晴 トヨタ車体労働組合
 鈴木 武 名古屋鉄道(株)
 田中 亘人 (株)豊田自動織機
 多和田光紀 豊田市役所
 出口 隆浩 全トヨタ労働組合連合会
 中川 年史 アイシン労働組合
 野坂 利次 トヨタ自動車(株)
 服部 淳二 豊田工機労働組合
 水野 雅通 アスモ労働組合
 宮城 英樹 (株)デンソー技研センター
 村口 文希 刈谷市役所
 森 章浩 (株)U F J 銀行
 森 勝 東邦ガス労働組合
 山本 徹真 アラコ(株)

第16期生

(24名)

青山 泰孝 全ユニー労働組合
 赤川 直也 トヨタ紡織労働組合
 安東 英二 松坂屋労働組合
 大橋 弘章 中部電力株式会社
 小川 恵孝 トヨタ紡織株式会社
 加藤 基成 株式会社豊田自動織機
 小西 圭造 トヨタ自動車労働組合
 小林竜太郎 デンソー労働組合
 酒井 推幾 豊田工機労働組合
 佐宗 晋治 アイシン精機株式会社
 佐々 慎治 トヨタ車体株式会社
 高橋 鉦二 トヨタ自動車株式会社
 竹下太一郎 全トヨタ労働組合連合会
 田中丸 庸 株式会社デンソー
 富田 晃弘 名古屋鉄道労働組合
 中根 陽造 東邦ガス労働組合
 中野 将 豊田市役所
 服部 敦哉 豊田自動織機労働組合
 番条 喜芳 中部電力労働組合
 平野 元章 刈谷市役所
 宮川修一郎 フタバ産業株式会社
 山口 覚 アイシン労働組合
 吉續 武俊 トヨタ車体労働組合
 吉原 昭浩 株式会社松坂屋

第15期生

(25名)

池田 真生 刈谷市役所
 石原 英児 名古屋鉄道労働組合
 海野 孝宏 アイシン精機株式会社
 越田 弘幸 松坂屋労働組合
 大河原宏樹 アラコ株式会社
 大橋 一之 全トヨタ労連組合連合会
 片山 伸子 豊田市役所
 倉沢 範行 中部電力労働組合
 洲崎 浩一 アイシン労働組合
 洲崎 晃嘉 豊田合成労働組合
 千田 路征 トヨタ車体労働組合
 立松 学 トヨタ自動車労働組合
 棚橋 克成 株式会社松坂屋
 奈須 克昭 トヨタ車体株式会社
 野々垣 一 株式会社豊田自動織機
 早矢仕 環 豊田工機労働組合
 原 誠治 アスモ株式会社
 藤牧 知広 中部電力株式会社
 別宮健一郎 丸栄労働組合
 水越 宏明 デンソー労働組合
 山浦 宏行 トヨタホーム株式会社
 山添 勇人 株式会社デンソー
 山本 浩晃 全ユニー労働組合
 吉川 浩二 豊田自動織機労働組合
 吉本 雅教 トヨタ自動車株式会社

第 18 期生

(25 名)

餐場 裕樹 東邦ガス株式会社
 浅井 克弥 丸栄労働組合
 稲垣 隆宏 東邦ガス労働組合
 大倉 吉貴 トヨタ紡織株式会社
 太田 洋純 名鉄労連
 河野 成康 アイシン労働組合
 北原 航太 株式会社東海理化
 金原 昭仁 豊田市役所
 作山 淳 トヨタ自動車株式会社
 佐藤 正樹 松坂屋労働組合
 島田 裕毅 株式会社デンソー
 白井 雅子 アイシン精機株式会社
 鈴木 雅司 トヨタ車体株式会社
 高橋 弘行 中部電力労働組合
 田中栄太郎 デンソー労働組合
 中川 利文 中部電力株式会社
 早川 啓太 刈谷市役所
 平賀 隆 全トヨタ労働組合連合会
 広田 真朗 株式会社豊田自動織機
 藤田 茂徳 丸栄労働組合
 舟橋 史洋 トヨタ車体労働組合
 古川 憲 豊田自動織機労働組合
 水野 栄 豊田合成株式会社
 森谷 東也 トヨタ自動車労働組合
 矢野 悟 フタバ産業株式会社

第 17 期生

(27 名)

荒居 昭治 全ユニー労働組合
 石田 保志 名古屋鉄道労働組合
 井戸田章弘 トヨタ車体労働組合
 岩田 将弘 アイシン精機株式会社
 大澤 秀樹 東邦ガス労働組合
 大橋 俊介 トヨタ自動車株式会社
 加藤 章子 刈谷市役所
 加藤 明人 全トヨタ労働組合連合会
 木村 匡伸 デンソー労働組合
 古賀 博義 アイシン労働組合
 近藤 邦博 豊田市役所
 佐々木澄和 東海理化労働組合
 塩谷 武司 トヨタ紡織株式会社
 志岐 宣浩 豊田工機労働組合
 品川誠二郎 株式会社松坂屋
 田中 光明 アスモ労働組合
 野田 雅子 株式会社豊田自動織機
 長谷川真次 豊田自動織機労働組合
 樋山 卓造 東邦ガス株式会社
 前川 紘子 丸栄労働組合
 益田 寛 トヨタ車体株式会社
 増田 裕介 中部電力株式会社
 松井 正和 松坂屋労働組合
 松本雄一郎 株式会社デンソー
 水谷雄一郎 豊田合成株式会社
 三谷 勝行 トヨタ自動車労働組合
 村井 真一 中部電力労働組合

第 19 期生	(28 名)
---------	--------

新金 恵介	アイシン精機株式会社
泉 祐輔	東邦ガス株式会社
上田 治	トヨタ紡織株式会社
大田 秀幸	ジェイテクト労働組合連合会
荻野 聡子	松坂屋労働組合
小澤 真純	関東自動車工業株式会社
小野 彰之	株式会社東海理化
北村 美帆	デンソー労働組合
日下喜与美	アイシン労働組合
熊谷 靖公	株式会社デンソー
近藤 智也	全ユニー労働組合
坂西 記明	名古屋鉄道労働組合
佐々木麻子	刈谷市役所
高橋 慎二	豊田合成株式会社
高橋 哲也	全トヨタ労働組合連合会
筑尾 康範	丸栄労働組合
中條 圭祐	豊田市役所
塗師尾 充	トヨタ車体労働組合
中和田教仁	中部電力株式会社
堀内 清明	豊田自動織機労働組合
松浦秀登志	東邦ガス労働組合
松尾康史郎	愛知製鋼株式会社
三田地勇也	中部電力労働組合
皆川 和孝	トヨタ車体株式会社
森下 宏浩	トヨタ自動車労働組合
柳瀬 翼	株式会社豊田自動織機
山口 久雄	東海理化労働組合
吉清 一博	トヨタ自動車株式会社

産 政 塾

2009年8月 第10刷発行

編 者 財団法人 中部産業・労働政策研究会

住 所 〒471-0833

愛知県豊田市山之手8丁目131番地

全労済豊田会館 3階

T E L 0565-27-2731

印刷所 (有) 第一プリント社

製本所 山 本 製 本

塾 政 産

塾 長 東 正元

塾 生

アイシン精機株式会社	新金 恵介
東邦ガス株式会社	泉 祐輔
トヨタ紡織株式会社	上田 治
ジェイテクト労働組合連合会	大田 秀幸
松坂屋労働組合	荻野 聡子
関東自動車工業株式会社	小澤 真純
株式会社東海理化	小野 彰之
デンソー労働組合	北村 美帆
アイシン労働組合	日下喜与美
株式会社デンソー	熊谷 靖公
全ユニー労働組合	近藤 智也
名古屋鉄道労働組合	坂西 記明
刈谷市役所	佐々木麻子
豊田合成株式会社	高橋 慎二
全トヨタ労働組合連合会	高橋 哲也
丸栄労働組合	筑尾 康範
豊田市役所	中條 圭祐
トヨタ車体労働組合	塗師尾 充
中部電力株式会社	中和田教仁
豊田自動織機労働組合	堀内 清明
東邦ガス労働組合	松浦秀登志
愛知製鋼株式会社	松尾康史郎
中部電力労働組合	三田地勇也
トヨタ車体株式会社	皆川 和孝
トヨタ自動車労働組合	森下 宏浩
株式会社豊田自動織機	柳瀬 翼
東海理化労働組合	山口 久雄
トヨタ自動車株式会社	吉清 一博

中 部 産 政 研 松井 英治